宮城県文化財調査報告書第161集

山　王　遺　跡　Ⅰ

－仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書－

古墳時代中期遺物包含層　編

平成６年３月

宮城県教育委員会
建設省東北地方建設局

上段左：鹿角製刀装具（縮尺½），上段右：琴柱形角製品（縮尺½）
下段：卜骨（縮尺½）

序　文

宮城県には、数十万年を遡る時代から各時代にわたって数多くの埋蔵文化財が存在することが知られており、これらは豊かな自然と長い伝統の中で培われ、育まれてきた貴重な遺産であります。このような、かけがえのない先人の文化遺産を保存し活用するとともに、将来に伝えていくことは現代に生きる私たちの大きな責務と考えられます。

したがって、近年各自治体が歴史と風土に根ざした地域の活性化を推進するために、郷土にある文化財を再認識し、保護・保存するにとどまらずそれを特色ある地域づくりの拠点として整備し活用していこうとするところが多くなっていることは、まことに有意義なことと存じます。

改めて申すまでもなく、埋蔵文化財は文献などに記録されていない地域の歴史を、具体的な物質的資料に即して解明することができる貴重な歴史資料であるばかりでなく、その地域に住んでいる人々とって最も親しみやすく、精神的なよすがとなるものでもあります。

しかし、埋蔵文他財は土地と深く結び付いてこれまで保存されてきたという特質をもっており、そのため各種開発事業によって絶えず破壊・消滅のおそれにさらされております。当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

本書は開発関係機関等との協議・調整に基づき、平成2年度に当教育委員会が実施した発掘調査の成果を収録したものであります。これらの成果が地域の歴史の解明と文化財保護思想の高揚のために役立てていただければ幸いです。最後に、協議にあたり各遺跡の保護調整に理解を示され、調査にあたっても多大なご協力・ご支援をいただきました関係機関各位、および発掘調査にあたられた皆様に深く感謝申し上げる次第であります。

平成6年3月

宮城県教育委員会教育長　　鈴　鴨　清　美

例　　言

1. 本書は建設省東北地方建設局仙台工事事務所が担当する仙塩道路建設計画に伴う山王遺跡の発掘調査のうち、平成2年度に調査した古墳時代中期の遺物包含層の調査成果をまとめたもので、仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書の第1冊目にあたる。
2. 調査の主体は宮城県教育委員会であり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。調査には佐藤則之、菅原弘樹、天野順陽、高橋栄一が担当者としてあたった。
3. 本書における土色についての記述にあたっては『新版標準土色帳』（小山・竹原;1973)を利用した。
4. 本書の第1図は、5千分の1の多賀城市都市部計画図を複製して使用した。
5. 発掘調査の測量は、山王遺跡八幡地区に設定した原点の国家座標X＝-188,880.000、Y＝13,230.000をもとに東西・南北の基準線を延長し、調査区内に3m毎の方眼を組んで行った。
6. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々および機関から指導、助言を賜った（以下敬称略)。

岡村道雄（文化庁)、上原真人・松井章・小沢毅・寺崎保広・佐川正敏・岸本直文・次山敦（奈良国立文化財研究所)、西本豊弘（国立歴史民俗博物館)、辻秀人（東北学院大学)、辻誠一郎（大阪市立大学理学部)、寺沢薫・吉村和昭（奈良県立橿原考古学研究所)、田中清美・久保和士（大阪市文化財協会)、米田敏幸（大阪府八尾市教育委員会)、原田昌則（八尾市文化財調査研究会)、山本高照（和歌山県文化財課)、川畑誠（石川県立埋蔵文化財センター)、山川史子（石川県埋蔵文化財保存協会)、坂野和信（埼玉県埋蔵文化財調査事業団)、近藤敏（市原市文化財センター)、石本弘・飯村均・菅原祥夫（福島県文化センター)、斎藤義弘・高荒敦（福島市振興公社)、柳沼賢治（郡山市文化財調査事業団)、鈴木功（白河市教育委員会)、藤沼邦彦（東北歴史博物館準備班)、進藤秋輝（宮城県多賀城跡調査研究所)、高野芳宏、山田晃弘（東北歴史資料館)、白鳥良一・田中則和・太田昭夫・工藤哲司・小川淳一・佐藤洋・吉岡恭平・荒井格・主浜光朗・中富洋・渡部紀・赤澤靖章（仙台市教育委員会）、千葉孝弥・相沢清利・菊池豊（多賀城市埋蔵文化財調査センター)、芳賀英実（石巻市教育委員会)、高橋誠明（古川市教育委員会)、中野裕平（河南町教育委員会)、佐藤敏幸（矢

本町教育委員会)、藤沢敦・菊地佳子（東北大学埋蔵文化財調査室）、菊地芳朗（福島県立博物館）、日下和寿（東北大学大学院）

東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市埋蔵文化財調査センター

7. 竹製品の取り上げや保存処理、骨角器のX線撮影（ソフテックスM-1005S型を使用)に際しては、東北歴史資料館保存科学科の村山斌夫（現河北町立河北中学校)、手塚均（東北歴史資料館）、梅村聖一（現村田高校川崎分校)の諸氏に御協力を頂いた。

8. 本書の執筆は、以下のような分担で行い、佐藤則之・菅原弘樹が編集した。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ章2～7、第Ⅳ章Ⅰ・3……菅原

第Ⅲ章1、第Ⅳ章2……吾妻俊典

付編……辻誠一郎、住田雅和、伊藤由美子、植田弥生（大阪市立大学理学部)

なお、本書と平成2年度に刊行された調査概報（宮城県文化財調査報告書第141集）で内容が異なる場合は、本書がこれに優先する。

9. 本書中の遺物の実測・トレースは、土器を吾妻、骨角製品を菅原、木・竹製品を佐藤、古川一明、菅原、石製品を須田良平、佐久間広恵が行った。

10. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

Ⅰ　調査の概要 …… 1
　1　調査の経過 …… 1
　2　位置と環境 …… 1
Ⅱ　遺物包含層の調査 …… 5
　1　遺物包含層と周辺の微地形 …… 5
　2　ＳＸ230 遺物包含層 …… 7
Ⅲ　遺物包含層出土遺物 …… 13
　1　土器 …… 13
　2　骨角製品 …… 43
　3　木製品 …… 56
　4　竹製品 …… 60
　5　石製品 …… 62
　6　その他の人工遺物 …… 65
　7　動物遺体 …… 65
Ⅵ　考察 …… 70
　1　層の形成について …… 70
　2　土器の年代 …… 71
　3　ＳＸ230 遺物包含層をめぐる諸活動について …… 76
付編 …… 86
　1　植物遺体とその産状 …… 86
　2　植物遺体からみた古環境の復元 …… 92

挿　図　目　次

第１図　山王遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 2
第２図　河川の流路と遺構の立地 …… 3
第３図　ＳＤ777・2050A河川跡断面図 …… 6
第４図　ＳＸ230 断面図 …… 9
第５図　層位関係図 …… 11
第６図　ＳＸ230 各層の平面分布状況 …… 12
第７図　土器（1）－高坏 …… 16
第８図　土器（2）－高坏 …… 17
第９図　土器（3）－高坏 …… 18
第10図　土器（4）－高坏 …… 19
第11図　高坏の器高と口径 …… 20
第12図　土器（5）－坏鉢 …… 21
第13図　坏の器高と口径 …… 22
第14図　坏底部形態 …… 22
第15図　土器（6）－大型壺 …… 24
第16図　土器（7）－大型壺 …… 25
第17図　土器（8）－大型壺 …… 26
第18図　土器（9）－大型壺 …… 27

第19図　壺の器高と口径 …… 27
第20図　大型壺における口縁部から頸部の傾き方の割合 …… 27
第21図　大型壺における口縁端部形態の割合 …… 27
第22図　土器（10）－小形壺 …… 29
第23図　土器（11）－小形壺 …… 30
第24図　小型壺の器高が高いものと低いものの割合 …… 31
第25図　小型壺の低部形態の割合 …… 31
第26図　土器（12）－甕 …… 33
第27図　土器（13）－甕 …… 35
第28図　土器（14）－甕 …… 37
第29図　甕の器高口径 …… 39
第30図　甕Ⅰ類における口縁部の傾き方の割合 …… 39
第31図　甕Ⅰ類における口縁端部形態の割合 …… 39
第32図　土器（15）－その他の土器 …… 39
第33図　骨角製品（1）－鏃・錐・刺・刺突具 …… 45
第34図　骨角製品（2）－針・刀子把・篦・ヤス …… 48
第35図　骨角製品（3）－刀装具・琴柱形角製品・用途不明の角製品 …… 50
第36図　骨角製品（4）－用途不明の角製品 …… 51
第37図　肩甲骨細部名称 …… 53
第38図　骨角製品（5）－ト骨 …… 54
第39図　骨角製品（6）－ト骨 …… 55
第40図　木製品（1）－膝柄叉鍬・一木鋤 …… 57
第41図　木製品（2）－曲物・用途不明の木製品 …… 59
第42図　竹製品 …… 61
第43図　石製模造品・臼玉 …… 63
第44図　石器 …… 64
第45図　土師器の分類図 …… 72
第46図　南小泉式期の土器群 …… 75

挿　表　目　次

第1表　ＳＸ230の遺物包含層層位一覧表 …… 8
第2表　高坏の形態 …… 20
第3表　高坏坏部と脚部の組み合せ …… 20
第4表　高坏坏部と柱部の接合の特徴 …… 20
第5表　高坏柱部内面の特徴 …… 20
第6表　坏の形態 …… 22
第7表　小型壺の形態 …… 31
第8表　小型壺口縁部の器高に占める割合 …… 31
第9表　小型壺口径と胴部の最大径の割合 …… 31
第10表　大型壺の形態 …… 39
第11表　土器の層位別出土状況 …… 41
第12表　骨角製品の層位別出土状況 …… 43
第13表　ト骨の層位別出土状況 …… 53
第14表　石製模造品の層位別出土状況 …… 62

第 15 表　石製模造品の器種別石材内訳 …… 62
第 16 表　臼玉の最大径・最大厚別個数 …… 62
第 17 表　出土動物種名表 …… 66
第 18 表　同定結果一覧表 …… 67
第 19 表　ニホンジカの層位別出土状況 …… 68
第 20 表　イノシシの層位別出土状況 …… 68

挿　図　版　目　次

図版 1　遺跡および調査区の全景 …… 97
図版 2　ＳＸ230 遺物包含層の全景・断面 …… 98
図版 3　各層の遺物出土状況（2、11 層）…… 99
図版 4　各層の遺物出土状況（9 層）・遺物の出土状況（膝柄叉鍬、一木鋤）…… 100
図版 5　遺物出土状況（ザル、カゴ、ト骨）…… 101
図版 6　土器（1）－高坏 …… 102
図版 7　土器（2）－高坏 …… 103
図版 8　土器（3）－高坏・坏・鉢 …… 104
図版 9　土器（4）－大型壺 …… 105
図版 10　土器（5）－大型壺・小型壺 …… 106
図版 11　土器（6）－小型壺 …… 107
図版 12　土器（7）－甕 …… 108
図版 13　土器（8）－甕 …… 109
図版 14　土器（9）－甕・その他の土器 …… 110
図版 15　骨角製品（1）－骨鏃・錐・弭・刺突具 …… 111
図版 16　骨角製品（2）－刀子把・針・篦 …… 112
図版 17　骨角製品（3）－刀装具・琴柱形角製品・用途不明の角製品 …… 113
図版 18　骨角製品（4）－ヤス・用途不明の角製品・ト骨 …… 114
図版 19　骨角製品（5）－ト骨 …… 115
図版 20　骨角製品（6）－ト骨 …… 116
図版 21　骨角製品（7）－ト骨 …… 117
図版 22　加工痕や解体痕、噛み痕のある骨角 …… 118
図版 23　木製品（1）－膝柄叉鍬・一木鋤・用途不明の木製品 …… 119
図版 24　木製品（2）－曲物・用途不明の木製品 …… 120
図版 25　竹製品－ザル・カゴ・堅櫛 …… 121
図版 26　石製模造品・臼玉 …… 122
図版 27　石器・鉱滓 …… 123
図版 28　動物遺体－ニホンジカ …… 124
図版 29　動物遺体－その他の動物遺体 …… 125
図版 30　山王遺跡出土の大型植物遺体（1）…… 126
図版 31　山王遺跡出土の大型植物遺体（2）…… 127
図版 32　山王遺跡出土の大型植物遺体（3）…… 128
図版 33　山王遺跡出土の木材遺体 …… 129

I　調査の概要

1　調査の経過

仙塩道路は、亘理町中泉を起点とし、岩手県宮古市に至る仙台湾高規格幹線道路の一部で、東北地方建設局仙台工事事務所が建設を担当する仙台松島道路利府中Ｉ．Ｃ．から仙台市中野に至る7．1ｋｍの路線である。

仙塩道路の計画決定に伴い、宮城県教育委員会は、東北地方建設局仙台工事事務所からの依頼を受けて、昭和57年3月に路線敷地内の分布調査、昭和63年12月に山王および市川橋遺跡の確認調査（第1次調査）を実施した。その結果、山王遺跡では極めて濃密な遺構の存在が確認されるとともに、自然堤防上に隣接する市川橋遺跡、六貫田遺跡においても、路線敷のほぼ全域に遺構の存在が推定された。その調査対象面積は約40haにおよぶため、埋蔵文化財の保護のみならず、調査の費用や期間を考慮し、東北地方建設局に対して当初の盛土工法から高架工法への設計変更を申し入れた。これを受けて、仙台工事事務所は、東北地方建設局、建設省との協議を経て、起点部の国道45号線から利府町の丘陵地までの3．7ｋｍを長大な高架橋（多賀城高架橋）で結ぶ工法に計画変更することとなった。

道路建設に伴う本格的な調査は平成元年度より継続して行われ、これまでに山王遺跡八幡・多賀前・伏石地区、市川橋遺跡中谷地地区の調査を実施している。

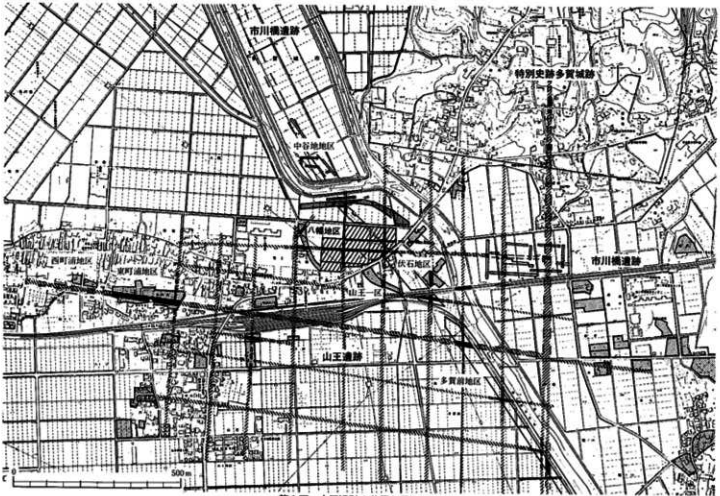
八幡地区の調査は、多賀城Ｉ．Ｃ．予定地を対象としたもので、宮城県教育委員会と多賀城市教育委員会が分担、受託する形で行われ、これまでに調査対象地約43，000㎡のうちの約19，000㎡を調査した。宮城県教育委員会が担当した各年度の調査は次のとおりである。

昭和63年度（第１次調査）	試掘	500㎡
平成元年度（第２次調査）	Ａ・Ｂ区	7，000㎡……概報刊行（県報告書第138集）
平成２年度（第３次調査）	Ｂ・Ｃ区	5，500㎡……概報刊行（県報告書第141集）
平成３年度（第４次調査）	Ｃ・Ｄ区	5，600㎡……概報刊行（県報告書第147集）
平成４年度（第５次調査）	Ｄ区	400㎡

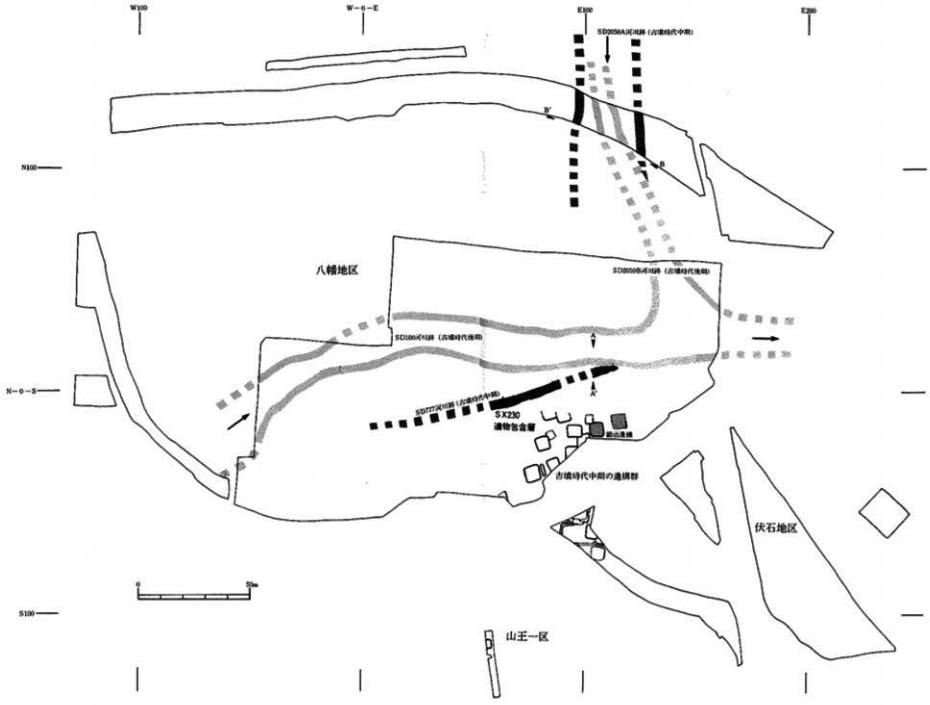
本書は、平成２年度にＢ区で検出された古墳時代中期の遺物包含層（ＳＸ230）の調査成果をまとめたもので、山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書の第1冊目にあたる。

2　位置と環境

多賀城市は市域のほぼ中央を流れる砂押川によって東・北部の丘陵部と、南・西部の沖積平野部とに二分される。平野部は仙台平野の北東部にあたり、海岸まで広がっている。



第1図　山王遺跡の位置と周辺の遺跡



第２図　河川の流路と遺構の立地

山王遺跡は仙台平野の北東端に位置し、砂押川と七北田川とによって形成された東西に長い自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は多賀城市山王および南宮を中心とする東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる。八幡地区は多賀城市南宮字八幡に所在し、遺跡の北東端に位置する。付近の標高は約4mである（第1図）。周辺には北東約1kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡をはじめ、館前遺跡、市川橋遺跡大臣宮地区、多賀城廃寺など、多賀城と密接な関連をもつ遺跡や寺院が存在しており、本遺跡は古代の国府周辺地域の様相を解明する上で重要な位置を占めている。

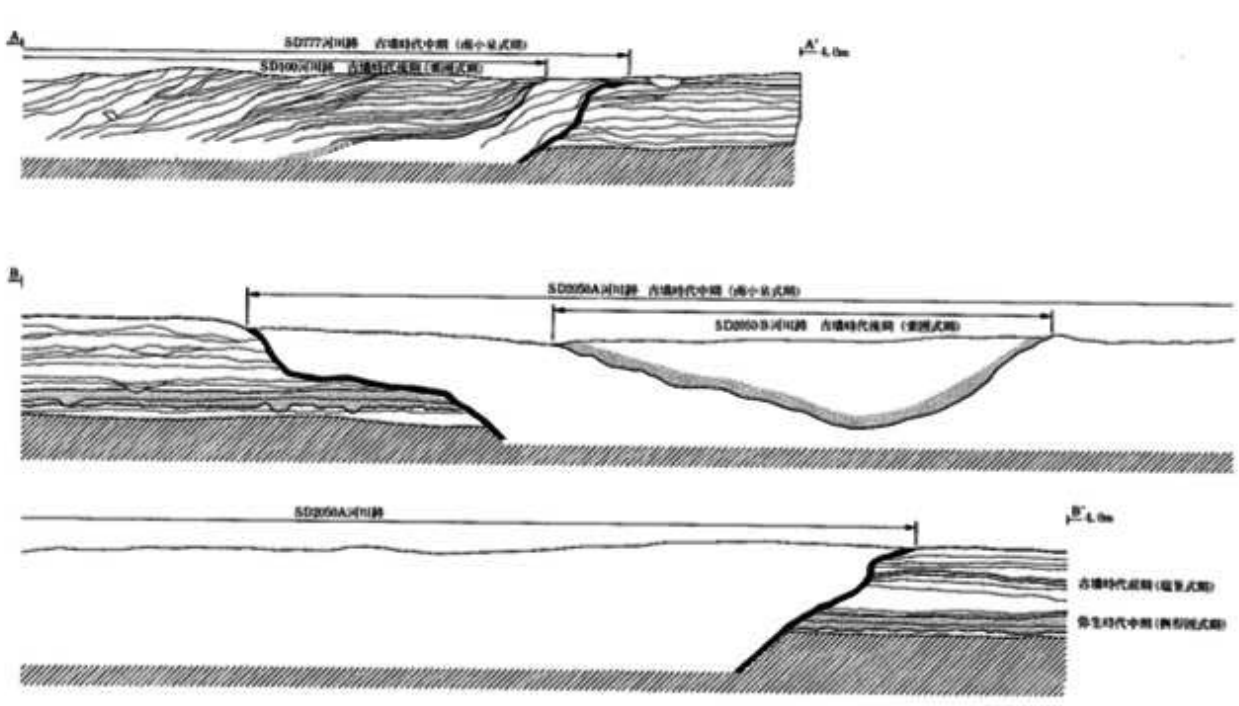
山王遺跡はこれまでに多くの調査が実施され、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺構および遺物が多数検出されている。古墳時代の遺構・遺物は山王一区・山王二区・西町浦・東町浦・八幡の各地区で検出されている。八幡地区では中期と後期の竪穴住居跡が多数検出され、とくに中期には鍛冶遺構の存在も知られている。また西町浦地区では中期の土壙墓や竪穴住居跡とともに多量の石製模造品が出土し、東町浦地区では同時期の木組み遺構が検出されている。一方、奈良・平安時代については多賀城跡との関連から遺構・遺物とも非常に多く、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙などが多数検出されている。東町浦地区では多賀城跡外郭南辺築地とほぼ平行する幅12mの東西方向の道路跡が、また八幡地区では多賀城跡政庁中軸線とほぼ一致する東西および南北方向の道路跡が検出されている。そして千刈田地区では国守の館跡とみられる建物跡が発見されている。

II　遺物包含層の調査

1　遺物包含層と周辺の微地形

ＳＸ230遺物包含層は、東西に延びる微高地上に立地し、調査区のほぼ中央を西から東に流れるＳＤ777河川跡の南岸落ち際に堆積したものである。古墳時代後期以降の遺構の検出面となった黄褐色のシルト質砂層に覆われ、斜面上方では古代の道路側溝（北2道路北側溝）によって一部壊されている。

ＳＤ777は、河川の沖積作用によって形成された微高地上をさらに開析して流れているため、遺物包含層が形成されなかった場所では、該期の河道を平面的に捉えることはできず、部分的に河川の南岸落ち際を確認できたにすぎない。ただし、都市計画道路建設予定地の調査（Ⅱ区）で検出された南流するＳＤ2050Ａ河川跡とは年代的にみて一連のものであり、ＳＤ777とＳＤ2050Ａは調査区の東端部でこれと合流するものとみられる（第2図）。合流後の流路については、今のところ調査区東側の状況が明らかではないが、ＳＤ100およびＳＤ2050Ｂの流路や、ＳＤ2050Ａの南延長にあたる伏石地区ではこれらの延長を確認できなかったことから、合流後は東に向かって流れていた可能性が高い。川幅は、ＳＤ2050Ａが



第3図　SD777・2050A河川跡断面図

上幅で約30mあり、ＳＤ777については北岸を検出していないため明らかではないが、少なくとも上幅で10m以上の規模をもつ。河川の底面は、いずれも湧水のため確認できていないが、標高で1m以下である。これらの河川跡は、遺跡の北から東を流れる砂押川の旧河道およびこれに合流する河川跡と考えられる。

遺物包含層が形成されない場所における河川堆積土の層相はやや還元化した粗砂とスクモ（未分解植物質層）の自然堆積層で、炭化物や灰、焼土などの含有物を含まない均質な層からなる（第3図）。遺物は、ＳＸ230の周辺およびＳＤ2050Ａの底面で若干の土器が出土しているものの、その他の場所では今のところ検出されていない。

なお、ＳＸ230の南側の微高地上からは、同時期の竪穴住居跡や鍛冶工房跡などの遺構群が検出されている（千葉；1992）。一方、遺物包含層が形成された後のＳＤ777は、急速に黄褐色のシルト質砂の自然堆積層がこれを覆っており、新たに形成されたＳＤ777埋没後の微高地上には古墳時代後期以降の集落が営まれている（佐藤・菅原；1991、菅原；1992）。このことからＳＸ230およびＳＤ777を覆う砂層（1層）は、かなり短期間に堆積したものと考えられる。

2　ＳＸ230遺物包含層

(1)　調査の方法と経過

調査は、ＳＸ230遺物包含層およびＳＤ777河川跡を覆う砂層を除去し、包含層を形成する各層の平面的な広がりと上下関係を捉えながら行った。層の識別にあたっては、マトリックスとなっている堆積層の土色、土質、しまり具合をはじめ、遺物の含有状態、炭化物や灰、焼土といった含有物の違いなどをもとに行い、調査区中央に設定した断面観察用のベルトを挟んで東で33枚、西で58枚を確認した。最終的には東西約13m、南北約9mの範囲を調査した。包含層全体における最大厚は約70ｃｍで、深いところで古代の遺構面から1.8m程を測る。

遺物の取り上げに際しては一部の遺物（一括土器・木製品など）についてのみ平面的な位置を記録した。その他のものについては“斜面上方”“斜面下方”“層の末端部”など大まかに分けて取り上げただけで、個々の平面的な位置は捉えていない。これは各層が一括して廃棄されたまとまりであり、その中での位置関係は意味を持たず、また後述のように本来の位置から移動したものもあると考えられるからである。また、手掘り発掘では検出不可能な微細遺物を抽出するため、土壌は総て採取し、4mmのフルイを用いて水洗選別（一部1mmでも実施）を行った。ただし、ベルトを挟んで西側の調査区では各層から整理用平箱（内測長さ54.0×幅33.5×高さ14.2cm）で1～2箱を最低基準として、層のまとまりや遺物の多寡に応じた量の土壌を適宜採取した。

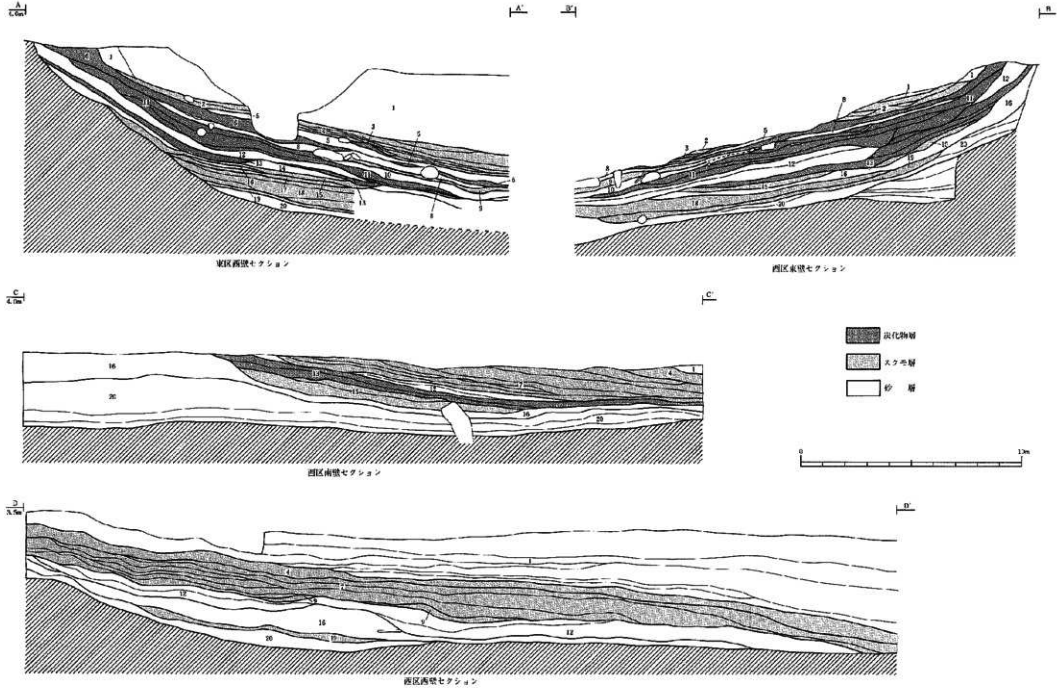
(2) 層の堆積状況

ＳＸ230遺物包含層が形成された場所では、ＳＤ777河川跡の南岸はやや北西に向かって傾斜している。斜面は上方で20～30°、下方で約10°の傾斜角をもち、斜面上方では下層ほど傾斜が急である（第4図）。東西の調査区で認識された各層は、いずれも2～15cmの薄い層からなるが、層相の違いと平面的な広がりによって、炭化物を主体とした、もしくは炭化物を多く含む4枚の人為堆積層（3・6・11・13層）と16枚の粗砂およびスクモからなる自然堆積層に大別される（第1表・第5図）。包含層は、これらの層群が互層をなして形成され、斜面上方から下方に向かって堆積している。炭化物層は層の傾斜が緩やかになる部分で最も厚く、縁辺部で薄いといったレンズ状の堆積をしているのに対して、砂・スクモ層は概して斜面下方に向かって厚く、斜面下では水平に堆積するといった傾向が認められる。

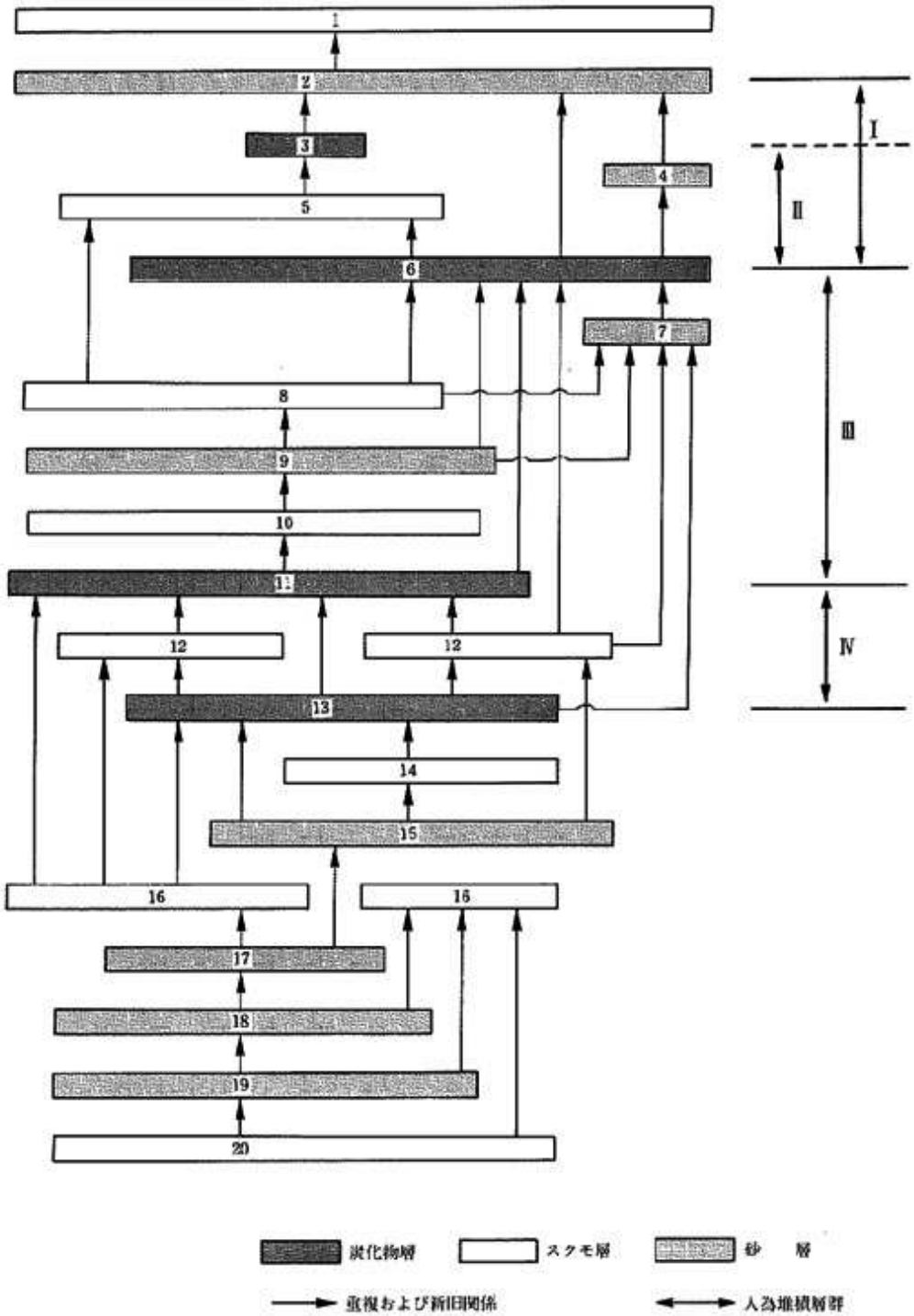
こうした堆積状況の違いは、堆積層中に含まれる植物遺体の分析結果からも明らかであり、とくに灰や焼土を多く含み、主として炭化物をマトリックスとした11層は水流によっ

層位	層名	土色	土質	含有物	遺物	備考
1	砂層	2.5Y5/4 黄褐	シルト質砂	なし	なし	シルト質砂と粗砂が互層をなす。
2	砂＋スクモ層	10GY3/1 暗緑灰	砂	炭化物がやや多く、木片等が目立つ。	土器多い。	しまりのない粗砂とスクモが薄く互層をなす。粗砂は遺物や含有物を含まない。
3	炭化物層	N1.5/0 黒	炭化物	炭化物のブロックで、灰を少量含む。		
4	砂＋スクモ層	5Y4/1 灰	砂	なし	土器若干。斜面下部で縄紋文飾出土。	やや還元化した砂とスクモからなる。南西部にのみ分布する。
5	砂層	10GY4/1 暗緑灰	粗砂	斜面上部で炭化物、木片が目立つ。		
6	炭化物層	2.5Y2/1 黒	炭化物	炭化物を非常に多く含む。	土器、木材等多い。貝を少量含む。	径1cm 以下の細小粒子をやや多く含む。
7	砂＋スクモ層	7.5GY4/1 暗緑灰	砂	部分的に炭化物を含む。	土器小破片若干。	やや還元化した砂とスクモからなる。4層と同様に南西部にのみ分布する。
8	砂層	2.5Y4/3 オリーブ褐	シルト質砂	炭化物を少量含む。	土器、木材等を含む	シルト質の黄色砂。やや還元化している。
9	スクモ層	7.5Y2/2 黒褐	スクモ	炭化物、木片を多量に含む。	土器、ザル、木製品等出土。	
10	砂層	10G3/1 暗緑灰	砂	なし	土器、獣骨が目立つ	粗砂と薄いスクモが互層をなす。
11	炭化物層	N1.5/0 黒	炭化物	炭化物、焼土、灰を非常に多く含む。	人工遺物、自然遺物とも多量に含む。	焼土・灰のブロックで取り上げ可能である。
12	砂層	5GY4/1 暗オリーブ灰	砂	スクモを多く含む。	土器、獣骨等。	斜面下部ではスクモと互層をなす。
13	炭化物層	7.5Y2/2 オリーブ黒	炭化物	炭化物、焼土を多く含む。	土器、獣骨等多量に含む。	マトリックスでは砂とスクモからなり、斜面下部では互層をなす。
14	砂層	10GY4/1 暗緑灰	砂	なし	ほとんどなし	しまりのない粗砂からなる。
15	スクモ層	7.5Y2/2 黒褐	スクモ	部分的に炭化物を少量含む。	ほとんどなし	
16	砂層	5GY4/1 暗オリーブ灰	砂	炭化物を極小含む。	土器、獣骨少量含む	やや還元化した粗砂からなる。
17	砂＋スクモ層	7.5Y2/2 オリーブ黒	砂	スクモを多く含む。	ほとんどない	
18	砂＋スクモ層	10GY4/1 暗緑灰	砂	なし	土器、獣骨等ごく少量。	粗砂と薄いスクモ（厚さ1～5 mm）が互層をなしているが、明瞭な区別はできない。
19	スクモ層	2.5Y5/6 黄褐	スクモ	木片、未分解の植物遺体を多く含む。	土器を少量含む。	調査区全体に分布し、斜面下部では植物遺体が卓をなす。
20	砂層	10GY4/1 暗緑灰	砂	なし	完形の土器や繊木製品等ごく少量。	柔らかく、しまりのない粗砂からなる。
21	砂層	7.5GY4/1 暗緑灰	砂	なし	土器極小含む。	SX230 とは異なる斜面で堆積している。斜面下部ではほぼ完形の土器が出土している。

第１表　ＳＸ230遺物包含層層位一覧表



第４図　ＳＸ230遺物包含層断面図

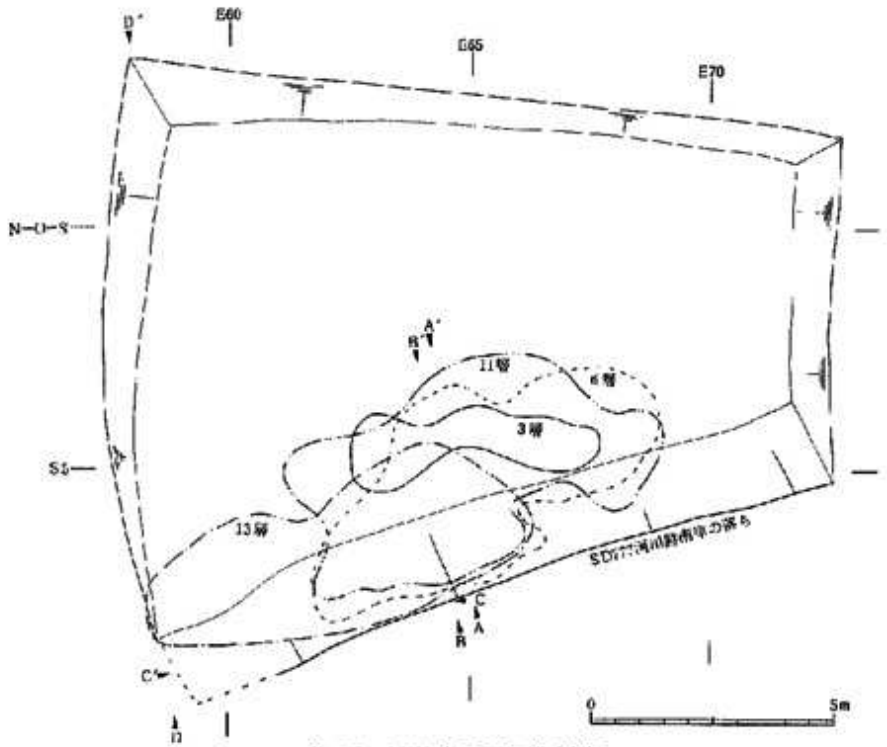

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
12
13
14
15
16
16
17
18
19
20
I
II
III
IV
炭化物層
スクモ層
砂　層
重複および新旧関係
人為堆積層群

第5図　層位関係図

てもたらされた外来性の植物遺体や花粉をほとんど含まない、短期間の堆積であることが明らかになっている。一方、砂・スクモ層は、いずれも水流のある環境で埋積した川砂および掃き寄せ型の自然堆積物からなることが明らかになっており、これらはＳＤ777と一連の河川堆積土と考えられる。包含層を形成する各層群のマトリックスとなる埋積土の詳しい形成要因や堆積環境等については、付編を参照されたい。

(3) 層の平面分布

包含層を形成する層群は、平面的にも炭化物層と砂・スクモ層とで異なった堆積状況を示している。砂・スクモ層には包含層全体におよぶもの、斜面上方あるいは下方のみに分布するものなどがあり、平面的な堆積状況も一様ではない。一方、炭化物層は、いずれも北西に傾斜する斜面に対して北東方向に向かって堆積している。いずれも長径が5～8m、短径が2～4mの範囲に分布し、しかも砂・スクモ層を挟んで、ほぼ同じ場所に繰り返して層が形成される傾向が認められる（第6図）。



第６図　ＳＸ230各層の平面分布状況

(4) 遺物の出土状況

遺物は、層そのものがきわめて薄いため帰属する層位の認定が難しいものもあるが、一部の層を除きほぼ全層から出土した。とくに、炭化物層からは、多量の土器をはじめ各種の遺物がまとまって検出されている。遺物の平面的な出土状況としては、斜面の上位ほど遺物量が多く、面的にもまとまりをもつ。斜面の下位では遺物が広い範囲に分布する反面、量的には少なく破片資料が多い傾向にある。また、斜面下の河川埋積土中から、完形に近い土器が散発的に出土することもある。

以上のように、ＳＸ230は人為堆積層と、これと互層をなす河川堆積土によって形成されている。河川の落ち際の斜面で、しかも水流の影響を受けやすい堆積環境にあるが、層の堆積状況や平面分布、遺物の出土状況からみて、認識し得た4枚の炭他物層は概ね本来のまとまりを保持しているものと考えられる。

Ⅲ　遺物包含層出土遺物

遺物包含層からは多量の土器をはじめ、骨角製品、木・竹製品、石製品、動植物遺体など多種多様の遺物が出土した。これらの遺物の多くは、通常の遺跡では腐朽・消滅し残らない有機質のものであり、個々の遺物のみならず、これまで空白であったこの時期における諸々の活動を明らかにする上でも貴重な資料である。以下、各種遺物について述べる。

1　土器

出土した土器には、縄文もしくは弥生土器・土師器・須恵器がある。量的には、大部分を土師器が占め、縄文もしくは弥生土器・須恵器はそれぞれ1点と2点である。このうち、図示したものは、土師器130点・縄文もしくは弥生土器1点・須恵器2点である。順に説明する。

〔1〕土師器

土師器には高坏・坏・鉢・壷・甕・ ・ミニチュア・その他がある。なお、甑と考えられる個体は破片を含め確認することができなかった。それぞれの個体数（註1）は、高坏116点・坏23点・鉢1点・大型壷40点・小型壷64点・甕126点・ 1点・ミュチュア8点・その他2点である。以下それぞれの形ごとに、各々分類し説明する。

なお、各層位ごとの内容は第11表に示した。また、器面調整の観察基準については岩切鴻ノ巣遺跡の見解（白鳥・加藤他:1974）に従った（註2）。

【高坏】高坏として図示したものは35点ある。多くは、坏部と脚部に分かれており、坏部と脚部を別々に分類する。坏部と脚部の関係がわかるものは、その後に説明を加える。

〈坏部の分類〉底部と胴部を画す境の有無、更に境のあるものはその特徴から、境のないものは胴部から口縁部へかけての形状の違いから細分する。

I類：底部と胴部が境によって区別されるもの

A類:外面に突帯を持つもの（15・16）

胴部から口縁部へ外反しながら立ち上がる。内外面ともヨコナデもしくはナデである。いずれも内外面に赤彩されている。

B類：外面に段を持つもの（1～5・18）

胴部から口縁部へ、外傾・外反・内湾の3種の立ち上がり方が認められる。内外面ともヨコナデとヘラナデ、もしくはナデのものを主体とするが、ケズリのものもある。

C類：外面に稜を持つもの（6～14・19・20）

胴部から口縁部へ、外傾・外反・内湾の3種の立ち上がり方が認められる。内外面ともヨコナデとヘラナデもしくはナデのものを主体とするが、胴部外面がハケメのものもある。

II類：底部と胴部が区画によって区別されないもの

A類：胴部と口縁部の境が明瞭なもの（21）

底部から口縁部へ強い膨らみを持ちながら立ち上がる。内外面ともヨコナデとナデである。

B類：胴部から口縁部へ明瞭な境をもたないもの（22・23）

底部から口縁部へ外反しながら立ち上がるものと、緩やかに外傾するものとがある。内外面ともナデもしくはヨコナデとナデである。

〈脚部の分類〉円窓の有無から大別し、更に形態の違いから細分する。

1類　円窓があるもの

a類　円窓が柱状部と裾部の境にあるもの。（24）

円窓が2個残存する（推定4孔）。裾端部は平滑な面を形成する「面とり状」を呈し、柱状部へ緩やかに立ち上がる。器厚は特に均質で薄く、色調は黄色褐色である。他の土師器と質感を異にする。内外面ともヨコナデとナデである。

b類　円窓が柱状部にあるもの。（17）

円窓が1個残存する。外面はナデ、内面はケズリである。外面は赤彩される。

2類　円窓が確認できをいもの

a類　柱状部が円錐形のもの

①類　柱状部と裾部の境をもたず連続的に移行するもの（25・26）

外面はヘラナデもしくはナデ、内面はハケメとナデである。

②類　柱状部と裾部が弱い境によって区別され緩やかに移行するもの（1・6・27～29）

柱状部から裾部へ外反しながら広がる。外面はナデ、内面は粘土の積み痕やシボリメが残るものと、ヘラナデもしくはナデのものがある。

③類　柱状部と裾部が屈曲によって明瞭に区別されるもの（2～4・7～13・30～34）

裾部は外傾もしくは外反しながら広がる。外面はヨコナデやナデ、内面は粘土の積み痕やシボリメが残るものと、ケズリ、ヘラナデもしくはナデのものとがある。

b類　柱状部が円筒形のもの（5・35）

柱状部と裾部の境が屈曲によって明瞭に区別される。柱状部外面はナデ、内面はケズリもしくはナデである。

《高坏の傾向》

器の全容がわかるものに、ＩＢ2ａ②類（1）、ＩＢ2ａ③類（2～4）、ＩＢ2ｂ類（5）、ＩＣ2ａ②類（6）、ＩＣ2ａ③類（7～13）がある。様々な形態が認められるが、主体となるのはＩＢ2ａ③類とＩＣ2ａ③類である。

各部位ごとに見ると坏部では、ＩＣ類が過半（約55%）を占め、ＩＢ類と合わせると大半（約86%）を占める。口縁部の傾きは、外反するものが主体である。

脚部では2ａ類が圧倒的に多く（約90%）、その中でも2ａ③類の占める割合が大きい。

法量では、器高約14ｃｍ・口径約20ｃｍの大きさに集中する傾向がある（第11図）。但し、この範疇に入らないと推定される明らかに小形のものも2点（25・33）ある。

器面調整は口縁部にヨコナデ、地の部位にナデが多用される傾向がある。

〈柱状部の成形についての傾向〉

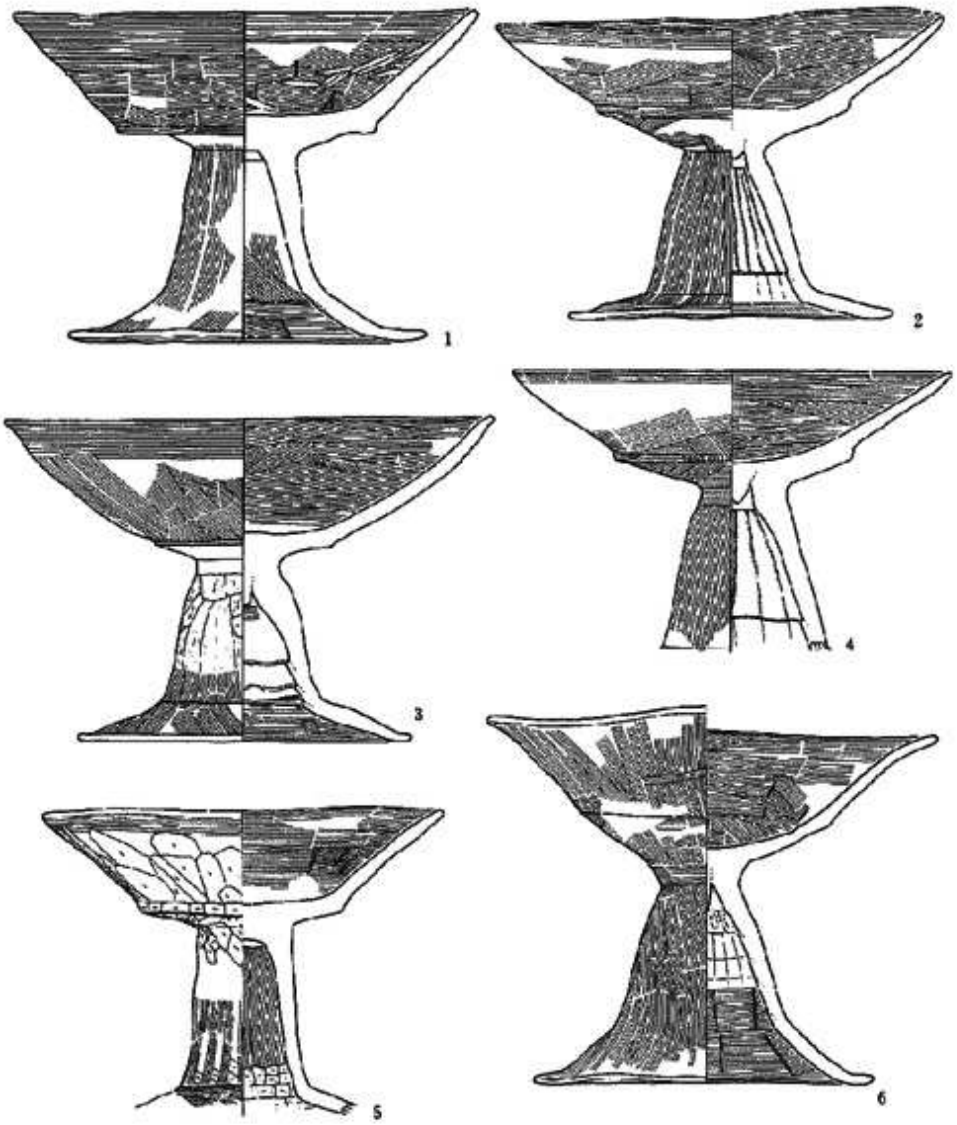
柱状部の成形の痕跡には、ⅰ内面に粘土の積み痕跡が残るもの、ⅱ内面に粘土のシボリメが筋状に残るもの、ⅲ内面の上部にシボリメ、下部に粘土の積み痕跡が残るもの、ⅳ前にあげた3様、もしくは別の技法の後、ナデもしくはケズリによって全面もしくは部分的に調整を加えるもの、の4者がある。

それぞれの割合をみると、ⅳが、ⅰ～ⅲの成形の痕跡を残すものを若干上回る傾向にある。成形の痕跡を残すものの中では、ⅲの割合が特に高い。

脚部の分類と比較すると2ａ①類・2ｂ類はいずれもⅳで調整されるのに対し、2ａ③類には各類が見られ、成形の痕跡を残すものが多いことが窺える（第5表）。

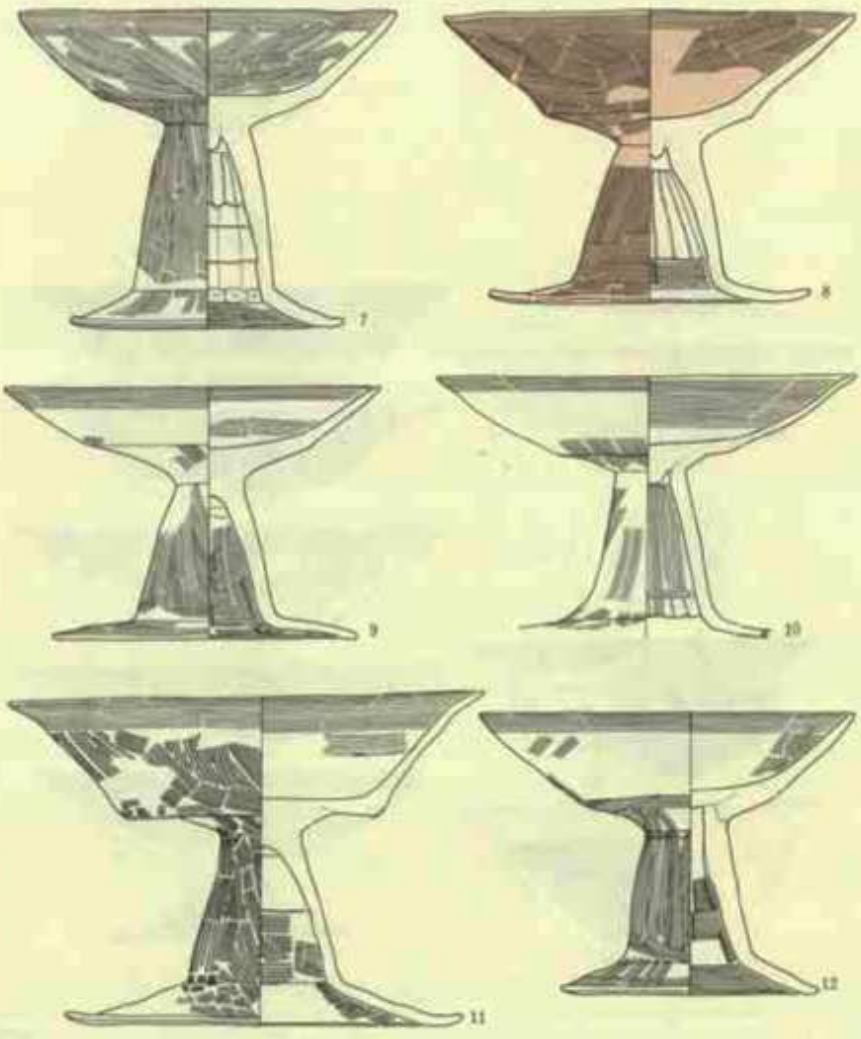
〈坏部と脚部の接合の傾向〉

坏部と脚部の接合の痕跡には、ⅰ棒状の粘土の挿入によって坏底部と筒状の柱状部と接合するもの、ⅱ柱状部の上端がすぼまり柱状部内面に接合部分が見られないもの、ⅲ以上の2者もしくはそれ以外の接合方法がとられた後に、柱状部内面がナデつけられるもの3者があり、ⅰが大半を占める。



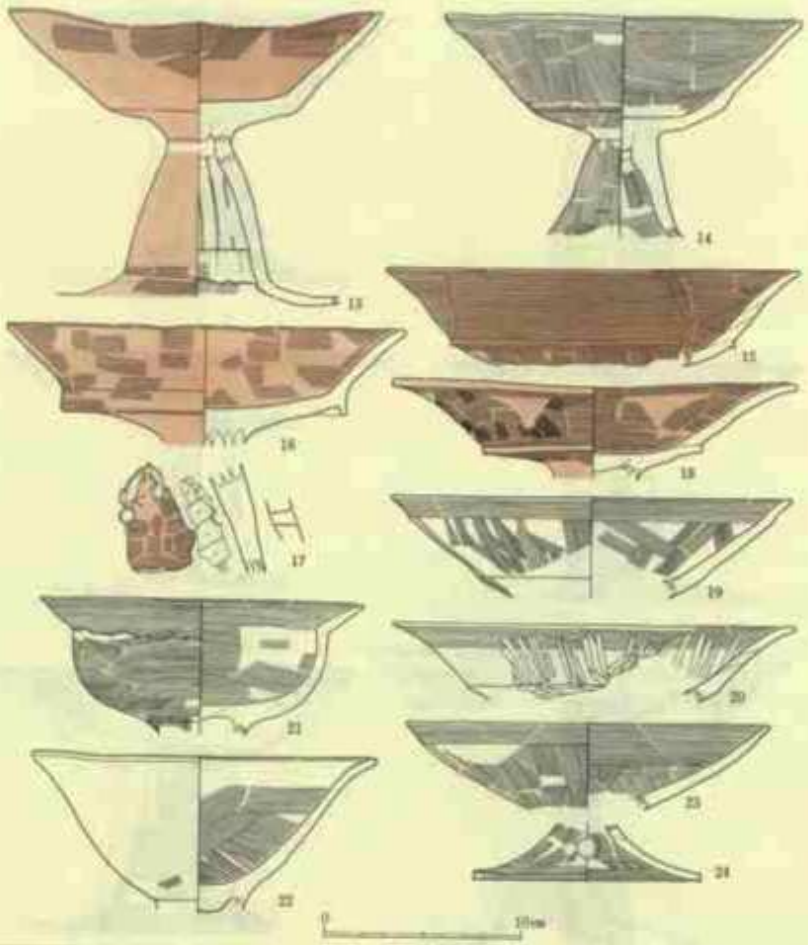
番号	図	分類	中	内	生	図	電子	出	量 (cm)					備考	写真図版	登録番号
			外	面	外	面		口	口	厚	底	高				
1	6	土師器高坏	[外] 口・脚～ヨコナデ・ナデ、底～ヘラナデ [脚] ナデ	[外] ヘラナデ・ナデ・ヨコナデ→ヨコナデ [脚] ヘラナデ・ナデ	広島・中	広島・中	5/3	19.9	5.3	17.3	14.7	11層+3層+5層+6層	6-1	8-28
2	3	土師器高坏	[外] 口・脚～ヨコナデ、ヘラナデ・ナデ、底～ナデ	[外] ヨコナデ→ナデ [脚] 底～シボリ目、底～ヨコナデ	暗灰	暗灰	5/3	18.1	3.1	15.5	14.4		6-2	8-26
3	2	土師器高坏	[外] 口・脚～ヤスリ・ヨコナデ→ナデ、底～ナデ [脚] ヨ～ラスリ→ナデ、底～ナデ	[外] ヘラナデ・ナデ [脚] 目～私立線接合、底～ナデ	灰白	灰白	6/5	19.9	4.1	14.4	14.4		6-3	8-44
4	1	土師器高坏	[外] 口・脚 ヨコナデ・ナデ、底 ナデ [脚] 底 ナデ [脚] 底～ナデ、脚～ヨコナデ・ナデ	[外] ヨコナデ→ナデ [脚] 底～シボリ目・私立線接合 [脚] 底～シボリ目・私立線接合→ヤスリ、底～ナデ	広島・中	暗灰	2/3	18.8	3.1	-	12.10上			8-46
5	4	一般高坏	[外] 口・脚～ヨコナデ→ヤスリ、底～ヤスリ [脚] 目～ヤスリ→ナデ、底～ナデ	[外] ヨコナデ→ヘラナデ・ナデ [脚] 底～ナデ・ヤスリ、底 ヤスリ	暗灰	灰白	3/5	17.3	4.4	-	11.10上	2層+3層+5層+6層		8-78
6	5	土師器高坏	[外] ヘラナデ→ナデ [脚] ヘラナデ	[外] ヘラナデ [脚] 目～シボリ目→ヘラナデ、底～ヘラナデ→ヨコナデ	黄橙	黄橙	4/24	19.5	3.1	14.6	16.3		6-4	8-62

第7図　土器 (1)

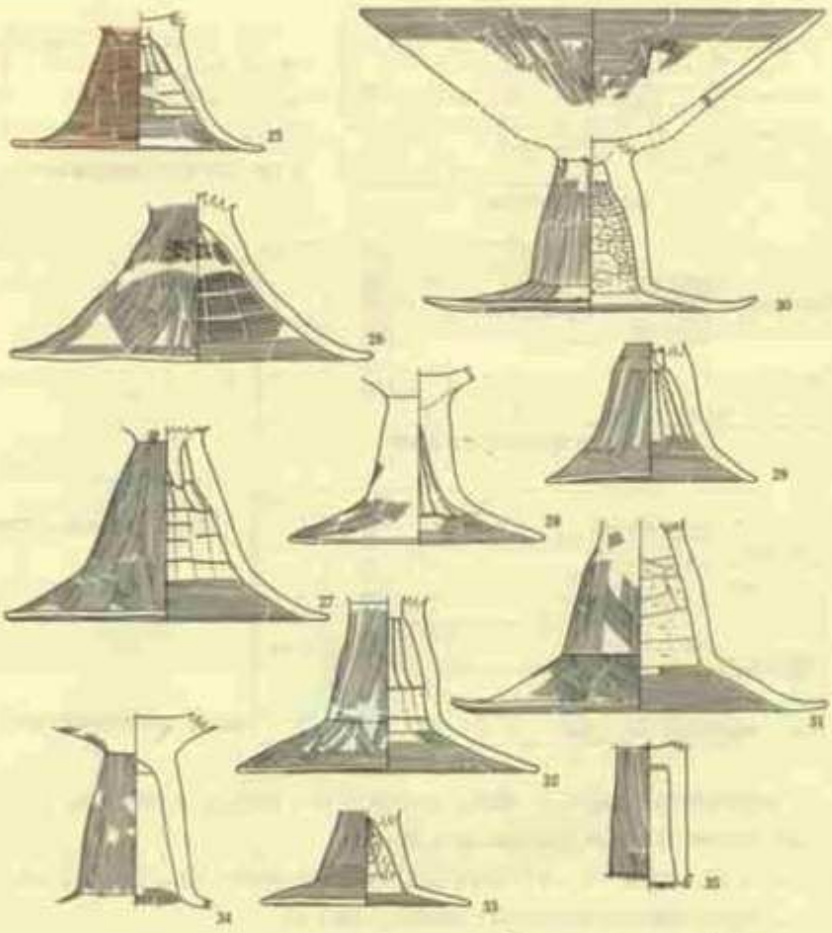


番号	種別	出土地点	器形		文様		色調		胎土	焼成	計測値						備考	写真図版	挿図番号
			口縁	胴部	口縁	胴部	口縁	胴部			口径	器高	底径	脚径	脚高	残存			
7	土師	1号竪穴住居跡	口縁～脚	口縁～脚	無	無	橙	橙	精良	良好	21.0	15.0	8.0	10.0	6.0	完形		第7図 1	第8図 7
8	土師	1号竪穴住居跡	口縁～脚	口縁～脚	無	無	橙	橙	精良	良好	17.0	13.5	6.5	10.0	6.0	完形	内面黒色 第7図 2	第7図 2	第8図 8
9	土師	1号竪穴住居跡	口縁～脚	口縁～脚	無	無	橙	橙	精良	良好	20.0	17.0	7.5	12.0	6.0	完形	第7図3 第7図	第7図 3	第8図 9
10	土師	1号竪穴住居跡	口縁～脚	口縁～脚	無	無	橙	橙	精良	良好	22.0	15.0	9.0	-	6.0	口縁～脚	第7図4 第7図	第7図 4	第8図 10
11	土師	1号竪穴住居跡	口縁～脚	口縁～脚	無	無	橙	橙	精良	良好	19.0	14.0	7.0	11.0	5.5	完形	第7図5 第7図	第7図 5	第8図 11
12	土師	1号竪穴住居跡	口縁～脚	口縁～脚	無	無	橙	橙	精良	良好	18.0	13.0	6.0	9.0	5.0	完形	第7図6 第7図	第7図 6	第8図 12

第8図　土器（2）



第9図　土器（3）



第10図　土器（4）

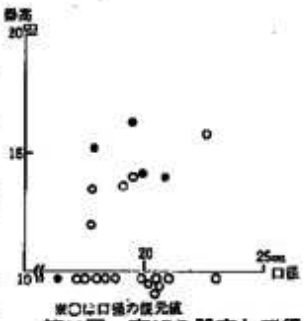
第2表　高坏の形態

	脚部2a類	脚部2b類
坏部ⅠB類	9点（2a②類 1点）（2a③類 5点）	1　点
坏部ⅠC類	13点（2a②類 1点）（2a③類 9点）	
坏部ⅡB類	2点	

第3表　高坏坏部と脚部の組み合わせ

		1a類	1b類	2a類	2b類
整形されないもの［74点］	脚部に接合痕が突き出るもの　［59点］			58点（2a①類 1点）（2a②類 3点）（2a③類 29点）	
	脚部に接合痕が突き出ないもの　［15点］			14点（2a①類 1点）（2a③類 3点）	1点
整形されるもの　［27点］				23点（2a①類 1点）（2a②類 1点）（2a③類 13点）	4点
欠損部分が多く様相が理解できないもの　［15点］		1点	1点	13点	

第4表　高坏坏部と柱部の接合の特徴



第11図　高坏の器高と口径

		1a類	1b類	2a類	2b類
調整の痕跡が認められないもの［33点］	粘土の積み痕跡のみが認められるもの　［2点］			2点（2a③類 2点）	
	絞り目の痕跡のみが認められるもの　［3点］			3点（2a②類 1点）（2a③類 2点）	
	粘土の積み痕跡と絞り目が認められるもの　［33点］			33点（2a②類 1点）（2a③類 18点）	
調整の痕跡が認められるもの［49点］	全面におよぶもの　［33点］			23点（2a①類 1点）（2a②類 3点）（2a③類 15点）	4点
	部分的なもの　［16点］			15点（2a①類 1点）（2a②類 3点）（2a③類 8点）	1点
欠損のため様相が理解できないもの　［28点］		1点	1点	27点（2a③類 1点）	

第5表　高坏柱部内面の特徴

脚部の分類ごとに見ると、2a②類と2a③類にiが（5点中3点、46点中29点）、2b類にはiiiが多い（5点中4点）傾向がわかる（第4表）。

【坏】坏として図示したものは14点である。このうち器の全容をつかめるものは5点である。そのため胴部から口縁部にかけての特徴から分類する。

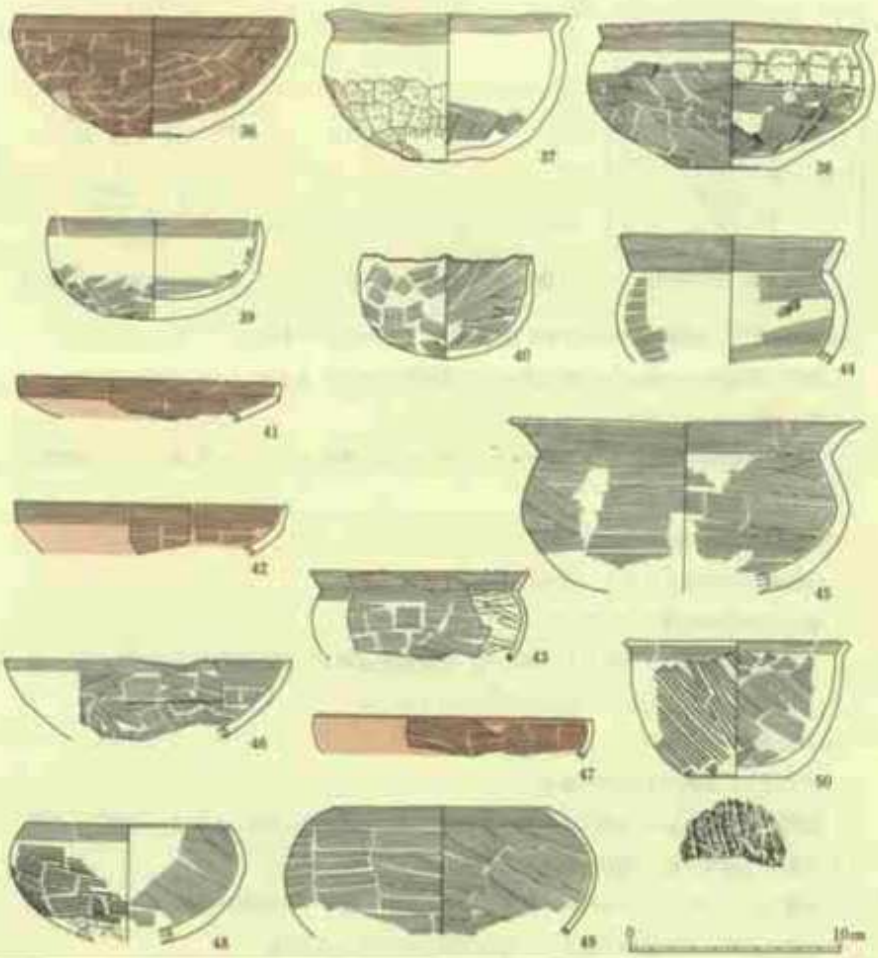
Ⅰ類：胴部と口縁部が屈曲によって区別されるもの

A類：口縁部が直立するもの（36・41・42）

口縁部の内外面に稜線を形成する。器の全容がわかるのものは1点あり、底部は平底で、器高に対し底径の占める割合が小さい。いずれも口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデで、内外面が赤彩されている。

B類：口縁部が外傾もしくは外反するもの（37・38・43～45）

器の全容が知れるものは2点ある。いずれも底部は平底で、胴部から口縁部にかけて強い膨らみをもちながら立ち上がる。器高に対して底径の占める割合が小さい。口縁部内外

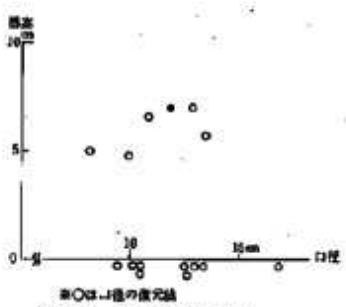


番号	種別	器種	外面	内面	外面	内面	残存	口径	底径	器高	備考	写真図版	観察表
36	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(12.4)	-	(3.2)	内外面赤彩	4-7	4-32
37	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.4)	(5.0)	4.3	2個体接合	5-1	5-33
38	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(15.0)	(5.6)	5.1		5-2	5-34
39	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(15.6)	(6.0)	4.2		5-3	5-35
40	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(12.0)	-	(3.8)		5-4	5-36
41	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.2)	-	(3.6)		5-5	5-37
42	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.0)	-	(3.4)		5-6	5-38
43	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(12.8)	-	(3.2)		5-7	5-39
44	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.0)	-	(3.0)		5-8	5-40
45	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.4)	-	(3.4)		5-9	5-41
46	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.6)	-	(3.6)		5-10	5-42
47	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(13.8)	-	(3.8)		5-11	5-43
48	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(14.0)	-	(4.0)		5-12	5-44
49	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(14.2)	-	(4.2)		5-13	5-45
50	土師	坏	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	口縁	(14.4)	-	(4.4)		5-14	5-46

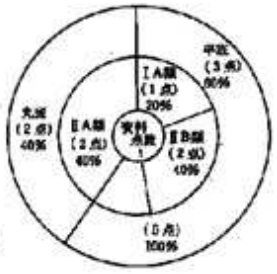
第12図　土器 (5)

坏 23点	Ⅰ類 16点	ⅠA類	4点
		ⅠB類	12点
	Ⅱ類 7点	ⅡA類	2点
		ⅡB類	1点
		ⅡC類	4点

第6表　坏の形態



第13図　坏の器高と口径



第14図　坏底部形態の割合

面はヨコナデ、胴部外面はナデまたはケズリ、内面はナデである。

Ⅱ類：胴部から口縁部へ明瞭な区別なく連続的に移行するもの

A類：口縁部が直立するもの（39・40）

丸底の底部から胴部にかけて緩やかに立ち上がる。内外面にナデを主体とし、口縁部はヨコナデのものもある。

B類：口縁部が外傾するもの（46）

口縁部内外面はヨコナデ、胴部内外面はナデである。

C類：口縁部が内湾するもの（47～49）

口縁部内外面はヨコナデもしくはナデ、胴部内面はナデ、胴部外面はナデのものとハケメのものがある。このうち、（47）は内外面に赤彩されている。

《坏の傾向》

坏では、ⅠB類が主体を占める。

底部の形態がわかるものは、平底のものが3点、丸底のものが2点ある。分類との関係を見ると平底はⅠ類、丸底はⅡA類に限られる。

法量では、口径14～10cm程、器高5～7cm程に集中する傾向が強いが（第13図）、ⅠB類に1点のみこの範疇で捉えられない大形のものがある（47）。

器面調整は、外面がヨコナデ、胴部内外面がナデ主体である。

また、赤彩はⅠA類とⅡC類に限り見られる。

【鉢】鉢として図示したものは1点である（50）。底部は平底である。胴部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、胴部の膨らみが弱く、口縁部がわずかに外傾し、口縁端部は平滑である。器高に対して底径の占める割合は大きい。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケメ、胴下部はケズリ、内面はナデ、底部はハケメである。

この類は、韓式系平底の鉢（田中清美:1989、植野浩三：1987など）と呼ばれる朝鮮半島に系譜がたどれる土器である。

【壷】壷として図示したものは41点である。これらは、器高17cm以上の大型のものと17cm未満の小型のものに区別できる。前者は口縁部に対し胴部が占める割合が大きいのに対し、後者は口縁部と胴部の割合がほぼ等しい特徴をもつ。それぞれ本来的に別の形と考えられ、ここでは大型壷・小型壷という呼び方で区別し、それぞれに細分する。

[大型壷]大型壷として図示したものは17点である。胴部以下を欠損しているものが多く、器の全容をつかめるものは2点にすぎない。そのため、口縁部から頸部へ段をもつものと持たないものに大別し、更に前者を細分する。

Ⅰ類：口縁部から頸部へ段をもつもの

A類：突帯によって段を形成するもの（53・54）

頸部から口縁部にかけて、外傾もしくは外反しながら立ち上がる。口縁端部は尖りながらすぼまるものと丸くまとまるものがある。口縁部内外面はヨコナデ、頸部外面はヘラナデとナデもしくはナデ、内面はナデもしくはミガキである。

B類：折り返し状に段を形成するもの

1類:頸部から口縁部にかけて外傾もしくは外反しながら立ち上がるもの(51・52・55～64)

器の全容がわかるものは2点ある。これによると底部は平底で、胴部は最大径が下位にある球形のものと、最大径がほぼ中央にあるやや縦長の球形のものとがある。口縁端部は尖りながらすぼまるものと丸くまとまるもの、平滑なものとがある。口縁部内外面と頸部内面はヨコナデもしくはナデ、頸部外面はヨコナデ・ナデ・ケズリの3様、胴部内外面はヘラナデもしくはナデである。

2類：頸部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもの（65）

口縁端部は丸くまとまる。口縁部外面はヨコナデ、頸部外面はハケメ、内面はナデである。

Ⅱ類：口縁部から頸部にかけて段をもたないもの（66・67）

頸部から口縁部へ内湾しながら立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ、頸部はナデ、胴部外面はナデ、内面はヘラナデとナデである。

《大型壷の傾向》

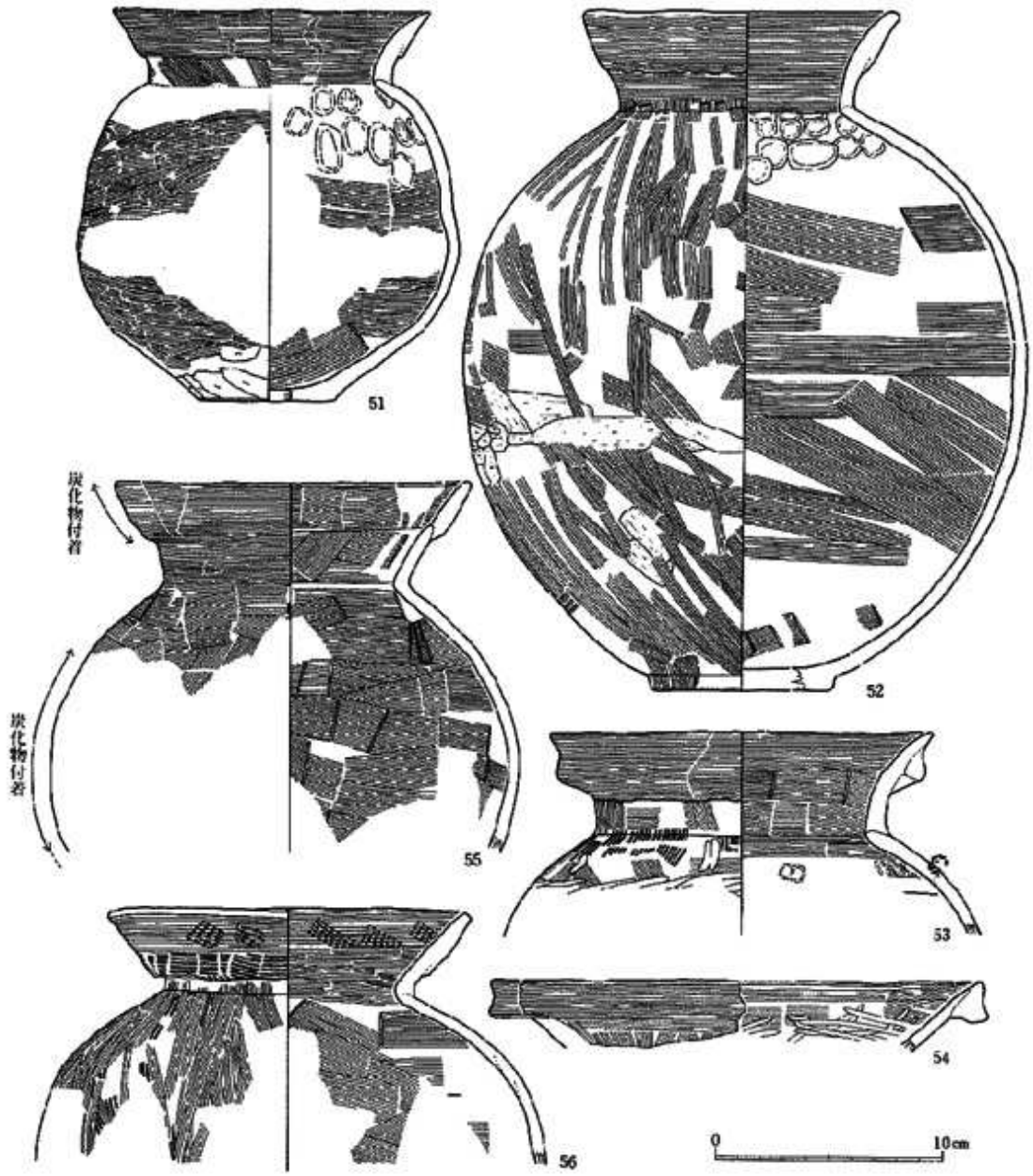
大型壷では、ⅡB類が大部分（90%）であり、中でもⅡB1類の占める割合が高い。

口縁部の立ち上がりは、外反するものが過半を占める。

口縁端部は尖りながらすぼまるものと丸くまとまるものが主体である。

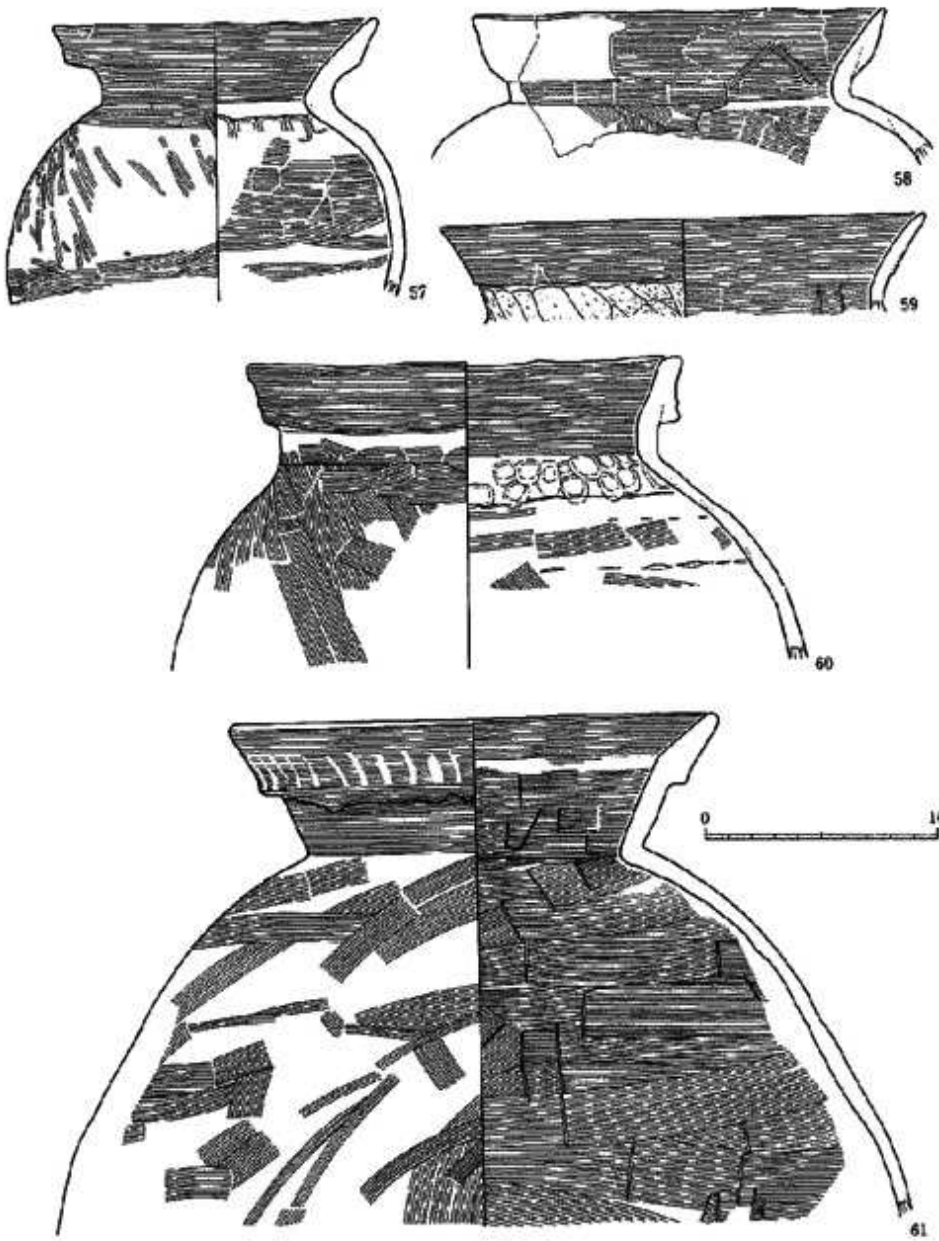
法量は、器高20cm程のものと30cmを越えるものの2種類が確認できる。

器面調整では、口縁部にヨコナデ、頸部にヨコナデもしくはナデ、胴部外面にナデ、胴部内面にヘラナデとナデが多用される傾向にある。



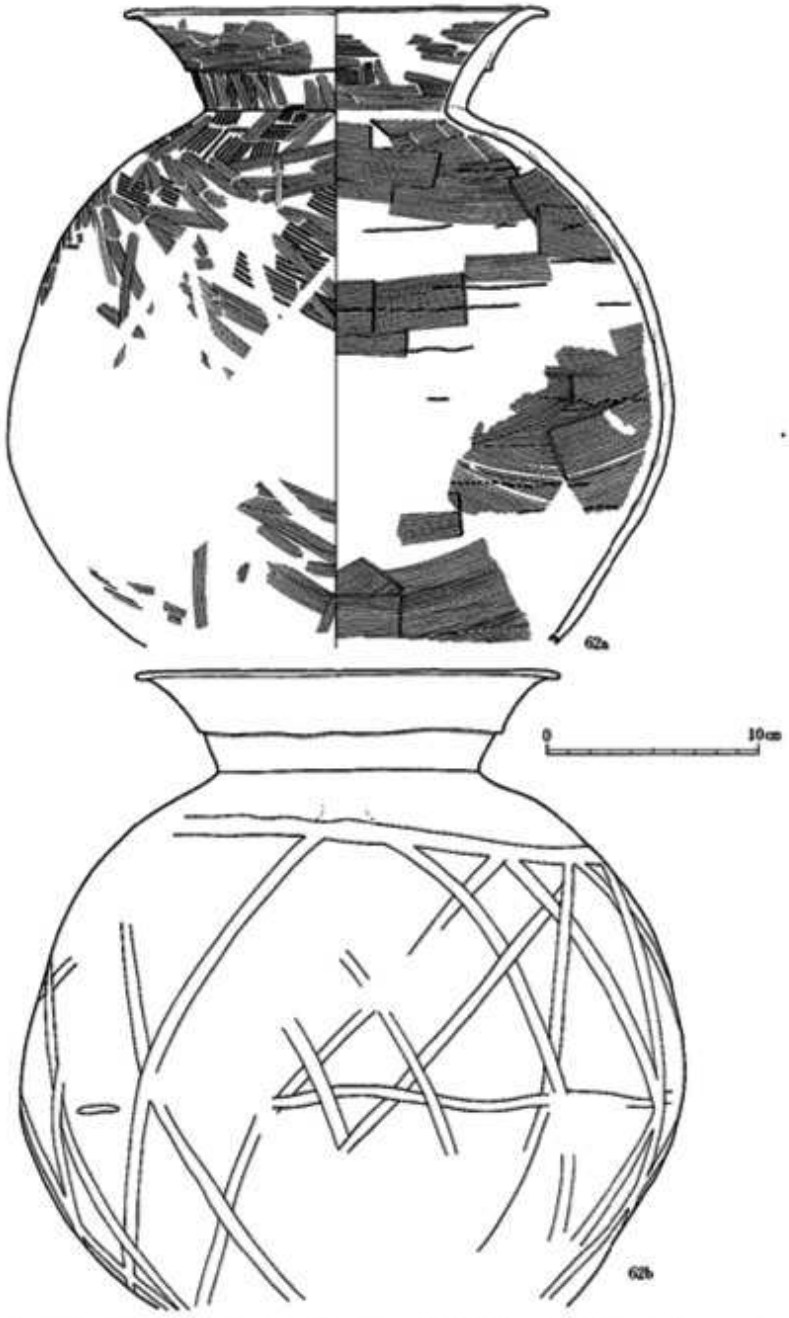
番号	時期	分類	特徴		手法		残存	法量(cm)						備考	写真図版	登録番号
			外面	内面	外面	内面		口径	器高	底径	最大径	底厚	重量			
51	後期	土師器大型壺	I E 1	[口] ヨコナデ [胴] ナデ [底] ナデ、ケズリ [台] ハケメ	[口→胴] ヨコナデ [胴] ヘラミガキ	黒褐	黒 褐	1/3	(15.0)	18.7)	(15.0)	(5.0)	(2.40)上	3個体+2個+3個		B-028
52	後期	土師器大型壺	I E 1	[口] ヨコナデ [胴] ナデ [底] ケズリ→ナデ [台] ナデ	[口→胴] ヨコナデ、ヘラナデ→ナデ [底] 指圧痕・ヘラナデ・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	2/3	1-0	18.3	24.6	(7.4	15.10)上		9-1	B-005
53	後期	小型壺大型甕	I A	[口] ヨコナデ [胴] ナデ [底] ハケメ→ヘラナデ→ミガキ	[口] ハケメ→ヨコナデ [胴] ヘラナデ→ヘラナデ・ナデ [底] ナデ	にぶい橙	灰 白	1/3	(16.0)	(13.0)	-	-	5.60)上		9-2	B-036
54	後期	土師器大型壺	I A	[口] ヨコナデ [胴] タコナデ→ナデ	[口] ヨコナデ [胴] ナデ→ミガキ	にぶい黄	にぶい褐	1/10	(21.0)	(15.0)	-	-	3.10)上			B-037
55	後期	土師器大型壺	I E 1	[口→胴] ヨコナデ [底] ヘラナデ・ナデ	[口] ナデ 黒→褐] ヘラナデ・ナデ	暗 褐	黒 褐	1/2	(3.4	18.3	(10.0	-	10.40)上	内面に炭化物付着 口縁+胴	9-4	B-027
56	後期	小型壺大型甕	I E 1	[口] ハケメ→ヨコナデ、[胴→脚] ハケメ→ナデ	[口] ハケメ→ヨコナデ [胴] ヨコナデ→ナデ [脚] ヘラナデ・ナデ	黒 褐	にぶい橙	2/3	(11.0	(11.3	-	-	(1.40)上		10-1	B-038

第15図　土器 (6)



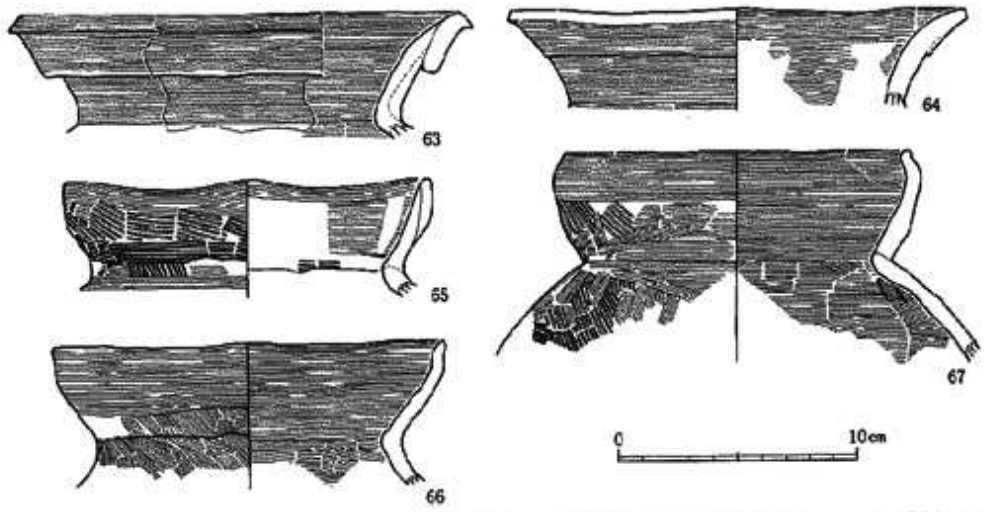
番号	種別	出土	特徴		色調		焼成	法量(cm)					備考	写真図版	挿図縮尺
			外面	内面	外面	内面		口径	体径	頸径	底径	器高			
57	土師	土師器大型壺	1B1	1D→3B1 ﾒﾝﾀｹﾞ 3B1 ﾅﾃﾞ	1C→3B1 ﾒﾝﾀｹﾞ 1B1 指圧痕、ﾅﾃﾞ	にぶい橙	普通	5YR	16.0	16.0	11.2	-	口1/2以上	1-1	1-154
58	土師	土師器大型壺	1B1	1D→3B1 ﾅﾃﾞ 3B1 ﾅﾃﾞ	1C→3B1 ヨコﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ(一部) 1B1 ﾅﾃﾞ	黒	堅 緻	5Y	(15.0)	(14.0)			1/8以上		1-154
59	土師	土師器大型壺	1B1	1L1 ヨコﾅﾃﾞ 3B1 ﾀﾃﾊﾘ	1J1 ﾍｽﾅﾃﾞ→ヨコﾅﾃﾞ 1B1 ﾍｽﾅﾃﾞ、ﾅﾃﾞ	明赤褐	にぶい橙	5YR	(20.0)	(12.2)	-	-	口縁1/8以上	1-2	1-152
60	土師	土師器大型壺	1B1	1C1 ヨコﾅﾃﾞ 3B1 ﾅﾃﾞ 3B1 ﾅﾃﾞ	1C→3B1 ヨコﾅﾃﾞ 1B1 指圧痕、ﾅﾃﾞ	橙	にぶい橙	5YR	16.7	(15.5)	-	-	口縁1/3以上	1-3	1-155
61	土師	土師器大型壺	1B1	1C1 3B1→ヨコﾅﾃﾞ 3B1 ヨコﾅﾃﾞ 1B1 ﾅﾃﾞ	1J1 ヨコﾅﾃﾞ 1B1 ﾍｽﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ 1B1 ﾍｽﾅﾃﾞ→ﾅﾃﾞ	黒 褐	堅	7.5YR	21.0	18.5	-	-	口1/2以上	1-3	1-156

第16図　土器 (7)



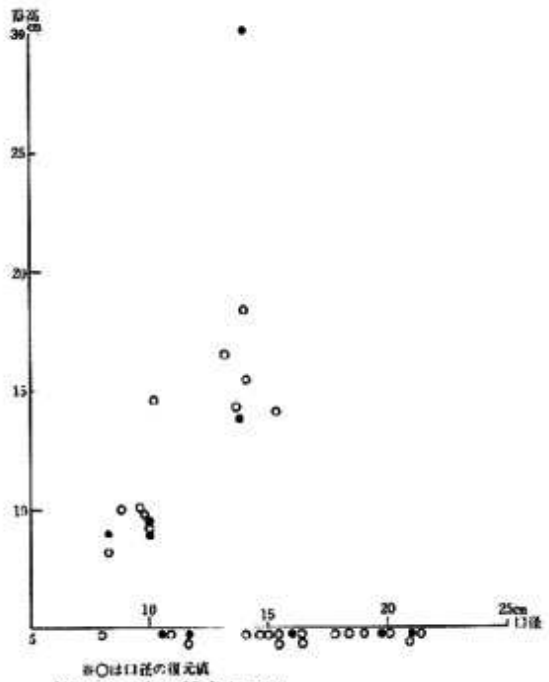
番号	種別	分類		形態				形態		備考						備考	写真図版	登録番号
				外面		内面		外面	内面		口径	頸径	胴径	底径	器高			
62	甲種	上部最大型部	1	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	灰白	黄褐	4.5	[illegible]	[illegible]	[illegible]	-	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

第17図　土器 (8)



番号	種別	分類	特徴		色調		焼成	法量(cm)					備考	写真図版	登録番号
			胴部	底部	外面	内面		口径	頸径	胴径	底径	器高			
63	口縁	土師器大型壺	[D~類] ヨコナデ	[D~類] ヨコナデ [B] ナデ	橙褐	暗褐	／5	(16.4)	(13.5)	―	―	5.3以上			R-633
64	口縁	土師器大型壺	[D~類] ヨコナデ	[D] ヨコナデ [B] ナデ	灰白~褐	暗	5/5	(18.0)	(14.0)	―	―	6.2以上			R-635
65	口縁	土師器大型壺	[D~類] ヨコナデ→ハケ	[L~類] ナデ→ヨコナデ→ハケ (一部)	黄褐	暗灰黄	5/5	(15.4)	(13.0)	―	―	4.3以上	口縁(1/3)		R-636
66	2個	土師器大型壺	Ⅱ	[D~類] ナデ→ヨコナデ [B] ナデ	[D~類] ヘラミガキ→ヨコナデ [B] ナデ	灰褐橙	にぶい黄橙	／5	(15.6)	―	―	―	6.1以上			R-639
67	口縁	土師器大型壺	Ⅱ	[L] ハケメ→ヨコナデ [B] ハケメ→ナデ [底] ハケメ→ナデ	[D] ヘラミガキ→ヨコナデ [B] ヘラケズリ→ナデ	灰褐	暗褐	／5	(16.0)	(12.8)	―	―	9.1以上			R-640

第18図　土師器 (9)



※○は口径の復元値

第19図　壺の器高と口径

第20図　大型壺における口縁部から頸部の傾き方の割合

第21図　大型壺における口縁端部形態の割合

なお、外面に籠の痕跡が見られる被籠土器がＩＢ１類に1点認められた。「X字状」に交差し、横方向に2条を編み込んだ痕跡が胴部に認められる。

[小型壷]小型壷として図示したものは24点である。この内、器の全容がわかるものは15点ある。頚部から口縁部へのくびれが大きいものと小さいもの分類し、更に前者は、頚部から口縁部への屈曲の有無と大きさから細分する。

Ｉ類：頚部のくびれの強いもの

A類：頚部から口縁部にかけて、屈曲をもちながら外傾するもの

１類：器高が15cm程の比較的高いもの（78）

口縁部内外面ともミガキである。

２類：器高が9～10cm程の比較的低いもの（68・69・79）

器の全容がわかるものは2点ある。これによると、底部は特に小さい平底である。口径と胴径の比はほぼ等しい。口縁部と頚部外面はヨコナデもしくは縦方向のナデ、内面はヨコナデもしくはミガキ、胴部外面はナデ、胴下部から底部にケズリ、胴部内面はヘラナデもしくはナデである。口縁部内外面と胴部外面が赤彩されたものが1点ある。

B類：頚部から口縁部にかけて、屈曲をもたずに外傾するもの

１類：器高が高いもの（84～90）

器の全容がわかるものは6点ある。これによると底部は、丸底のもの3点、平底のもの1点である。口径と胴径の比はほぼ等しいものと、胴径が口径を上回るものがある。外面と口縁部内面はミガキもしくはナデで、胴部内面はヘラナデとナデもしくはハケメである。

２類：器高が低いもの（70～74）

器の全容がわかるものは5点ある。これによると底部は平底のもの4点、丸底のもの1点である。口縁部内外面はヨコナデもしくはナデ、胴部外面はナデもしくはケズリを主体とし、内面はヘラナデとナデである。

Ⅱ類：頚部のくびれの弱いもの（75～77・91）

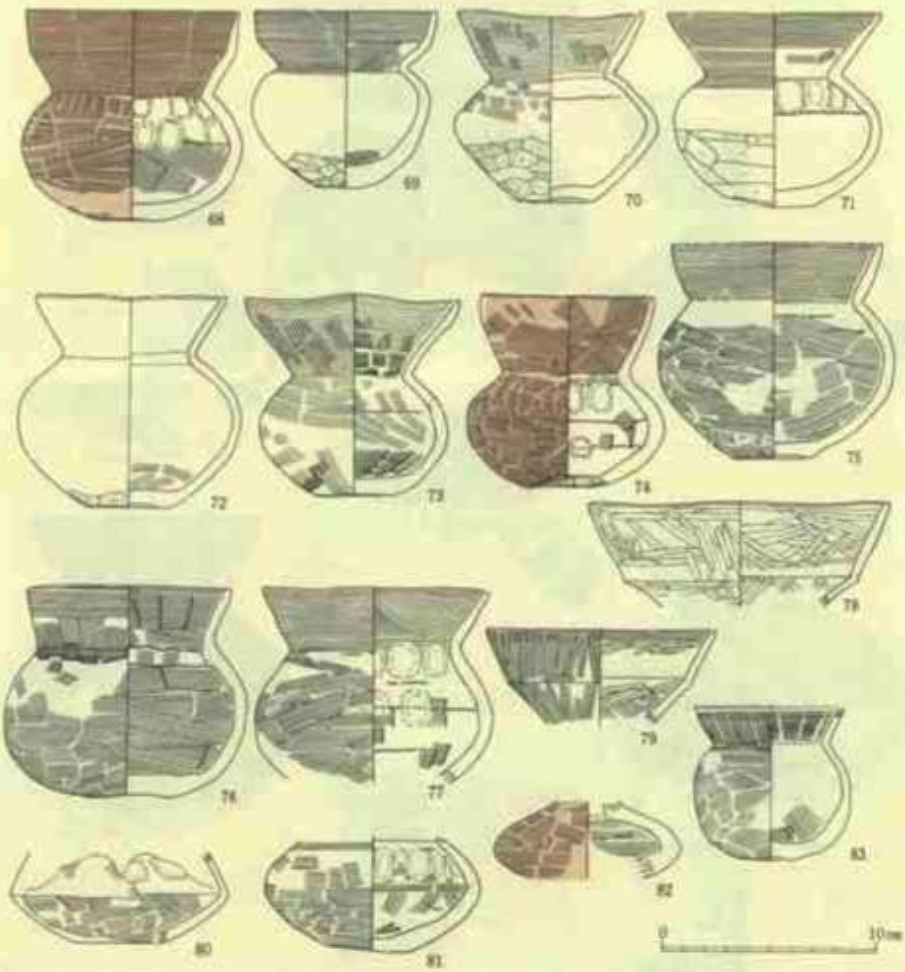
器の全容がわかるものは3点ある。これによると底部はいずれも平底を呈する。口縁部から頚部の内外面はヨコナデとヘラナデ、胴部外面はナデもしくはケズリを主体とし、内面はヘラナデとナデである。

《小型壷の傾向》

小型壷では、ＩＢ類の占める割合が高い。

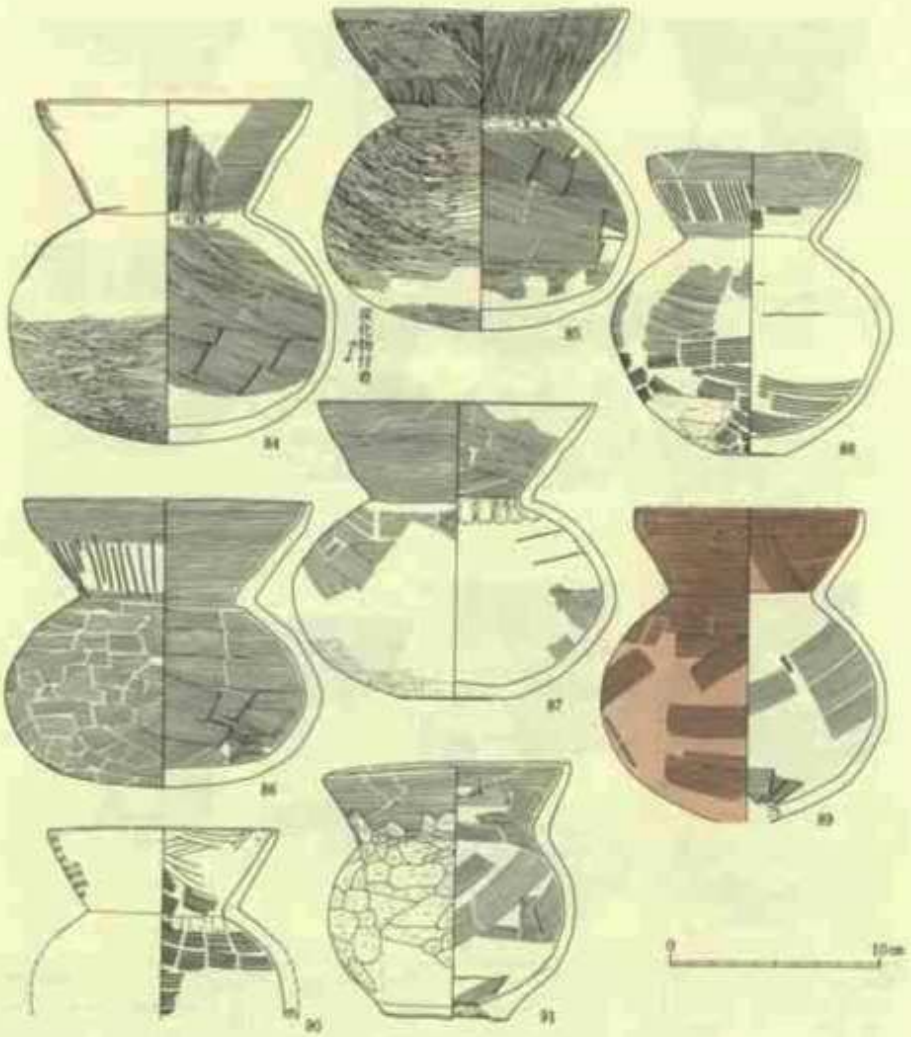
底部は平底が多く（第25図）、胴部には算盤玉形のものと楕円形のものがあり、更に両者の判別が難しいものもある。

口縁部の大きさを分類ごとに比較すると、口径と胴部最大径の比率は、ほぼ等しいもの



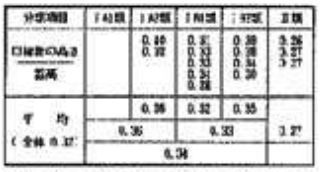
番号	地区	出土位置	外面	内面	胎土	焼成	色調	口径	底径	器高	備考	図版	観察表
68	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヘラミガキ 頸部 ヨコナデ 底 ケズリ	口縁部 横ナデ 体部 ヘラミガキ	石英 長石	良好	赤褐色	15.6	7.6	16.2	完形	4-1	4-01
69	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ後ミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英	良好	赤褐色	14.0	6.8	15.4	口縁部一部欠損	4-1	4-02
70	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	16.2	8.0	17.8	口縁部一部欠損	4-1	4-03
71	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 底 ケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石 雲母	良好	赤褐色	17.4	8.2	18.6	完形	4-1	4-04
72	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 底 ケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	13.8	6.4	14.6	完形	4-2	4-05
73	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	15.0	7.2	16.0	口縁部一部欠損	4-2	4-06
74	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 底 ケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	14.4	6.6	15.2	完形	4-2	4-07
75	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	16.8	8.4	17.4	完形	4-3	4-08
76	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 底 ケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	17.0	8.0	18.2	完形	4-3	4-09
77	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	15.2	7.4	16.0	口縁部一部欠損	4-3	4-10
78	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	18.4	9.0	19.2	完形	4-4	4-11
79	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	16.0	7.8	17.0	口縁部一部欠損	4-4	4-12
80	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 底 ケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	14.8	7.0	15.6	完形	4-4	4-13
81	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	15.6	7.6	16.4	口縁部一部欠損	4-5	4-14
82	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	14.2	6.8	15.0	完形	4-5	4-15
83	1層	1号竪穴住居跡	口縁部 ヨコナデ 体部 ヘラミガキ 底 ケズリ	口縁部 ヨコナデ 体部 ケズリ	石英 長石	良好	赤褐色	17.2	8.2	18.0	完形	4-5	4-16

第22図　土器（10）

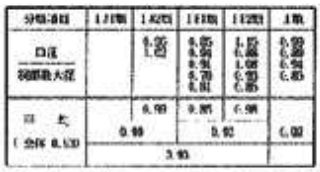


第23図　土器 (11)

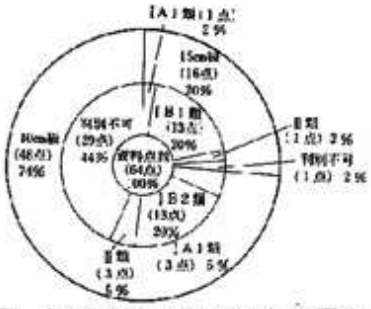
第7表　小型壺の形態



第8表　小型壺口縁部の器高に占める割合



第9表　小型壺口径と胴部の最大径の割合



第24図　小型壺の器高が高いもの(15cm級)と低いもの(10cm級)の割合

第25図　小型壺の底部形態の割合

が大半であるが、ＩＢ１類に口径が比較的小さいものが見られる（第9表）。器高に対する口縁の高さは1/3以上を占めるものが大半であるが、1/3以下の口縁部の小さいものもⅡ類とＩＢ１類の一部に見られる。

法量では、器高が9～10cm程のものと15cm程のものとの2群に大別でき、前者が全体の2/3以上を占める（第24図）。

器面調整では、胴部外面がナデのものが主体であるが、ＩＢ２類とⅡ類にナデとケズリを併用するもの、ＩＡ１類とＩＢ１類にミガキのものがある。前者は器高の低いもの、後者は高いものに見られる傾向がある。

また、焼成後底部に穿孔の見られるものが3点あり、分類のわかるものはＩＢ１類とⅡ類である。穿孔方向は内→外で、棒状の道具を内面に押し当て打ち欠いたと想定される。【甕】甕として図示したものは28点である。この内、器の全容がわかるものは9点である。これらは法量から、器高15cm以上のＩ類と12cm程のⅡ類に大別される。更にＩ類を、頸部から口縁部への形態によって細分する。器面調整は、共通して口縁部内外面にヨコナデもしくはナデ、胴部内面にヘラナデとナデが多用されるため、胴部外面の違いを中心に述べることにする。

Ｉ類：器高15cm以上の比較的大形のもの

Ａ類：頸部のくびれが強く、口縁部が短く外傾もしくは外反するもの（92～111）

器の全容が分かるものは4点ある。底部のわかるものはいずれも平底である。胴部は最

大径がほぼ中央にある球形で、胴部下端に膨らみをもつものと直線的に立ち上がるものがあり、前者が主体である。口径の広い、所謂「広口」のものもある。胴部外面がナデのもの、ナデとケズリのもの、ナデとハケメのものがある。

B類：頸部のくびれが強く、口縁部が特に短く外領もしくは外反するもの（112・1I3）

頸部から胴上部にかけて強い張りをもつ。（113）は口縁端部を欠損するがこの類と推定される。これによると底部は平底で、胴部は最大径が下位にある球形である。胴部外面がナデもしくはケズリのものがある。

C類：頸部のくびれが強く、口縁部が長く、内湾気味に立ち上がるもの（114）

底部は平底で、胴部は最大径が下位にある球形である。胴部外面はナデである。

D類：頸部のくびれが弱く、口縁部が比較的長く、直立気味に立ち上がるもの（115・116）

器の全容が分かるものは1点ある。底部は平底で、胴部は最大径がほぼ中央にある球形で、胴部下端は直線的に立ち上がる。胴部外面はナデである。

E類：頸部のくびれが弱く直立しながら立ち上がり、口縁部が短く外傾するもの（117・118）

器の全容が分かるものは1点ある。底部は平底で、胴部は最大径がほぼ中央にある球形で、胴部下端は直線的に立ち上がる。胴部外面はハケメもしくはハケメとケズリである。

Ⅱ類：器高12cm程の小形のもの（119）

底部は平底で、胴部は倒卵形を呈する。頸部のくびれは弱く、頸部から口縁部へ短く外反する。胴部内外面はケズリである。

《甕の傾向》

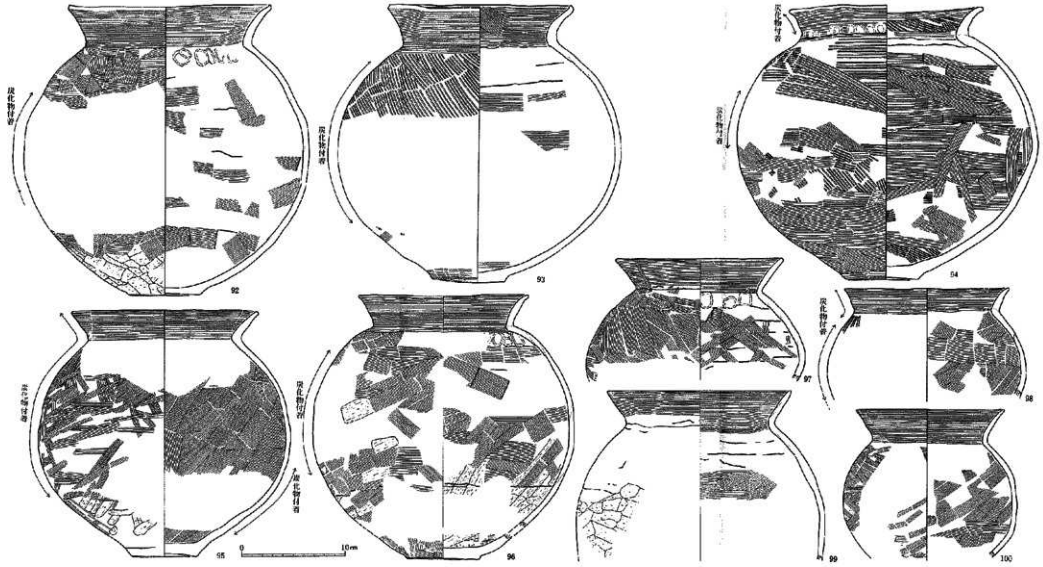
甕では、ＩＡ類が大半を占め、Ⅱ類は1点のみである。

Ⅰ類では、底部がわかるものはいずれも平底で、胴部は全て球形を呈し、最大径はほぼ中央もしくは下位にある。胴部下端は膨らみの強いものと直線的に立ち上がるものがあり、前者が主体である。頸部から口縁部へは、外反するものが多い。

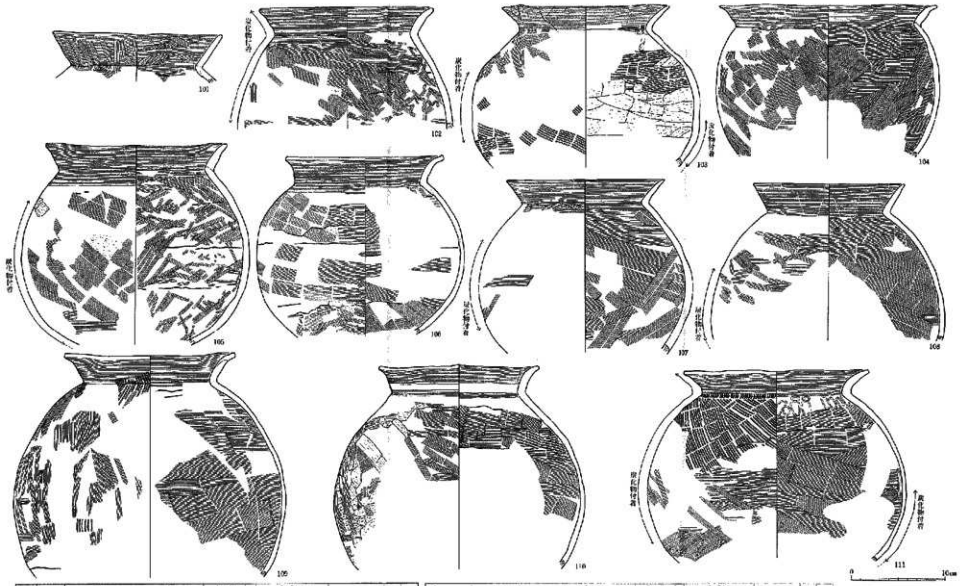
口縁端部は、尖りながらすぼまるもの、丸くまとまるもの、平滑な所謂「面とり状」のものと端部を小さくつまみ上げるものが見られる（第31図）。

法量では、器高20cm程のものと30ｃｍ前後のものとがあり、後者の方が多い傾向にある。なお、両者に炭化物が胴部中央に付着するものが見られ、煮沸用に利用されたものがあることがわかる。

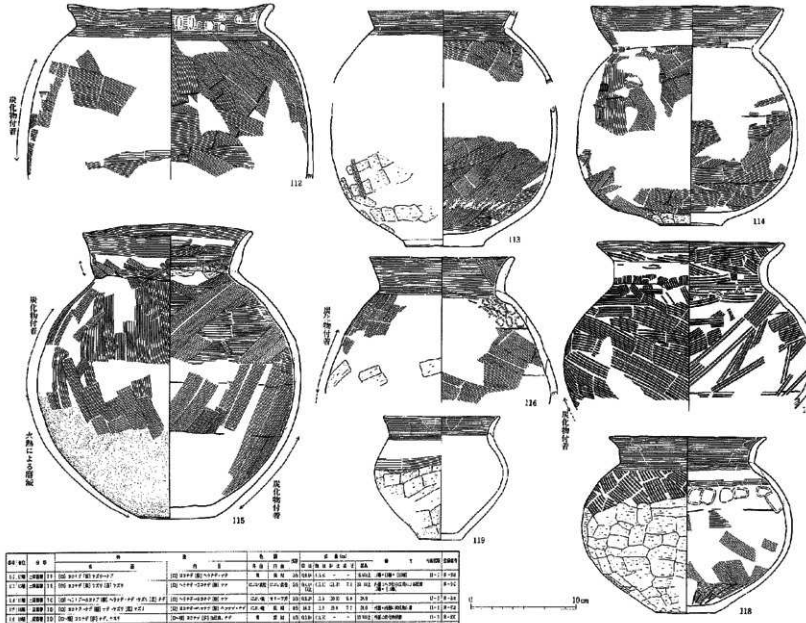
器面調整は口縁部内外面がヨコナデ、胴部外面がナデ、内面がヘラナデとナデのものが大半を占める。



第256図　土器 (12)



第27図 土器 (13)



番号	地区	分類	名称	内容	色調	胎質	焼成	器種	口径	胎土	焼成	調整	文様	備考	実測	図版
1-2	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-3	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-4	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-5	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-6	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-7	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-8	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-9	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-10	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-11	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
1-12	1-2	1-2	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

第28図 土器 (14)

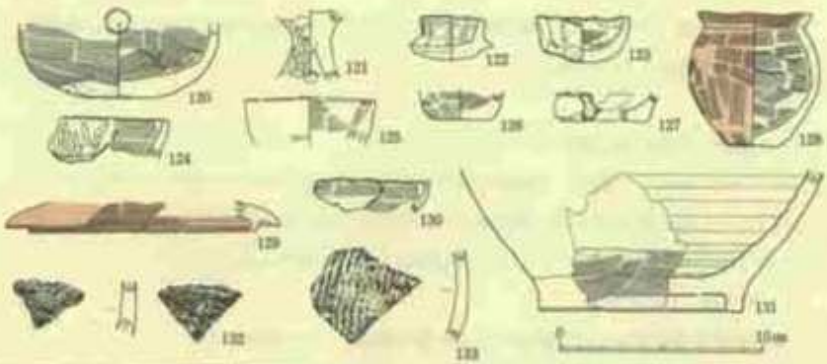
第29図　壺の器高と口径

第30図　壺Ⅰ類における口縁部の傾き方の割合

第31図　壺Ⅰ類における口縁端部形態の割合

大型壺 40点	Ⅰ類 38点	ＩＡ類		2点
		ＩＢ類 *36点	ＩＢ１類	24点
			ＩＢ２類	2点
			判別不可	10点
	Ⅱ類			2点

第10表　大型壺の形態



第32図　土器（15）

【甕】（120）

1点あり、底部は小さな平底で、胴部は楕円形と推定され、中央に径1cm程の焼成前の穿孔を持つ。穿孔は外→内である。外面はナデ、内面はヘラナデである。

【ミニチュア】

ミニチュアとして図示したものは8点である。これらは高坏形・坏形・甕形の各種がある。

［高坏形のもの］（121）

柱状部の破片1点のみである。柱状部に径1cm程の円窓を持つ。外面はケズリ、内面は不明である。

［坏形のもの］（122～127）

図示したものは6点である。このうち、器の全容がわかるものは2点である。底部は、平底のものと丸底のものがある。底部に木葉痕が確認できるもの、胴部が指圧により凹凸の激しいものがある。内外面ともナデを主体とする。

［甕形のもの］（128）

1点のみである。平底の底部から胴部へ弱い膨らみを持ちながら立ち上がり、頸部に至る。口縁部は短く外傾する。口縁部内外面はヨコナ胴部内外面はナデである。外面と口縁部内面が赤彩されている。

【その他】

その他としたものは2点ある。

［129］内面にかえりを持つ、口縁部の破片である。内外面ともヨコナデとナデで、ともに赤彩されている。蓋もしくは大型の器台の受け部の可能性が考えられる。

［130］口縁部に刻み目をもつ。どのような形のものか不明である。

〔2〕須恵器（131・132）

壷の胴部から底部にかけての破片1点と甕の胴部片1点がある。

5世紀と考えられている仙台市大蓮寺窯、多賀城市新田遺跡の資料と比較すると、つくりが雑で、胎土も粗雑な感がある。調査時もしくは整理時の混入の可能性もあり、この土

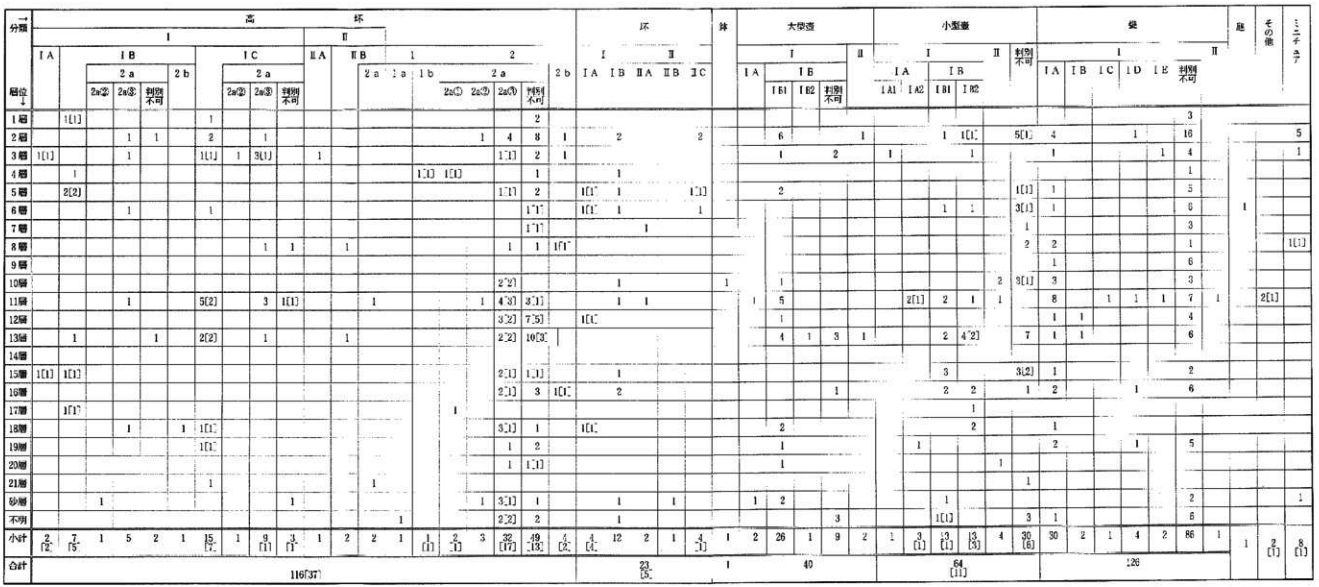
師器に伴うかは類例の増加を待って判断したい。

〔3〕縄文もしくは弥生土器（133）

縄文もしくは弥生土器と思われる。摩滅気味の小破片で、外面に単位の小さい、斜位のＬＲの縄文が施される。

（註1）個体数は高坏、坏部との接合部分の判明する柱状部をもつものと柱状部に孔をもつも、甕 は形態の判明した1点を、他は口縁部を基に算出した。

（註2）他の報告書でミガキ・粗いミガキと表現されている調整の一部は、本書ではナデとして扱っている。



第11表　土器の層位別出土状況

2　骨角製品

70点を越える骨角製品が出土した。炭化物層を中心に検出され、とくに斜面上位での出土が多い傾向にある。鏃、錐、弣、刺突具、刀子把、箆、ヤス、刀装具、琴柱型角製品、卜骨など多種多様なものがあり、このほかにも用途不明のものが多数出土している（第12表）。ただし、ほとんどのものが破損品であり、破損後に火を受け白色灰化あるいは黒色炭化状態にあるものも少なくない。また、未製品とみられるものも同様の状態で出土している。素材としては鹿角やニホンジカの中手・中足骨を利用しているものが多く、縄文時代以降利用される部位や部分に違いは認められない。時代を問わず道具製作の素材として最も有効なものであったといえる。製作に際しては金属器を使用しており、素材取りや大まかな整形段階のものには鑿状の工具による痕跡（図版22-9・10）が、細かな整形および仕上げ段階のものには刀子状の工具による削りの痕跡（図版22-11・12）が明瞭に認められる。

なお、これらの骨角製品とともに、素材となった鹿角や骨、製作過程で廃棄されたとみられる廃材や屑も多量に出土しており、素材、廃材・屑、未製品、製品、破損品といった製作から廃棄に至る各段階のものがまとまって検出されている。

層位	骨鏃				刺突具 針・錐	把		箆	ヤス	弣・弭?	刀装具	琴柱形	その他
	I	II	III	IV		刀子把	?						
1													
2	1	2(2)			刺1	3(1)				弣1			
3	1(1)												
4	1(1)												
5					刺1								棒状角製品①
6			1		錐1(1)	①	2(1)	骨1					互輪塔形角製品1, 棒状角製品①
7													
8						1							
9												1(1)	
10													
11		1(1)			針1(1)	2(2)+①	1		①	弭?1	1(1)		把or脚?1(1)
12								角1					
13													把or脚?1(1)
14													
15				1(1)		1							
16	1(1)												
17													
18													
19						①							
20													
不明		1		1		①							
合計	4(3)	4(2)	1	2(1)	4(2)	7(3)+①	3(1)	2	①	2	1(1)	1(1)	3(2)—(2)

※（　）：焼けている資料の内数、○：未製品

第12表　骨角製品の層位別出土状況

①骨鏃

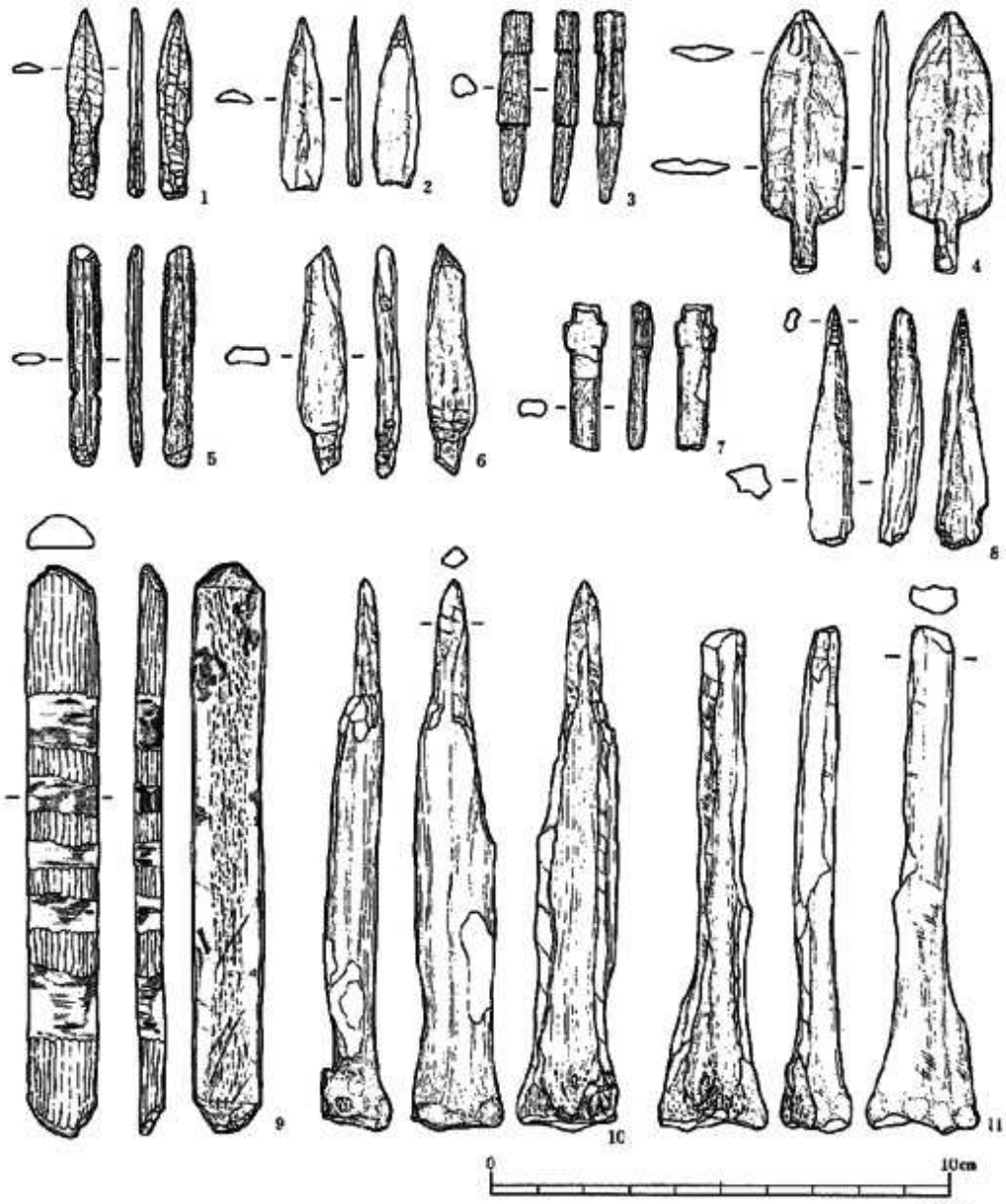
骨製の鏃は11点出土した。これらは素材や形態的な特徴によって4種類のものに分けることができる。以下、種類ごとに述べていくが、各部位の名称については銅鏃および鉄鏃における各称を参考にした（末永;1981、関;1986他）。

Ⅰ類（第33図1・2）　四肢骨を利用し、鏃身を細い柳葉形に薄く仕上げたもので、断面は三角形状を呈する。1は柄部が破損しているため全体の長さや装着方法は不明であるが、鏃身関部を浅い切り込みによって作り出し、全体を金属器によって丁寧に仕上げている。ただし、関部が撫角のため、鏃身と柄の境は不明瞭である。2は打割によって得られた薄い剥片を利用したものとみられる。鏃身の基部で破損しているため、逆刺の有無や柄部の形態等については不明である。いずれも素材の特徴を残していないため素材取りや製作方法については明らかではないが、スパイラル剥片の左右対称の位置に関状の抉りをもつ未製品（6）が出土しており、本類の製作過程の一端を示している可能性がある。

Ⅱ類（3）　二ホンジカの中手あるいは中足骨の後面側方の稜を利用したもので、やや湾曲した体部の2ヶ所に左右対象の鏃状の切り込みを入れることによって鏃身の逆刺と茎の関を作り出している。裏側には髄腔壁が溝状に残る。先端部が欠損しているため全体の形態や大きさなどについては不明であるが、全長に対して逆刺の位置が低い、茎の短いタイプのものと思われる。本例と同様の骨鏃は、本遺跡のＳＤ1020Ｂ河川跡（註3）、石巻市五松山洞窟遺跡（金子;1988）、福島県いわき市金冠塚古墳・大善寺古墳（梅宮;1964）、棚倉町胡麻沢古墳（井上地；1975）、神奈川県横須賀市銭切遺跡（金子；1986）、三重県菅島町小世古貝塚（註4）などに類例があり、古墳や洞窟遺跡などから副葬品として出土することが多い傾向にある。ただし、年代の明らかなものはいずれも古墳時代後期のものであり、確実に古墳時代中期まで遡るものは今のところ本例以外には知られていない。

Ⅲ類（4）　ニホンジカの中足骨の前面もしくは後面を素材に、銅鏃を模倣したとみられる形態のものである。長三角形式柳葉形の鏃身に柄部を作り出したもので、表裏には素材を示す縦溝および髄腔壁が痕跡的に残る。鏃身の断面は両面にやや稜を持つ菱形状に仕上げられているが、鏃身に対する茎の形態や大きさ、使用・破損の状況などからみて、必ずしも実用的なものとは言い難い。祭祀に関わるような儀器（模造品）の可能性も考えられる。こうした銅鏃模倣の骨鏃は、三重県鳥羽市白浜遺跡（古墳時代後期前半、山本・萩本;1990）からも出土している。ただし、本例とは異なり、形態や全体的な調整などからみて共伴する銅鏃の代用品として、実用的に使用されたものと考えられる。

Ⅳ類（5）　鋸歯状を呈するエイの尾棘骨をそのまま利用し、全体の1/3下半に両側から「V」状の抉りを入れ、茎の関を作り出したものである。エイの尾棘骨を利用した鏃は



（単位：cm）

番号	種別	出土層位	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
1	鏃（Ⅰ）	2層	(3.1)	0.8	0.3	骨	柄部破損。金属器による長軸方向の削り痕明瞭。	15－1
2	鏃（Ⅰ）	3層	(3.7)	0.9	0.3	骨	柄部破損。全面白色灰化。	15－2
3	鏃（Ⅱ）	11層	(4.3)	0.7	0.5	ニホンジカ中足骨	鏃身部破損。全面白色灰化。	15－3
4	鏃（Ⅲ）	層位不明	5.7	1.8	0.3	ニホンジカ中足骨	両側稜部。柄部破損。	15－4
5	鏃（Ⅳ）	6層	(4.8)	0.7	0.3	ヌイ尾鉾骨	鏃身先端部破損。	15－5
6	鏃（Ⅰ？）	11層	5.0	1.0	0.5	骨	鏃身関部のみを作り出した未製品。	15－6
7	鏃（？）	15層	(3.2)	0.9	0.4	ニホンジカ中手or中足骨	柄部のみの破片。細鏃被状の突起をもつ。全面黒色灰化。	15－7
8	鏃	6層	5.2	0.9	0.7	ニホンジカ中手or中足骨	スペイタル側片の先端部（遠位端）を入用。縦ば全面黒色灰化。	15－8
9	針	2層	12.5	1.5	0.6	腹角	金属器による削り痕明瞭。体部5＋中に縛痕が認められる。	15－9
10	刺突具	2層	12.0	1.7	1.0	ニホンジカ中足骨及内側	先端部長3.0cm、幅3.7cm、厚6.5cm。基部幅2.1cm、厚1.5cm。	15－10
11	刺突具	5層	(11.0)	1.1	0.8	ニホンジカ中足骨及内側	先端部（遠位端）破損。基部幅2.4cm、厚1.5cm。	15－11

第33図　骨角製品（1）－鏃・錐・射・刺突具

基部の形態が異なるものの、縄文時代の遺跡において時期や地域を問わず普遍的に見られるものである（小井川；1985、金子・忍澤；1986）。神奈川県三浦市間口A遺跡（神澤；1988）や島根県松江市西川津遺跡（内田；1986）など弥生時代の遺跡からの出土例（「ヤス」と考えられているもの）も知られており、ニホンジカの角や中手・中足骨などとともに縄文時代以来骨鏃の素材としてきわめて有効であったことを示している。

このほか骨鏃の柄部とみられる破損品で・古墳時代後期の鉄鏃に特徴的な棘篦被状の突起をもつものがある（7）。

以上のように、骨鏃の出土量はさほど多くないものの、これらには形態的なバリエーションがあり、製作にあたってはそれぞれ目的とする形態に応じて、骨の特徴を生かした素材取りが行われていたことが窺える。古墳時代の骨鏃は、従来古墳や洞窟遺跡などから副葬品として出土することが多く、集落遺跡からの出土例はほとんど知られていない。これは遺物の性質上残存しにくいことが大きく影響しているものと思われるが、本遺跡や鍛冶遺跡の出土例をはじめ、実際にはかなり一般的に使われていたものと推測される。とくに、古墳時代後期には、金子氏も指摘しているように主体的な形態があり（金子；1988）、今回Ⅱ類とした形態のものが地域を問わず普遍的に出土している。SD2050B出土のものや古墳出土の副葬品をみる限り、かなり定形化した感がある。一方、古墳時代中期のものについては類例がなく詳細は不明であるが、SX230出土の一群は、同じ部位の中でも形態によって素材として使用する部分に違いがあるなど多様的であり、骨鏃の形態が定形化する以前の状況を示している可能性が高い。

②錐（第33図8）

ニホンジカの中手骨あるいは中足骨のスパイラル剥片をそのまま利用した不定形のもので、先端部には使用時に付いたとみられる螺旋状の溝が巡っている。関節部側を基部にしているが、基部調整などの二次的な加工は認められない。

③弭（第33図8）

鹿角を板状に加工したもので、横断面がカマボコ型を呈する。鹿角本来の反りに沿って、平坦な髄質両側にやや湾曲する。とくに装飾性は見い出せないが、体部表面には弓に固定するのに巻き付けた5条の繊維質の痕跡とその上を固めた漆とみられる黒色の塗布痕跡が残っている。これらは体部中央を中心にほぼ等間隔に認められ、これ以外の部分については弓に固定された後、軸に平行する粗い削りによって仕上げられている。その際に生じた、削りの方向と直交する刃先の痕跡も顕著である（図版22－12）。

類例としては石巻市五松山洞窟遺跡、福島県いわき市金冠塚古墳、和歌山県田辺市磯間岩陰遺跡（堅田;1987）などに見られるが、出土例が少ないことや装着される弓本体が明

らかになっていないことなどから、この種の角器が一般的に装着された実用的なものなのか、あるいはこれ自体が装飾的な意味も備えたものなのか明らかではない。一方、五松山洞窟遺跡や磯間岩陰遺跡出土の弭の中には彫刻や線刻などの装飾が施されたものもあり、弭を使った道具には精粗、大小、格式などの違いがあった可能性も指摘されている（金子；1988）。なお、塩釜市崎山囲洞窟遺跡において、古墳時代中期（南小泉式）に位置付けられる副葬品の中に尺度型骨器として報告されているものがある（永澤；1931）。3点（いずれも素材不明）出土しているが、これらは形態や大きさなどからみて弭と考えられる。

④刺突具（第33図10・11、第34図1）

ニホンジカの中足骨を縦割にして割断面を調整し、先端を尖らせたものが、2点出土している。10は、骨の近位端から体部にかけての内側部分を素材に、先端部を遠位側に作り出している。身部は断面を菱形状に丁寧に仕上げているが、身部以外はほとんど手を加えていない。11についても同様の素材取りと調整がなされているが、身部の根元から折れている。この折れが使用時によるものとすれば、かなりの力が加わるような用途に使用されたものと推測される。このほか、鹿角あるいは獣骨を細長く削り、先端を尖らせた針状のものがある（第34図1）。体部から基部にかけてやや湾曲する。刺尖具の一種とみられるが、簪などの装身具の可能性もある。

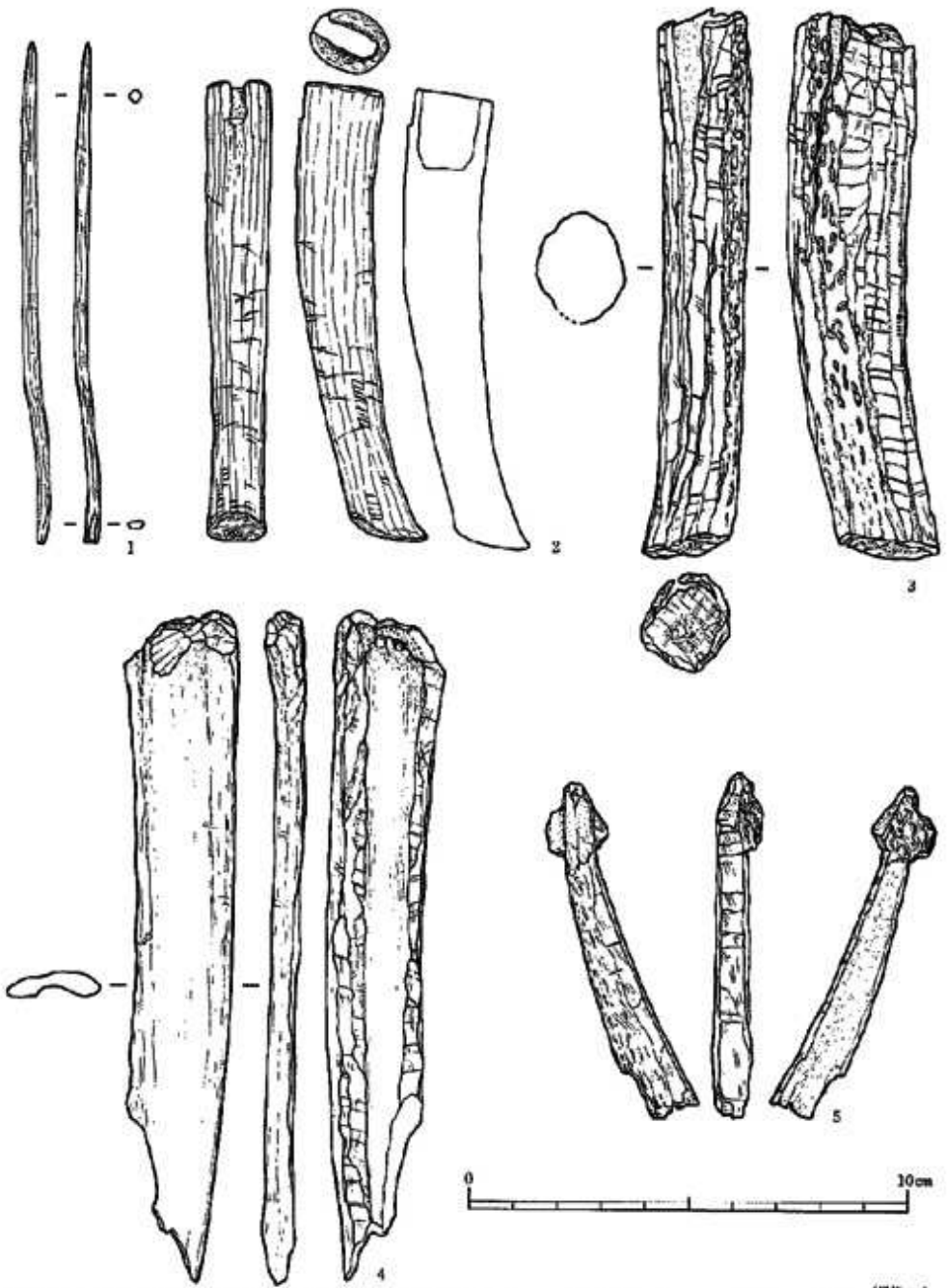
⑤刀子把（第34図2・3）

素材および整形段階の未製品（4点）を含め11点出土した。いずれも鹿角の枝の部分を素材としたもので、素材の湾曲をそのまま利用した形態をとっている。2は把基部の刃部側が破損しているが、ほぼ完存に近い状態のものである。全体をほぼ均等な径に仕上げ、把頭部も丁寧に削っている。表面には把の軸に平行する削りとこれと直交する金属器の刃先の痕跡が顕著に残る。刀子の柄を挿入する柄穴は浅く、目釘穴もない。4は粗形段階の未製品で、金属器による削りの痕跡や鹿角特有の自然面が顕著に残る。柄穴も若干穿たれている。

鹿角製刀子把は各地から出土しており、いずれも素材を生かした棒状を呈する形態のものである。県内では五松山洞窟遺跡に3点の出土例がある。これらは形態や大きさ、つくりの精粗など異なった特徴を示しており、大型のものについては武器として使われた可能性が指摘されている（金子；1988）。これに対して本遺跡のものは未製品を含め形態や大きさなどすべて同様なものからなり、加工方法などについても五松山洞窟で出土した小型のものに類似している。柄穴の大きさからみても、工作用の刀子の把と考えられる。

⑥篦（第34図4）

ニホンジカの中足骨を内外に縦割した素材を利用したものである。金属器によって半割



（単位：cm）

番号	種別	出土部位	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
1	針穴具	4・11層	(11.5)	0.3	0.3	鹿角or骨	基部折損。全面白色変化。	18－5
2	刀子把	2層	10.5	基 1.8	1.4	鹿角	横穴内径1.3×0.6cm、深2.6cm。基部折損。金属器による削り痕も明瞭。	19－1
3	刀子把	15層	12.0	基 2.8	1.9	鹿角	未製品。横穴内径1.3×0.8cm。	19－3
4	笓	6層	(10.3)	2.2	0.8	ニホンカモシカ骨1.外側	先端部（東北側）破損。未製品の可能性あり？	19－6
5	ヤス	11層	(7.9)	軸 1.2	0.8	鹿角	未製品？ 基部破損。先端部に逆刺あり。逆刺最大幅1.4cm。	18－1

第34図　骨角製品 (2)－針・刀子把・笓・ヤス

断面を丁寧に整形し、また基部にあたる近位端側の関節部を除去して、全体を平滑にしている。先端部が欠損しているため具体的な機能は明らかではないが、素材取りや調整方法など、縄文貝塚から普遍的に出土する骨篦と共通した特徴を有する。

⑦ヤス（第34図5）

器体の先端に逆刺を備えた鹿角製のもので、未製品とみられる。体部から基部にかけての破損が著しく基部形態は不明であるが、器体の湾曲具合いからみて、2～3本を組合せて使用するタイプのものと思われる。

この種のヤスは、仙台湾周辺においては少なくとも縄文時代後期末～晩期前葉には出現しており、対象魚を挟み込んで捕らえるような漁法に使用されたものと考えられている（新庄屋・阿部；1986）。今のところ古墳時代中期に類例はないが、古墳時代後期の本遺跡ＳＤ2050B河川跡には出土例があり、縄文時代以来の定型的な漁撈具といえる。ＳＸ230で検出されている魚種の中では、魚の大きさや生態的な特徴からみて、サケ漁に使用された蓋然性が高い。

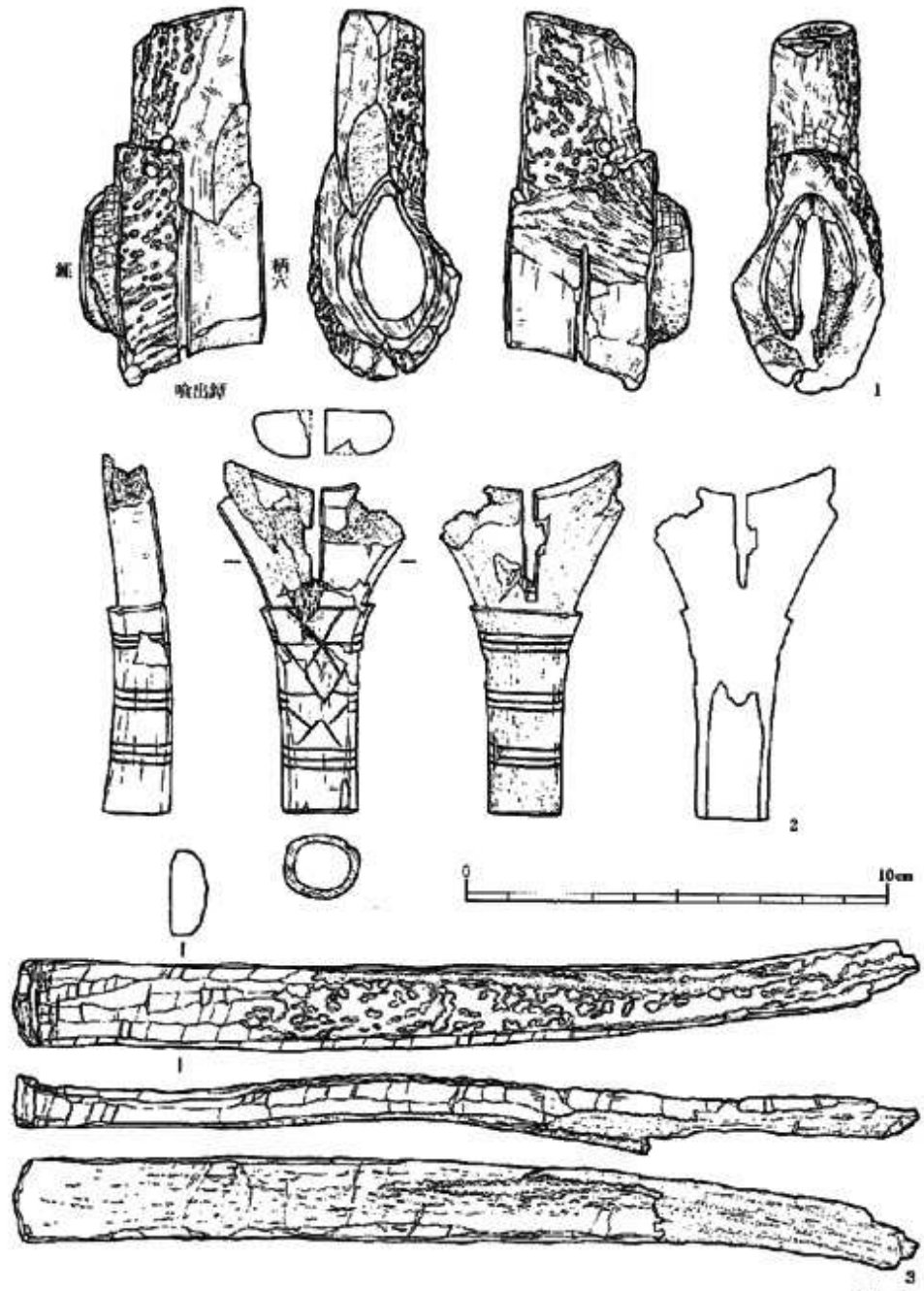
⑧刀装具（第35図1）

鹿角製のもので把縁装具にあたる。楕円錐台形の本体部と尾側の鞘口装具に挿入される突起部、背側の柱状突出部からなる。角幹基部から第1枝にかけての最も幅の広い部分を利用しており、柱状突出部から本体の喰出鐔（はみだしつば）に相当する部分にかけては鹿角特有の自然面が顕著に残る。鎺（ばばき）に相当する尾側の突起部および柄間装具の挿入される柄穴の横断面はいずれも倒卵形をなす。柱状突出部の尾側に2個の貫通孔が穿たれているが、とくに装飾性は認められない。火を受け白色灰化状態にあり、一部は焼けはじけている。なお、刃関部の孔をもとに推定すると刃幅が2.5cm、棟幅が0.5cm程であり、この時期の刀としては小さいものである。

同様の鹿角製刀装具は、名取市径の塚古墳（長谷部;1924）や福島県上の原古墳群4号墳（伊藤；1973）、郡山市正直古墳群27号墳（郡山市埋文事業団；1993）など、類例はさほど多くないものの5世紀代を中心とした各地の古墳から出土している。なお、これらの中には経の塚古墳や上の原4号墳出土のものをはじめ、直弧文の浮彫が施されるものも多くみられる。本例との間に、精粗や格式などの違いがあった可能性もある。

⑨琴柱形角製品（第35図2）

「琴柱形角製品」あるいは「Ｙ字形鹿角製品」と呼ばれるもので、杖頭飾に相当するものとみられる（註5）。角幹と枝先の分岐部を素材とし、「Ｙ」の字に開く角状突起部と木杖等を挿入するソケット状の体部からなる。角幹側に角状突起部をおき、枝先側から髄質部をくり抜き、盲孔を穿って体部を作り出している。突起部の先端は破損のため不明だが、



（単位：cm）

番号	種類	出土層位	最大長	最大幅	厚さ	質材	備考	図版
1	刀装具	11層	1.4	4.8	2.5	鹿角	把縁装具。[illegible]。金銅由色灰化。	17－1
2	琴柱形角製品	8・9・11層	(8.5)	(1.0)	1.4	鹿角	先端部破損。[illegible]。全面由色灰化。	17－2
3	不明角製品	12層	(22.0)	2.0	1.0	鹿角	先端部破損。[illegible]（[illegible]）を作出。[illegible]。	17－3

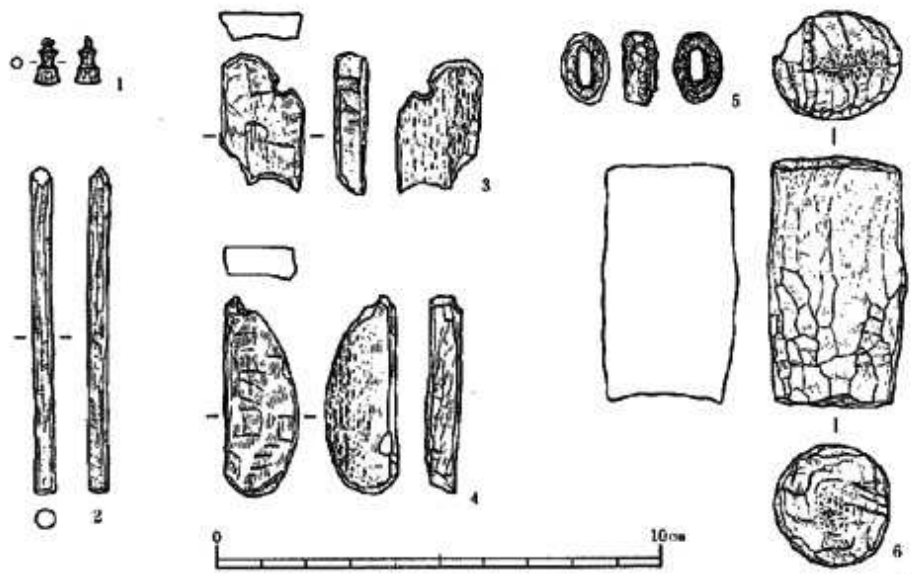
第35図　骨角製品（3）－刀装具・琴柱形角製品・用途不明の角製品

中心に幅0.2cm程の平行する切込みを入れ、両側を丁寧に削って面取りをしている。体部の横断面は表側がほぼ平坦なカマボコ型を呈しており、盲孔は体部の1/2に達している。表には直弧文を意識したとみられる斜交および横軸方向の線刻を施し、裏には表からの3条の線刻を3段に施している。

この種の鹿角製品としては千葉県富津市平塚古墳（柴田;1928）と磯間岩陰遺跡（5世紀後半、堅田;1987）に出土例があり、素材取りや大きさ、「Y」の字に開く突起部の形態等からみて、同様の用途が考えられる。ただし、いずれも盲孔はもたず、体部下端を削って杖等にはめ込むような形に仕上げられていることや、線刻等による装飾が施されないことなど、本例との間にいくつかの相違点もみられる。比較資料が少なく、この点についてさらに詳しく述べることはできないが、地域性や年代差、この種の鹿角製品におけるバリエーション、あるいは儀器や模造品などといった性格の違いを反映している可能性も考えられる。

⑩用途不明の角製品（第35図3、第36図1～6）

第35図3は鹿角の角幹を細長い板状に半截し、髄質面側と側縁を平坦に削って薄く箆状にしたものである。先端部が破損しているため全体形は不明であるが、基部側を断面台形状に削って柄部（握り部）を作り出している。形態的には壱岐カラカミ遺跡や原ノ辻遺跡



（単位：cm）

番号	種別	出土層位	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
1	不明角製品	5層	1.0	0.6	0.6	鹿角	「三鱗盾形角製品」？ 頂部に径0.1cm程の貫通孔を穿つ。	18－3
2	不明角製品	5層	(7.3)	0.4	0.4	鹿角	軸方向の削り板（幅0.5cm前後位）か棒無。本製品？	18－2
3	不明角製品	12層	(3.1)	1.1	0.7	鹿角	裏面と上下端。上端部に径0.4cm程の空孔あり。ほぼ全面黒色炭化。	18－5
4	不明角製品	11層	(4.5)	1.6	0.7	鹿角	裏面ノ上端部。下端部に径0.4cm程の空孔あり。ほぼ全面黒色炭化。	18－5
5	紀り	5層	0.7	1.6	1.1	鹿角	刀子鞘の一部か？ 内径0.9×0.3cm。全面黒色炭化。	18－4
6	不明角製品	5層	5.6	3.0	2.5	鹿角	軸方向の削り板明瞭。一端をやや膨ませている。本製品？	18－7

第36図　骨角製品（3）－用途不明の角製品

などの弥生時代の遺跡で「へら状骨製品」あるいは「骨剣」と呼ばれている鯨骨製品（岡崎:1978）に類似する。ただし・使用の痕跡はもとより、調整も粗いことから粗形段階の未製品の可能性もある。

第36図1は最大長1.0cm、最大幅0.6m程の非常に小さい塔形を呈する角製品で、頭部には径0.1cm程の小孔を穿った突起がつく。角型品に同様の出土例はないが、奈良県桜井市茶臼山古墳出土の五輪塔形石製品としたもの（亀井；1973）に類似している。この石製品は玉杖をはじめとする各種の副葬品とともに石室内から出土しており、本例の性格を類推する上で興味深い。儀器や宝器などの可能性も考えられるが、とくに本例については大きさなどからみて単独に使用したとは考え難く、これらに付属するような装飾的なものと思われる。

第36図3・4はいずれも鹿角を厚さ0.7cm程の板状に加工したもので、残存する平坦な縁辺側には径0.4m程の小孔が穿たれている。一方、孔と反対側の縁辺から裏面にかけては同様に剥がれたような痕跡が認められる。具体的な用途は明らかではないが、把手や脚などの一部とみられる。なお、3と4は左右および表裏で対称の関係にあり、同一個体の可能性もある。

このほか刀子などの把の一部かとみられる角製品（第36図5）や鹿角を径0.4cm程の棒状に加工したもの（第36図2）、径3.0～2.5cm程の円筒状に粗く削ったもの（第36図6）などがある。後二者については未製品の可能性も考えられる。

⑪ト骨（第38図1・2、第39図3）

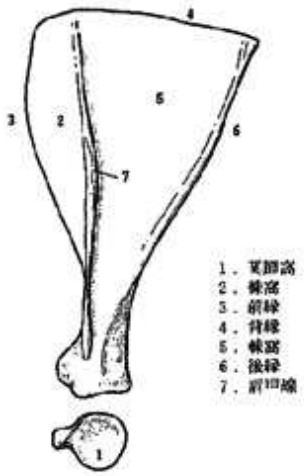
ト骨はいずれもニホンジカの肩甲骨を素材としている。今回の調査ではニホンジカの肩甲骨は左右合わせて23点出土しているが、このうち17点がト骨として利用されている（第13表）。左右による偏りは認められず、齢構成は概して若齢個体のものが多い傾向にある。ただし、焼灼をはじめト占の状況が分かるのは図示した3点のみであり、その他のほとんどものは白色灰化状態にある破片資料で、焼けはじけているものも少なくない（図版18－8）。

1はニホンジカの左肩甲骨を素材としたもので、内外両面に焼灼が認められる。外側（背側面）は関節窩の上部から背縁に向かって肩甲棘および後縁の隆起部分を除去し、棘下窩を鋭利な刃物で削っている。また、内側（肋骨面）も後縁の隆起部分をはじめ、肩甲下窩のほぼ全面が削られており、焼灼面は厚さ0.1cm程に薄く、水平に整形されている。背側面における焼灼は、肩甲棘を除去した海面質部分に0.7×0.4cm程の長楕円形状の粗雑な鑽を彫り、その内側底面に行っており9ヶ所で確認できる。ほとんどのものが内側に達し不正円形状に焼け抜けているが、工具による焼灼痕のみが肋骨面に達し表面的には火を受

層位	左肩甲骨				右肩甲骨				左右不明
	定形品	関節窩	前縁	後縁	定形品	関節窩	前縁	後縁	
1		1(1)							
2		①							①
3						1(1)			前縁 1(1)
4									
5		1(1)		1(1)			1(1)		
6					1	1(1)		2(2)	
7									
8	1			1(1)					①
9		①	1(1)	1(1)					
10									前縁 1(1)+①
11	1(1)	1+①	3(3)	3(3)		1(1)+②	3(3)	5(3)	棘上窩 1
12									
13									
14									
15	1								
16									後縁 1
17									
18									
19									
20									
合計	2(1)	3(2)+①	4(4)	7(6)	1	3(3)+②	4(4)	7(7)	

※（ ）:焼けている資料の内数 ○:未使用の肩甲骨

第13表　ト骨の層位別出土状況



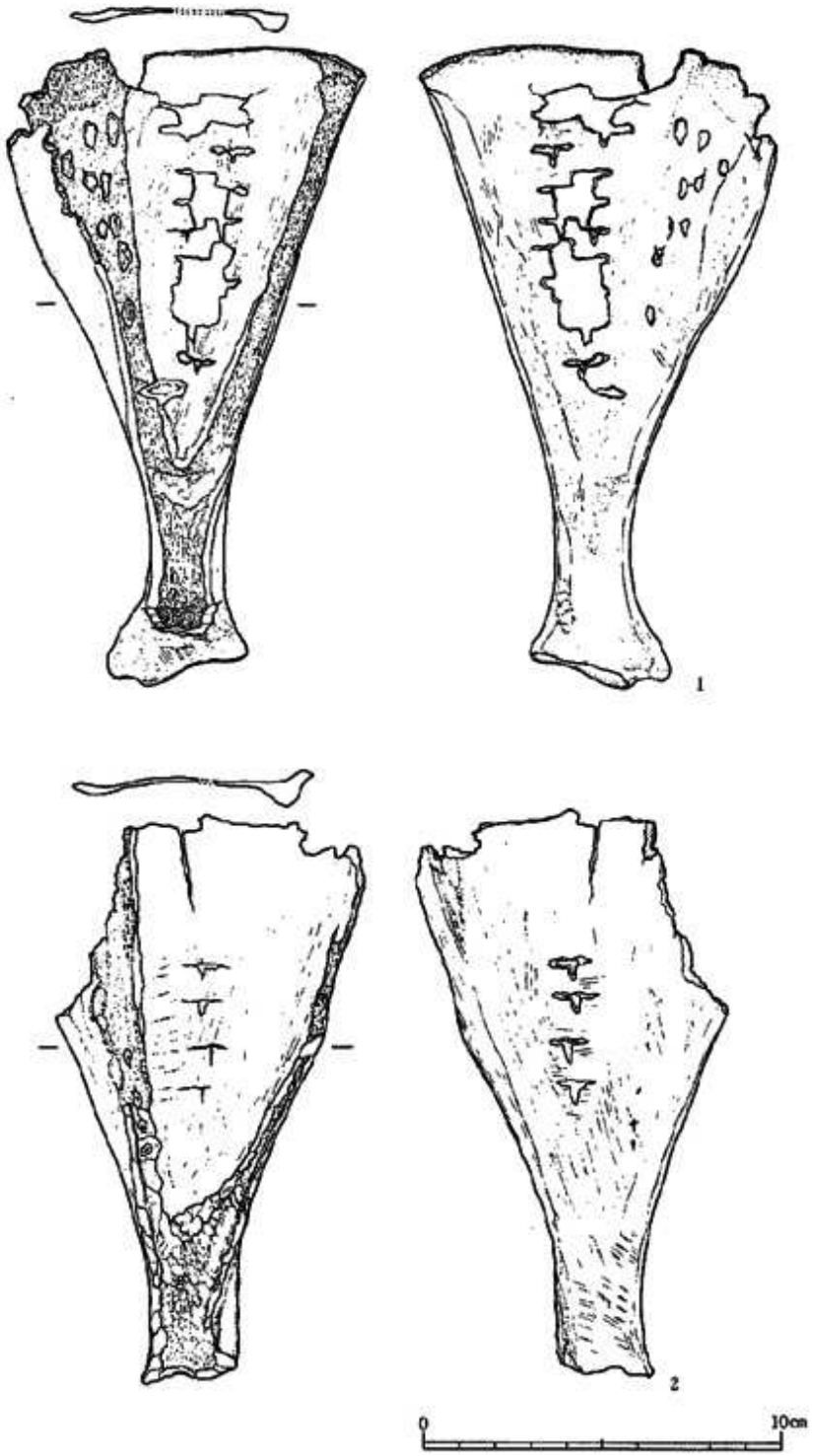
第37図　肩甲骨細部名称

け黒褐色に変色しただけのものもある。一方、肋骨面における焼灼は、肩甲下窩の薄平にされた部分に一辺が1cm前後の「十」あるいは「⊥」形状の縦に連続する刻みを2列入れ、その内部に工具をあてて灼いたもので、これらが近接するところでは鈎形に焼け抜けている。このため肋骨面における焼灼の正確な数は不明であるが、少なくとも17ヶ所以上に行われたものと思われる。

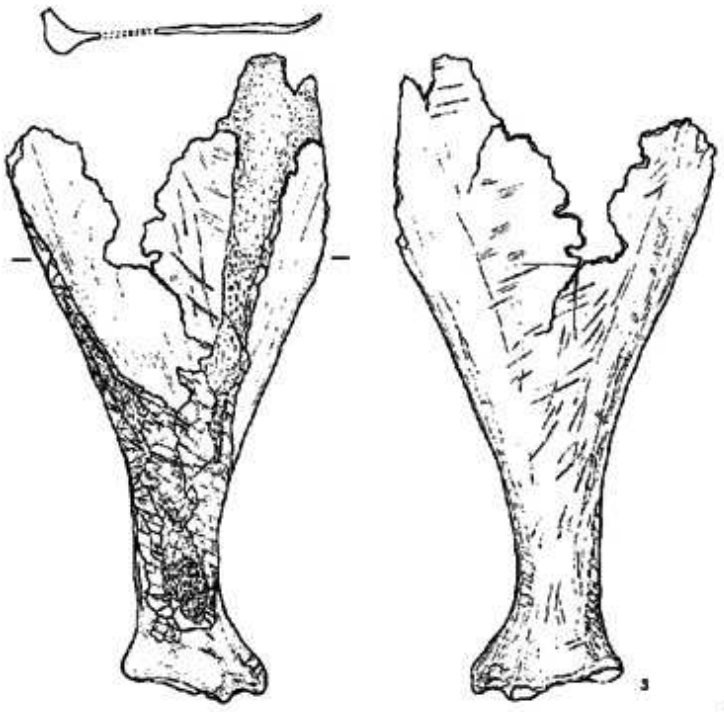
2はニホンジカの左肩甲骨の関節窩を除去したもので、1と同様に内外面を整形し、両面にそれぞれ異なる焼灼を行っている。背側面の焼灼は肩甲棘を除去した海面質部分に4ヶ所で認められるが、焼け抜けているものはなく、工具による焼灼痕のみが肋骨面に達している。肋骨面の焼灼は縦0.7cm、横1cm前後の「⊥」形状の刻みを4ヶ所に単独で施し、その内部に行ったもので、「⊥」字形状に焼け抜け、背側面には横方向の焼罅が認められる。

3はニホンジカの右肩甲骨の内外面を整形したもので、焼灼は肋骨面にのみ認められる。上端部（近位端側）が破損しており、詳しい焼灼の状況は不明であるが、少なくとも4ヶ所に「＋」字形状の刻みと焼け抜けた痕跡が認められる。背側面については、1・2と同様に肩甲棘を除去し、海綿質部分を平らに整形しているが、焼灼は認められない。

古墳時代以後のト骨は、整治が施され、片面だけに鑽を彫ってその底面を灼き、滑らかに磨いた反対側の面で占断する「灼面ト面分離型」と浮ばれるもので、焼灼は鑽内に限られるのが特徴である（神澤;1990）。1・2の背側面にみられる粗雑な鑽内を灼くような焼灼方法は、大阪府東大阪市日下遺跡や島根県鹿島町古浦遺跡（神澤；1976）の出土例をみ



第38図　骨角製品（5）ート骨



番号	場所	出土層位	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
1	下骨	8層	(12.0)	(12.0)	0.3	ニホンジカ中手骨	骨幅最大3.0cm。残存:身(10.2×0.4cm)の長軸方向割り面。(右)一部に0.5cm幅の欠けがみられる。(左)一部に0.3cm幅の欠けがみられる。手前に向かって、徐々に薄くなる。	19
2	下骨	8層	(12.6)	(12.6)	0.3	ニホンジカ中手骨	骨幅最大3.4cm。残存:身(10.4×0.2cm)の長軸方向割り面。(右)端に0.1cm幅の欠けがみられる。(左)端に0.1cm幅の欠けがみられる。手前に向かって、徐々に薄くなる。	20
3	下骨	8層	(20.3)	(10.7)	0.7	ニホンジカ中手骨	骨幅最大4.6cm。残存:身のみ。(右)一部に0.5cm幅の欠けがみられる。(左)一部に0.5cm幅の欠けがみられる。手前に向かって、徐々に薄くなる。	21

第39図　骨角製品（6）ト骨

る限り該期の典型的なものであり、神澤氏による編年（神澤;1987）とも矛盾しない。ただし、肋骨面にみられるような焼灼方法をはじめ、内外両面に異なる焼灼を加えたものは類例がなく、本遺跡における特徴といえる。なお、今回の出土資料の中には、3のように片面にのみ焼灼されるものや同様の焼灼方法でも1・2のように灼痕の数・位置などに違いが認められるものがある。残存状況が悪く焼灼の状況の明らかなものが少ないため、焼灼における規則性などについて述べることはできないが、こうした違いが具体的なト占の目的や内容を示しているものと思われる。

県内では古墳時代後期（栗囲式期）のものが本遺跡ＳＤ2050Ｂ河川跡（註6）、平安時代のものが本遺跡多賀前地区ＳＤ2000河川跡（菅原・岩見他;1993）、多賀城跡鴻ノ池地区（富岡;1992）、塩釜市表杉ノ入貝塚（伊東;1981）、七ヶ浜町東宮鳳寿寺貝塚（後藤;1981）に出土例がある。いずれも神澤分類の第Ⅴ形式（神澤;1987）に属し、整形した片面に方

形の鑽を彫り、その内側底面を「十」字形に灼いたもので、本例とは鑽の彫り方や焼灼などに違いが認められる。また、本例ではニホンジカの肩甲骨のみが素材として利用されているが、ＳＤ2050Ｂではニホンジカの肋骨がこれに加わり、ＳＤ2000や多賀城跡ではウシもしくはウマの肋骨のみが利用されるようになる。これは、素材の入手し易さと一個体あたり得られる素材の量を反映したものとみられ、古墳時代後期以降に卜占の頻度が高まったことを示している可能性が高い。

(註3)　平成5年度の都市計画道路建設に伴う山王遺跡八幡地区の調査で、古墳時代（栗囲式期）のＳＤ2050Ｂ河川跡（第2図）から、多量の土器や木製品（約200点）、卜骨（約100点）、骨鏃（約100点）などが出土している。

(註4)　大阪市文化財協会久保和士氏の御教示による。実測図は、皇学館大学考古学研究会による展示会のパンフレット「菅島の遺跡と遺物」（1977）の中に掲載されている。

(註5)　奈良国立文化財研究所上原真人氏、松井章氏の御教示による。

(註6)　註3に同じ。

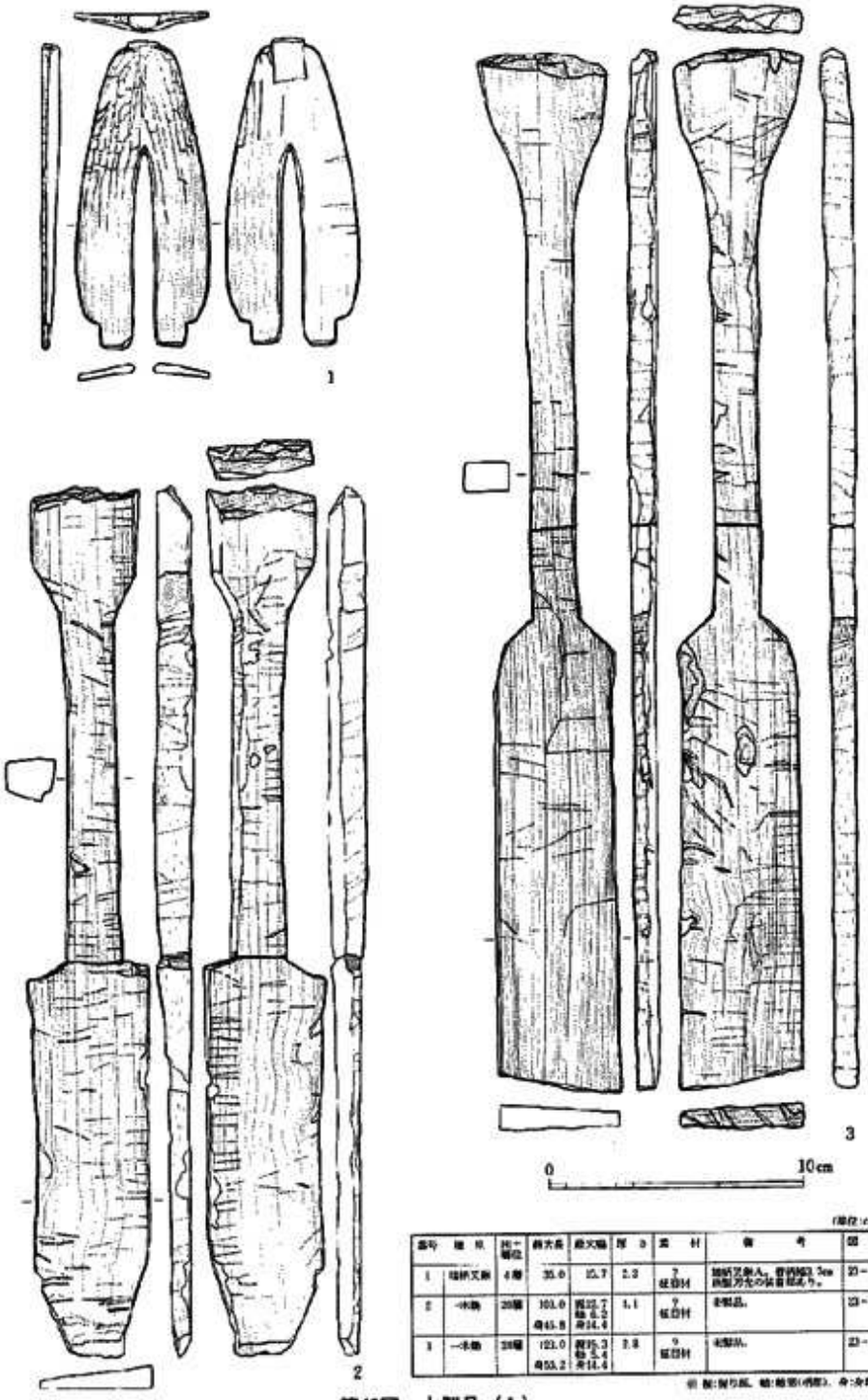
3　木製品

膝柄又鍬、一木鋤未製品、曲物、櫂状木製品、筴状木製品などがある。また、このほかにも用途不明のものや未製品をはじめ、切り出しただけの材やこれらの廃材・屑も多量に出土している。なお、木製品の素材については樹種同定を行っていないため不明である。

①膝柄又鍬（第40図1）

着柄軸部は欠損しているが、全体の形状から棒状を呈するものと考えられるもので、町田氏による分類の膝柄又鍬Ａ（町田;1981）にあたる。身部前面には膝柄着装のためと思われる溝状の削り込みが認められ、柄と接する面は平坦である。また、刃部先端には幅10.0cm、厚さ0.8cm程の鉄製刃先の装着部が作り出されている。樹種は不明であるが、柾目材を使用している。

東北地方における膝柄又鍬の出土例は、古墳時代前期のものが小牛田町山前遺跡、仙台市中在家南遺跡、押口遺跡、中期のものが本例のほかに中在家南遺跡に認められる。このうち、着装軸部が笠状に広がるもの（膝柄又鍬Ｂ）は、今のところ押口遺跡で棒状を呈するもの（膝柄又鍬Ａ）と共伴して出土した1点以外に例はなく、前期および中期段階には本例と同様の膝柄又鍬Ａが主体をなしている（荒井；1992）。同様に二又状を呈さない膝柄鍬についてみれば、前期には山前遺跡、後期には山形県山形市嶋遺跡、天童市西沼田遺跡、福島県大森Ａ遺跡に出土例がある。このうち山前遺跡と大森Ａ遺跡のものは着装軸部が棒状を呈するもの（膝柄鍬Ａ）であり、嶋遺跡と西沼田遺跡のものはすべて笠状に広がるも



(単位:cm)

番号	種類	注+層位	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
1	地鍬又鍬	4層	35.0	15.7	2.3	? 柾目材	地鍬又鍬A。音柄幅3.3cm 鍬製方先の装着部あり。	23-1
2	一木鍬	20層	103.0 身45.8	腕22.7 軸6.2 身14.4	4.1	? 柾目材	未製品。	23-5
3	一木鍬	20層	123.0 身53.2	腕15.3 軸5.4 身14.4	2.8	? 柾目材	未製品。	23-2

※ 腕:握り部。軸:軸部(柄部)。身:身部。

第40図　木製品（1）

の（膝柄鍬B）からなる（荒井；1992）。類例が少なく、膝柄鍬類の着装軸部におけるこうした違いがどのような理由によるものなのか明らかではないが、一般的には笠部が未発達のものから笠状が発達したものへの年代差として捉えられており（町田;1981、樋上；1989）、上原氏はその要因の一つとして刃部における法量の拡大といった機能差をあげている（上原；1991）。なお、本例には鉄製刃先の装着部が作り出されているが、これまで鉄製刃先を装着した膝柄叉鍬の出土例はなく、再加工されたものである可能性も考えられる。

②一木鋤（第40図2・3）

斜面下方の砂層(20層)中から2本並んだ状態で出土した。大きさは若干異なるものの、いずれも粗形段階の未製品で同様な製作段階にある柄と身が平行してまっすぐ伸びるもので、一木から大まかに作り出されている。握り部は五角形状を呈する。樹種は不明であるが、柾目材を使用している。

③曲物（第41図6）

樹皮を0.3cm程に薄く、平坦に削って利用したもので、蓋板もしくは底板の一部とみられる。縁辺には側版と結合するためのものとみられる径0.3cm前後の孔が、おおよそ1.5 cm間隔で穿たれている。破片資料のため全体形や大きさは不明であるが、正方形だとすれば径30cm程になるものと思われる。類例としては、仙台市下飯田遺跡（註7）と千葉県市原市五所四反田遺跡に出土例がある。とくに五所四反田遺跡のものは保存状況が良好で、底板と側板が結合した状態で出土している（註8）。

（註7） 仙台市教育委員会の中富洋氏の御教示による。

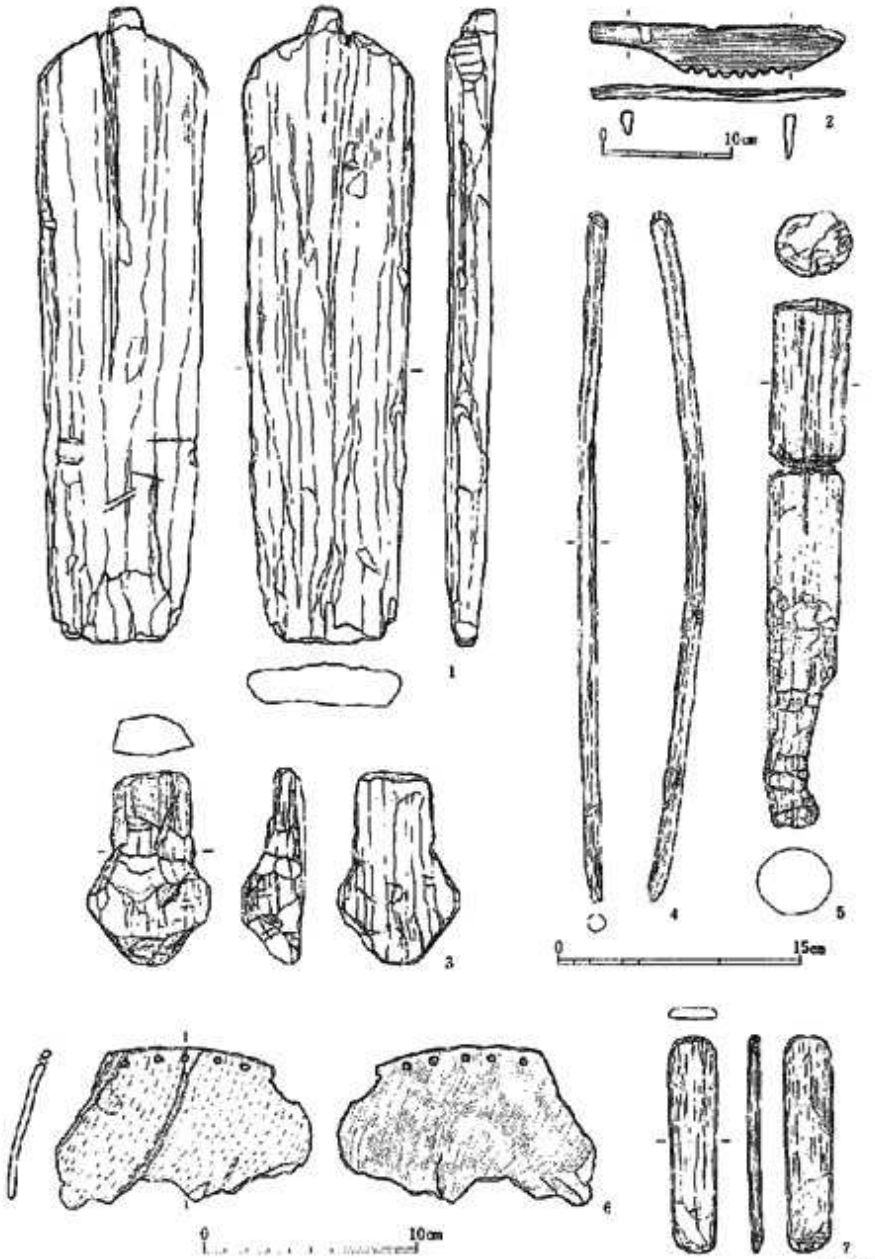
（註8） 市原市文化財センターの近藤敏氏の御教示によれば、底板は径20～25cmの正円形のもので、側板は15cm程の高さで残存しており、両者はそれぞれの縁辺の孔を綴じ合わせて結合しているという。

④用途不明の木製品（第41図1～5・7）

1は長方形の身部の上端に突出部を作り出した櫂状の木製品である。身の肩部は撫肩状を呈し、末端部はやや幅狭く、薄く削っている。末端部の縁辺は両側から削り込まれ、何かを装着するような作り出しが認められる。具体的な用途は不明であるが、全体を平滑にするような調整も認められないことから未製品の可能性が高い。

2は刀剣の形をした材の側面に鋸歯を刻んだものである。柄と身からなり、側縁を薄くし片側に歯をつけているが、全体的に作りが雑で使用の痕跡も認められない。日常的な生活用具というよりは、むしろ祭祀に伴う刀形あるいは鋸形といった木製形代の可能性が考えられる。

このほか弓状を呈するもの(3)や杵状の丸木材に断面「V」字状の切込みをもつもの(4)、柄の一部がと思われるもの（5）、箆状を呈するもの（7）などがある。これらの具体的な用途は明らかではなく、3～5については破損品や半製品と思われる。



（単位cm）

番号	種別	出土部分	最大長	最大幅	厚さ	素材	備考	図版
1	建築木製品	17層	79.0	10.5	3.4	不明	木製品。一端に[illegible]の突出部をもつ。	15-1
2	形代（鋸形ヤリ）	層	19.5	3.3	3.9	不明	身部と柄部からなる。身部には両面に切り出し手取りている。	15-2
3	加材	6層	85.8	2.1	2.3	不明	小林木製品。上端の一端に手状の作り出しあり。	15-3
4	加材	11層	68.0	10.3	4.0	不明	中部に紐束「V」字状の切込みあり。全面黒色炭化。	15-4
5	柄ヨ	9層	12.1	7.5	1.0	不明	柄の全面黒色炭化。	15-5
6	曲物蓋or底板	2-3層	-	-	3.3	不明樹皮	樹皮に直径約2cmの孔を穿っている。	15-6
7	建築木製品	5層	10.4	2.2	3.6	不明	一部黒色炭化。	15-7

第41図　木製品（2）

4 竹製品

篭編物（ザル、カゴ）、竪櫛がある。篭編物については4点出土したが，このうち形や大きさが推定できるのはザルとカゴの2点のみである。

①ザル（第42図1）

円形の皿形のもので、口径約50cm、底径約48cm、口縁部は4cm程の立ち上がりを残している。内面底部は幅0.4cm程の竹条を用いて約3.5cmの間隔で六つ目に編み、口縁部は底からの竹条で笊目に編んでいる。縁については不明である（1a）。外面底部についても同様の竹条を用いて六つ目に編んでいるが、目の大きさは約1.0cm前後で、内面底部とは異なっている（1b）。いずれも竹に節は見られず、布や漆などの痕跡も認められない。これらのことから、本例はほぼ同じ大きさのザルが2枚重なった状態で出土したものと思われる。

②カゴ（第42図2）

円筒形を呈すると思われるものであるが、底部の形や大きさについては不明である。幅1.0cm前後の竹条を用いて下半部は笊目に編み、上半部では下半部からの竹条で六つ目に編んでいる。縁は竹条を巻き付けて固定している。上半部には竹条を径6.0cm程に束ねた環状のものが編目に巻き付いているが、反対側では確認されなかった。また、植物の細い茎を束ねて編目に縛り付けている。

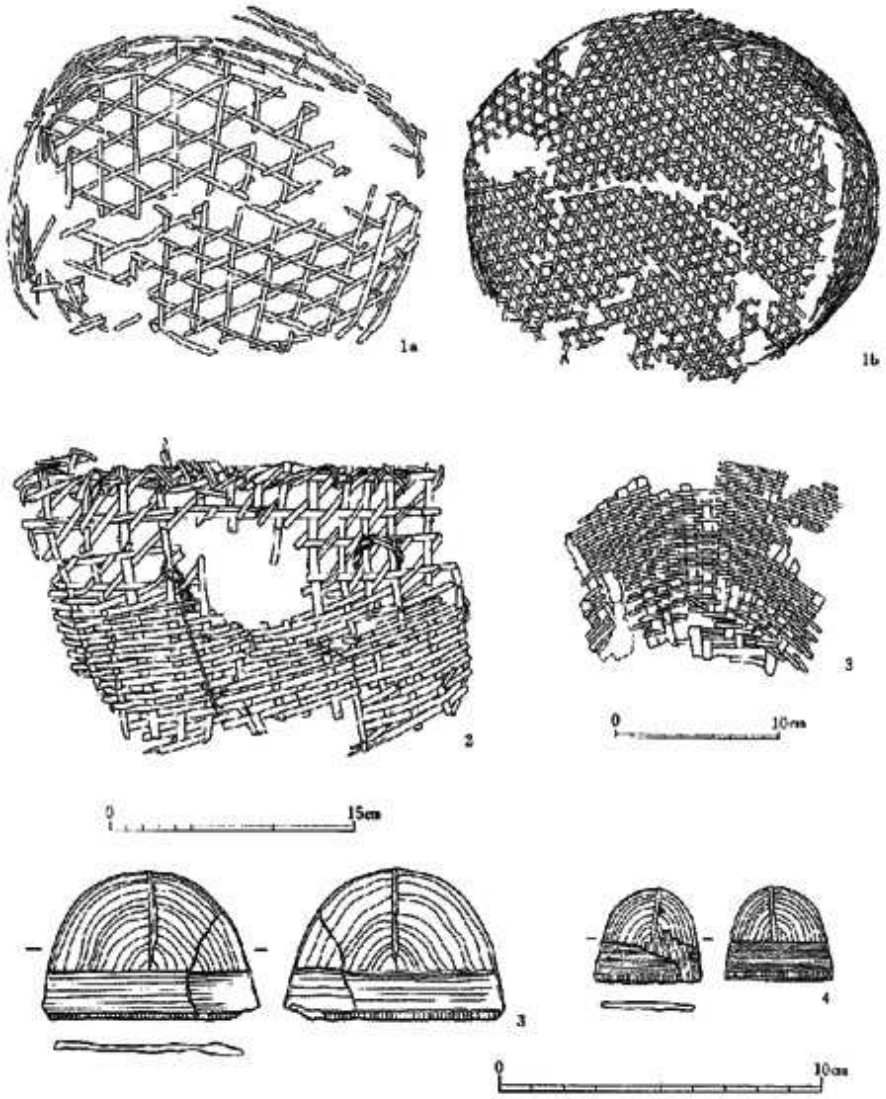
③用途不明の竹製品（第42図3）

このほか断片資料ではあるが、幅0.3cm前後の竹条を緯にして、幅0.1cm前後の竹条を「ござ目」に編んだ竹製品がある。形や大きさも明らかではないが、目が細かく箕のような用途が考えられる。

④竪櫛（第42図4・5）

明らかに大きさの異なる竪櫛が3点出土した。いずれも頭部破片で櫛歯部分は残存しない。4は幅0.1～0.2cm、厚さ0.1cm程の薄く細長いひごを24枚重ね、中央を糸でかがって折り曲げ、頭部下端をさらに糸でかがってひごで巻き付けた大型のものである。頭部長4.6cm、幅6.8cmである。頭部全体を黒漆で厚く固定しており、1本単位のひごの痕跡は確認できない。5も同様の作りのもので、幅・厚さとも0.1cm程のひごを12枚重ねて折り曲げ、黒漆を塗布している。頭部長3.2cm、幅3.5cmである。このほか保存状況が悪いものの、頭部長1.8ccm、幅（2.2）cm程の小さな竪櫛も出土している（図版25－5）。

なお、5の頭部には痕跡的にではあるが、赤漆が認められている。黒漆の上から赤漆が塗られた装飾性の高いものであったと思われる。



（単位：cm）

番号	種別	出土遺跡	口径	底径	残存高	最大長	最大幅	厚さ	備考	図版
1	ザル	9層	(55.0)	(48.0)	(4.0)	－	－		幅約0.5cmの竹条で六つ目編みしたザルが重なっている。	15－1
2	カゴ	9層	(55.0)	－	(35.0)	－	－		幅約1.0cmの竹条で三重部を六つ目編み、下の部を三目編み。	15－2
3	不明電線(?)	9層	－	－	(6.0)	－	(8.0)		幅約0.5cmの竹条を厚に、幅2.0cmの竹条を「ニ字形」編み。	15－3
4	盤状	6層	－	－	(4.0)	－	6.0	0.1	解説は不、厚は変化。	15－4
5	盤状	2層	－	－	(2.2)	－	2.2	0.2	解説は不、厚は中上に赤色が一部残存。	15－5

第42図　竹製品

5　石製模造品・石器

①石製模造品（第43図）

他の遺物と同様に炭化物層を中心に出土した（第14表）。勾玉1点、剣形品9点、有孔円板9点、臼玉664点、臼玉未製品5点、破片あるいは未製品で器種不明のもの11点がある。臼玉を除けば全体の出土量も少ないが、ＳＸ230の場合完成品に混じって未製品および破片が出土している点が特徴といえる。なお、これらのほとんどのものは土壌の水洗選別によって抽出されたものであり、実際にはさらに多くの石製模造品を含んでいた可能性が高い。以下、各種類ごとに概要を述べていく。

勾玉は1点のみ出土した。石材は粘板岩を用いており、金属器による加工痕が顕著に残り、これをさらに調整するような研磨痕は認められない。

剣形品は、いずれも基部が平坦な細長い五角形状を呈するもので、ほぼ左右対称をなしている。整形後の研磨が顕著で、全体的に丁寧なつくりのものが多い。鎬が作出されているものは6点あり、このうち2点は両面に認められる。孔の穿たれるものが多い傾向にあるが、両面に鎬をもつ第43図5は孔をもたない。石材は粘板岩、雲母片岩、滑石などが用いられ、比較的大型のものには粘板岩および滑石、小型のものには雲母片岩といった、大きさと石材の間で相関が認められる。

有孔円板には単孔のものと複孔のものがあり、前者が多い傾向にある。いずれもほぼ正円形を呈しており、両者の間に形態や大きさによる違いは認められない。研磨痕は顕著であるが、金属盤による加工痕が認められるものはない。石材は粘板岩、雲母片岩、滑石が用いられ、剣形品と同様に比較的大型のものには粘板岩および滑石、小型のものには雲母

層位	勾玉	剣形品	有孔円板		臼玉	器種不明
			単孔	複孔		
1						
2		1			120	(1)
3					29(3)	
3					27(3)	
4					10	
5		2	(1) (1)(1)		26	(2)
6				1	45(1)	(1)
7					2	
8		1			13	(1)
9					17(1)	(1)
10					7	
11	1	3	1(1)		180	(5)(1)
12					45	
13					92	
14					1	
15					20	
16		1	2		17	
17		1			7	
18				1	28	
19					8	
20						
不明					14	
合計	1	9	5(1)(2)		664(5)	(11)(1)

(1)：破片、(2)：未製品

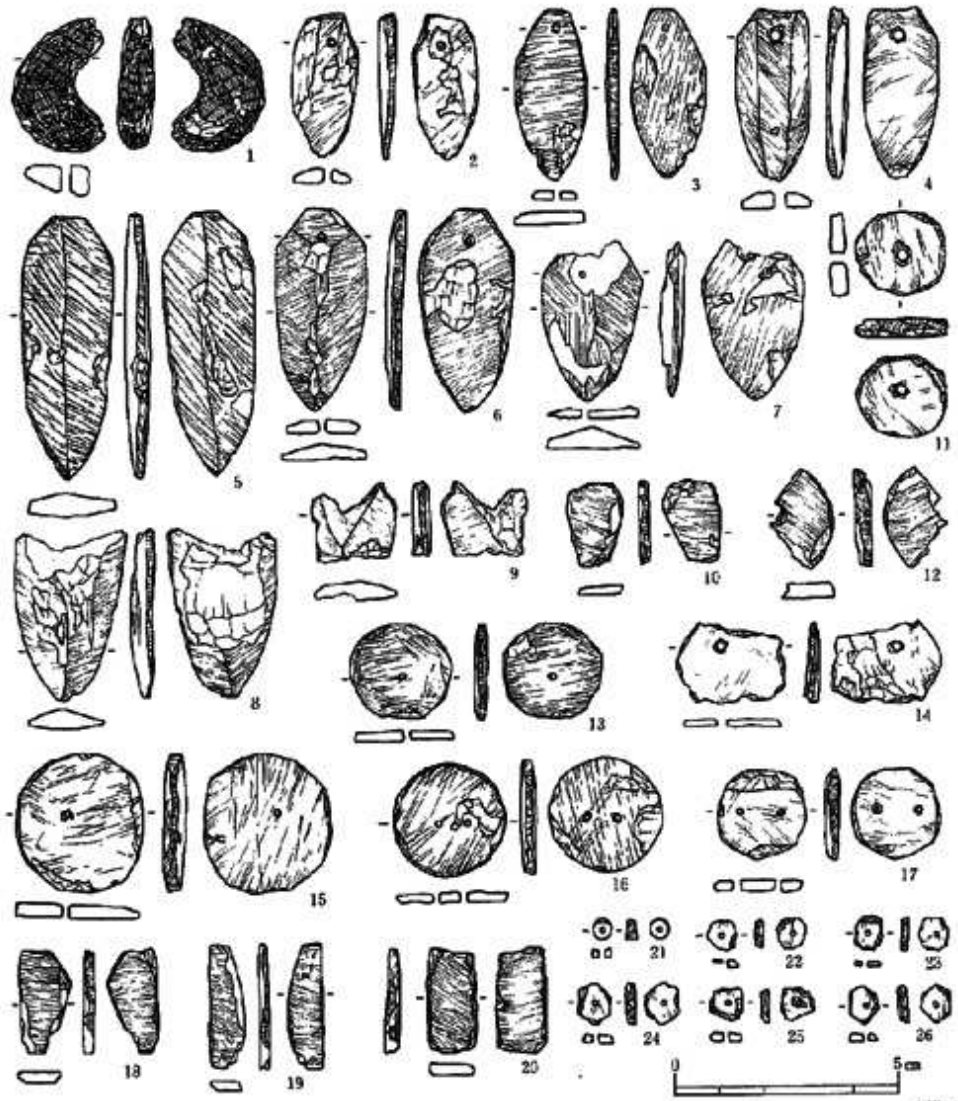
第14表　石製模造品の層位別出土状況

	粘板岩	雲母片岩	砂質岩	滑石	不明	計
勾玉	1					1
剣形品	1	4		2	1	8
有孔円板	3	2		1		6
臼玉	142	142	4	226		664
臼玉未製品	1			4		5
破片	5	6	1			11

第15表　石製模造品の器種別石材内訳

最大径	個数	最大厚	個数
2.1~2.5mm	2	0.1~0.5mm	1
2.6~3.0	0	0.6~1.0	1
3.1~3.5	139	1.1~1.5	50
3.6~4.0	316	1.6~2.0	168
4.1~4.5	135	2.1~2.5	229
4.6~5.0	52	2.6~3.0	171
5.1~5.5	11	3.1~3.5	37
5.6~6.0	1	3.6~4.0	6
計	664	4.1~4.5	0
		4.6~5.0	1
		計	664

第16表　臼玉の最大径・最大厚別個数



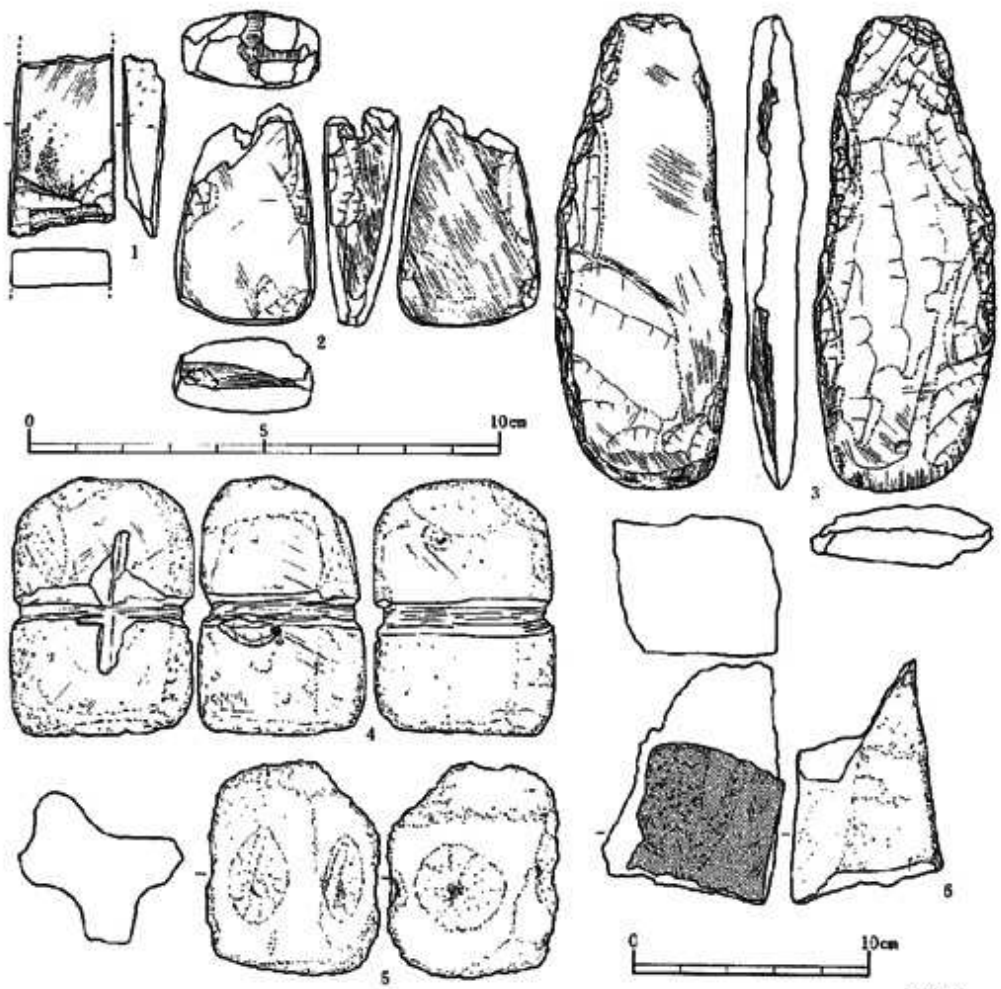
（横位：mm）

番号	種別	地位	最大長	最大幅	最大厚	孔径	石材	図番	番号	種別	地位	最大長	最大幅	最大厚	孔径	石材	図番
1	臼玉	11層	30.2	15.0	7.4	－	粘板岩	26－1	11	有孔円板未製品	5層	(13.1)	(24.4)	3.6	2.6	?	26－14
2	剣形品	11層	35.7	14.7	3.8	2.3	雲母片岩	26－2	15	有孔円板（単孔）	10層	31.0	22.2	3.8	1.5	粘板岩	26－13
3	剣形品	5層	30.4	18.8	2.7	1.6	雲母片岩	26－4	16	有孔円板（単孔）	10層	25.7	25.3	2.1	1.4	滑石	26－12
4	剣形品	16層	38.1	17.0	4.8	3.6	雲母片岩	26－3	17	有孔円板（単孔）	6層	20.1	15.8	2.8	1.7	雲母片岩	26－10
5	剣形品	11層	28.7	20.6	5.5	－	滑石	26－8	18	剣形品未製品	8層	23.1	11.7	2.5	－	粘板岩？	26－21
6	剣形品	11層	45.5	20.6	4.9	1.8	雲母片岩	26－5	19	有孔円板（単孔）	8層	28.6	8.3	2.2		?	26－19
7	剣形品	11層	(36.6)	22.8	4.9	1.3	粘板岩	26－6	20	剣形品未製品	11層	25.4	11.0	2.9	－	?	26－18
8	剣形品	2層	(36.6)	20.0	5.1	－	滑石	26－7	21	臼玉	9層	－	4.4	2.5	1.4	粘板岩	
9	剣形品	5層	(18.7)	(17.0)	4.7	－	滑石		22	臼玉未製品	2層	7.1	6.2	1.8	1.3	滑石	26－25
10	有孔円板未製品	5層	19.3	17.3	2.2	－	雲母片岩	26－17	23	臼玉未製品	9層	7.5	6.7	1.8	1.3	滑石	26－24
11	有孔円板（単孔）	16層	19.7	15.3	4.0	2.2	粘板岩	26－9	24	臼玉未製品	6層	8.4	7.5	2.2	1.3	滑石	26－23
12	有孔円板（単孔）破片	11層	22.5	13.8	3.8	－	粘板岩	26－15	25	臼玉未製品	2層	7.4	7.0	2.1	1.9	滑石	26－22
13	有孔円板（単孔）	11層	21.3	20.0	2.3	1.1	雲母片岩	26－11	26	臼玉未製品	2層	8.3	6.4	2.1	1.6	粘板岩	26－20

第43図　石製模造品・臼玉

片岩といった使い分けの傾向がある。

臼玉は完形品が664点出土した。最大径は2.0～6.0mmと値に幅があり、3.5～4.0mmのものが約半数を占め、3.0～4.5mmでは全体の9割弱のものがこの値の中におさまる傾向にある。一方、最大厚は0.1～5.0mmと幅があるが、1.5～3.0mmのものが全体の8割以上を占めている。石材は粘板岩、雲母片岩、砂質岩、滑石が用いられている。滑石が最も多く、全体の約1/3を占めている。臼玉の未製品は5点出土した。上下両面を研磨し、



(単位:cm)

番号	種別	出土層位	最大長	最大幅	厚さ	石材	備考	図版
1	砥石	8層	(4.0)	(2.3)	(0.5)	粘板岩	研ぎ痕あり。	27－1
2	敲磨石	11層	(4.7)	3.6	1.6	砂岩	上端欠損。表裏する孔あり。重量29g。	27－2
3	磨製石斧	11層	10.2	3.4	1.5	粘板岩	全面研磨。重量73g。	27－3
4	有溝石器	11層	11.0	7.8	7.1	凝灰岩	風化顕著。重量260g。	27－4
5	凹石	5層	9.2	7.2	5.3	安山岩	風化顕著。重量440g。	27－5
6	砥石	層位不明	(10.2)	(7.7)	(5.0)	安山岩	重量580g。	27－6

第44図　その他の石製品

径6.0～9.0mm程の多角形に削った板状の石片のほぼ中央に孔を穿ったもので、形や大きさに規格性は認められない。厚さは完形品と同様であり、未製品としては側面の整形のみを残した段階のものである。穿孔による破損も認められず、どのような理由で完形品にまで至らなかったのかは不明であるが、臼玉の製作過程を知る上で興味深い資料である。こうした例は、村田町新峯崎遺跡（阿部・須田・岩見；1991）、群馬県東村八寸大道上遺跡（坂井・原;1989）、千葉県八千代市権現後遺跡・成田市石塚遺跡（加藤・小林・山口；1992）などでも出土しており、石塚遺跡ではその製作過程について詳しく述べられている。

②石器（第44図）

2は撥形を呈する砂岩製の石器で、垂飾品と考えられる。上端には前後および一側面から直交する孔が穿たれている。

3は粘板岩製の磨製石斧で、剥離面の境が不明瞭になる程に研磨が施されている。

4は断面「U」形の溝が短軸方向に全周めぐる凝灰岩製の石器で、漁網等に伴う錘と考えられる。平坦な中央部にはこれと直交する同様の溝が切られている，

このほか砥石2点（1・6）、凹石1点（5）が出土している。

6　その他の人工遺物

鞴羽口と鉱滓（図版27下段）が出土している。鞴羽口は高坏の脚部を転用したものが1点出土している。今回図示できなかったが、同様のものはＳＤ777河川跡南岸の自然堤防上で検出された鍛冶遺構（第2図）からも2点出土している（註9）。本遺跡では、今のところ典型的な土製鞴羽口の出土例はなく、定形的な羽口が導入される以前の状況を示しているものと思われる。鉱滓については、成分分析などの金属学的な分析を行っていないため、どの段階の滓なのかは明らかではないが、鍛冶遺構からは鍛造剥片も多量に出土している。

東北地方における該期の鍛冶の例は、福島県郡山市永作遺跡（柳沼；1987）、南山田遺跡（柳沼;1990）で検出されており、永作遺跡からは羽口が出土している。ただし、年代的には本遺跡よりも新しく位置付けられ、出土した羽口はいずれも定形的な形態のものである。

類例が少なく現時点で結論付けることはできないが、年代や羽口の形態からみて、本遺跡の鍛冶は東北地方において初源的な状況を示している可能性が高い。

（註9）多賀城市埋蔵文化財調査センターの千葉孝弥氏の御教示による。

7　動物遺体

炭化物層を中心とした層から出土したもので、発掘時に採集した大型資料と土壌の水洗選別によって抽出した資料からなる。ただし、今回採取した土壌サンプルは、前述のとお

り部分的なものであり、魚骨などの微小骨については、全体的な傾向は捉えられるものの量的には必ずしも実態を示していないものと思われる。分類および同定結果は、第17～19表に示したとおりで、二枚貝綱4種類、海胆綱1種類、軟骨魚綱1種類、硬骨魚綱10種類、両生綱1種類、爬虫綱1種類、鳥綱1種類、哺乳綱4種類が検出された。以下、各種類ごとに概要を述べていく。

①貝類

淡水性のもの1種（イシガイ科の一種）、汽水性のもの1種（ヤマトシジミ）、鹹水性のもの2種（アサリ・マガキ）が出土しているが、いずれもまとまって出土した層はなく、殻頂の残存するものもない。破片や員の表皮のみが僅かに出土したにとどまる。

②棘皮類

ムラサキウニの殻破片のみが僅かに出土している。

③魚類

12種検出された。これらを生態な特徴にもとづき分類してみると、純淡水性のもの2種（コイ科・ドジョウ科）、季節によって淡水域と鹹水域を往復するもの2種（サケ科・ウグイ属）、季節や成長段階において汽水域に侵入する鹹水性のもの3種（マイワシ・スズキ・クロダイ）、鹹水性のもの4種（エイ目・カツオ・マアジ・マフグ科）に分けることができる。ただし、全体の出土量は少なく、各層とも椎骨を中心に数個ずつ検出されただけで、層や種類でまとまって検出されたものはない。これはサンプル量の問題だけではなく、本来的に包含層に廃棄されることが少なかった可能性が高い。こうした出土状況の中で特定

I 軟体動物門 Phylum Mollusca	カツオ *Euthynnus pelamis*
二枚貝綱 Class Pelecypoda	スズキ *Lateolabrax japonicus*
イシガイ科 Unionidae gen.et sp.indet.	マアジ *Trachurus japonicus*
ヤマトシジミ *Corbicula japonica*	ボラ属 Mugil sp.
アサリ *Ruditapes philippinarum*	クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*
マガキ *Crassostrea gigas*	マフグ科 Tetraodontidae gen.et sp.indent.
II 棘皮動物門 Phylum Arthropoda	3 両生綱 Class Amphibia
海胆綱 Class Echinoidae	カエル類 Anura fam.indent.
ムラサキウニ *Anthocidaris crassispina*	4 爬虫綱 Class Reptilia
III 脊椎動物門 Phylum Vertebrata	ヘビ目 Ophidia fam.indent.
1 軟骨魚綱 Class Chondrichthyes	5 鳥綱 Class Aves
エイ目 Rajiformes fam.indent.	ガンカモ科 Anatidae gen.et sp.indent.
2 硬骨魚綱類 Class Osteichthyes	6 哺乳綱 Class Mammalia
ニシン科 Cupeidae gen.et sp.indet.	ニホンジカ *Cervus nippon*
サケ科 Salmonidae gen.et sp.indet.	イノシシ *Sus scrofa*
コイ科 Chprinidae gen.et sp.indet.	イヌ *Canis famirialis*
ドジョウ科 Cobitidae gen.et sp.indet.	ネズミ類 Rattus sp.
ウグイ属 Tribolodon sp.	

第17表　出土動物種名表

層位	目・軟皮類	魚類	両生・爬虫類	鳥・哺乳類
2	アサリ（破片）、マガキ（破片）	エイ目（尾棘2、椎骨3）、クロダイ（前上腕骨L1）、ニシン科（腹椎1、椎骨2）、サケ科（椎骨破片2）、種不明魚（椎骨10）		イヌ（橈骨R、尺骨R、種子骨、末節骨）、ネズミ（上腕骨、大腿骨）
3	イシガイ科（破片）	エイ目（尾棘1）、サケ科（椎骨破片1）		
5	アサリ（破片）、ムラサキウニ（殻破片6）	エイ目（椎骨1）		イメ（腹椎）
6	イシガイ科（破片）	エイ目（椎骨3）、カツオ（腹椎1）、タイ科（尾椎1）		イヌ（遊離歯）
8		エイ目（尾棘1、椎骨2）、	カエル（上腕骨L）	
9		エイ目（椎骨1）、	カエル（部位不明）	
11	ヤマトシジミ（破片）マガキ（破片）	エイ目（尾棘1、椎骨1）、ニシン科（腹椎5、尾椎4）、サケ科（椎骨6・破片117、遊離歯10）、コイ科（椎骨R1、喉頭骨L3・P2、腹椎骨2、第2脊椎骨1、腹椎3、尾椎6、尾部棒状骨1）、ドジョウ科（尾椎2）、ウグイ属（第2脊椎骨1、腹椎15、尾椎8）、カツオ（尾椎1）、スズキ（尾椎4）、ボラ属（腹椎2、種不明魚（椎骨8）		ガンカモ科（癒合頭骨L1）、種不明鳥類（烏口骨L、上腕骨L、中手骨L）、イヌ（遊離歯P^{4}L、P^{3}R）
12		ウグイ属（尾椎1）、スズキ（腹椎1、尾椎1）、種不明魚（脊椎骨1）	ヘビ目（脊椎骨1）	
13	イシガイ科（破片）	ウグイ属（腹椎1、尾椎1）		ガンカモ科（上腕骨R1）
15	ムラサキウニ（殻破片1）			
18		サケ科（椎骨破片1）		
21		カツオ（尾椎1）		

第18表　動物遺体同定結果一覧（ニホンジカ・イノシシを除く）

の季節を抽出することはできないが、サケ科、エイ、ウグイといった秋から春先にかけて出現する魚種の頻度が高い傾向にある。なお、ほとんどのものが火を受けており、白色灰化状態にあるものも少なくない。

④両生類

カエル類の上腕骨や椎骨などが数点出土しているだけである。

⑤爬虫類

ヘビ目の椎骨が1点のみ出土している。

⑥鳥類

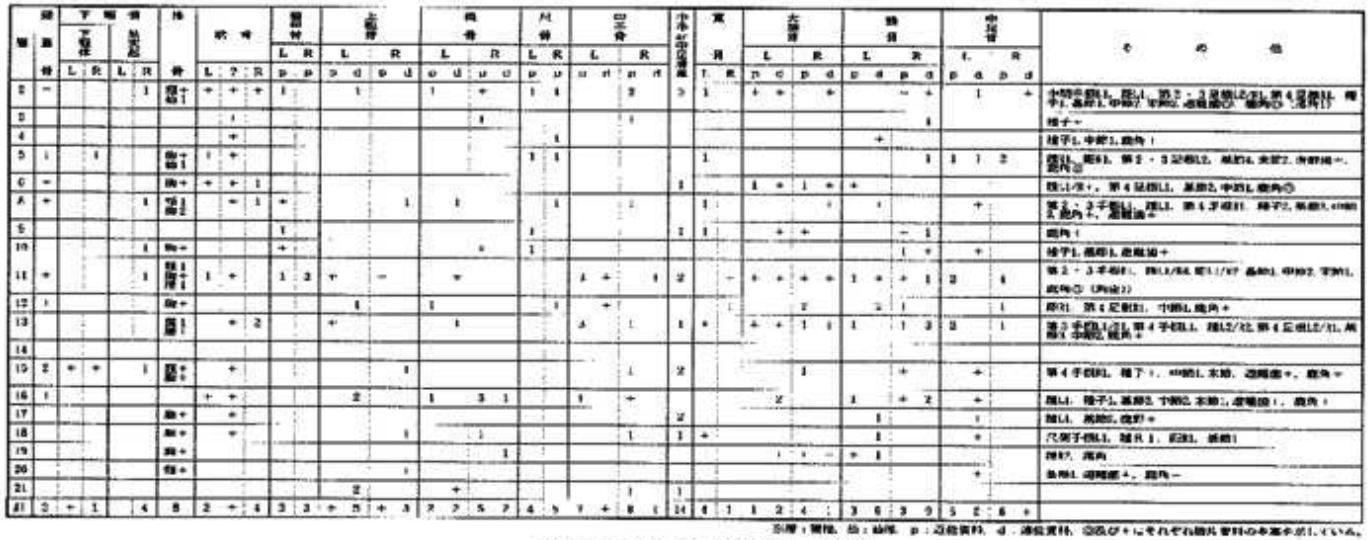
ガンカモ科の一種および種不明鳥類の鳥口骨、上腕骨、中手骨が出土している。ガンカモ科はマガモ・カルガモ相当の大きさのもので、遺跡周辺で捕獲されたものと思われる。

⑦哺乳類

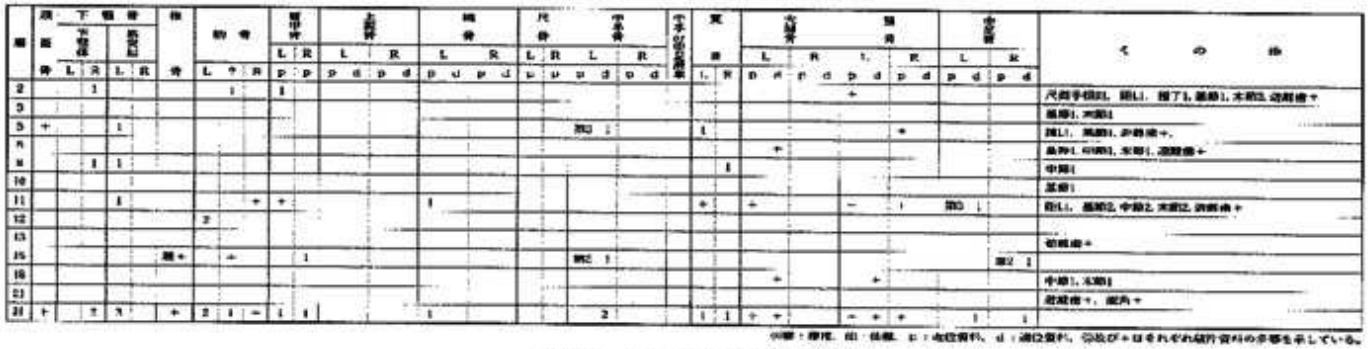
ニホンジカ

今回出土した動物遺体の中で最も出土量が多く、炭化物層を中心にしてほぼ全層で出土した。層位別では、炭化物層が一部の層を除き特定の部位に偏在することなくまとまった出土状況を示しているのに対して、間層となる自然堆積層では検出される部位・量とも少なく、残存状況も悪いといった傾向が認められる。

出土状況としては、全骨格が揃って出土し、埋葬あるいは遺棄されたような状況を示すものはなく、いずれも散乱した状態で検出されている。部位別では角、四肢骨とくに頸骨、中手・中足骨、手・足根骨、指骨の出土が目立つのに対して、頭骨や椎骨、肋骨は少ない



第19表　ニホンジカの層位別出土状況



第20表　イノシシの層位別出土状況

傾向にある。鹿角は、落角状態の頭骨はなく、また枝先の摩滅が進んでいることなど、いずれも枯角化した以後の特徴を示している。年齢については、四肢骨の関節部が化骨化しているものが多いことから3.5歳以上の成獣が主体をなしていたものと思われる。

骨の残存状況は、塊状を呈する骨（距骨、手根・足根骨、種子骨、指骨など）を除く長骨のほとんどのものが割れた状態にある。堆積後の環境や保存状況に起因するものも少なくないと思われるが、割れ口は骨が生の状態で割られたことを示すような螺旋（スパイラル）状を呈するものが多く・四肢骨にいたっては部位や大きさを問わずことごとく破片となっている。これは解体後に骨髄の摘出など、意図的に骨を割るような行為が行われたことを示しているものと思われる。一方、こうした割れとは異なり金属器による剥離や削りの痕跡が認められるものがある。これはニホンジカの角や中手・中足骨などの骨角器の素材となった特定の部位に顕著であることから、骨角器製作に伴うものと考えられる。また、関節部を中心とした付近に認められ解体の際に付いたとみられる数条の横位切痕（図版22-13）やイヌなどの肉食動物が噛ったと思われる痕跡（図版22-14）を残しているものもある。なお、出土した骨の約1/3のものが、部位に偏ることなく焼けて黒変あるいは白色灰化状態にある。これらは、解体や骨髄摘出、骨角器製作の後に火を受け、廃棄されたものと思われる。

イノシシ

ニホンジカと同様の出土状況にある。四肢骨の出現頻度が高い反面、塊状を呈する骨の保存状況が良いことなど、解体および解体後の処理がニホンジカと同様であったことを示しているものと思われる。ただし、金属器による剥離や削りの痕跡はほとんど認められないことから、骨製品の素材という点においては利用価値の低いものであったと考えられる。

イヌ

他種と同様に散在的な出土状況にあるが、同一個体と思われる橈骨と尺骨が同一層から出土している。完存資料で、解体等の人為的な痕跡も認められず、ニホンジカやイノシシなどとは異なる扱われ方をしていた可能性も考えられる。計測可能な部位が橈骨と尺骨に限られるため、形態的な特徴について詳しく述べることはできないが、橈骨が全長145.70mm、上端最大幅17.80mm、体中央部幅12.0mm、下端最大幅22.90mm、尺骨が全長172.12mm、体中央部幅6.80mm、半月状切痕直径18.80mmであり、気仙沼市田柄貝塚（縄文後・晩期、茂原・小野寺；1986）などの縄文犬と比べて、四肢は長いものの全体的にきゃしゃである。

ネズミ

上腕骨と大腿骨のみの出土であるが、堆積時もしくは堆積後に混入したものと思われる。

VI 考　察

1 層の形成について

ＳＸ230遺物包含層は、ＳＤ777河川跡の南岸落ち際の斜面に、炭化物を主体とした人為堆積層と河川の堆積による自然堆積層が互層をなして形成されたものである。層中からは多量の土器をはじめ、骨角製品、木・竹製品、石製品、動植物遺体などの多種多様の遺物が出土しており、本遺物包含層は南東部の微高地上に立地する該期の竪穴住居跡群（第2図）に伴う一種の「ゴミ捨て場」と考えられる。

包含層の要因をなす人為堆積層は、斜面に沿って大まかに4枚（3・6・11・13層）認識され、これらは自然堆積層を介在してもなお、ほぼ同じ場所に、同じ大きさで分布している。このことは、ＳＸ230遺物包含層が斜面上で、しかも堆積後も河川による水流等の影響が予想される堆積環境下で形成されたものであるにもかかわらず、おおよそ本来の廃棄のまとまりを保持していたことを示しているといえる。

ここで、遺物の出土状況をもとにこれらの均質性について検討してみる。

先ず、人為的な廃棄によって形成された4枚の炭化物層のうち、6・11・13層出土の土器について、それぞれの接合関係をみてみると、いずれも大部分のものが同一層内で接合が完結し、異なった層間で接合する土器についてもほとんどのものが、直接接する層や同一面上に分布する層間におさまっている。一方、炭化物層と互層をなす自然堆積層からの土器の出土量は全体的に少なく、接合が同一層内で完結するものも極めて少ない。上下の層、とくに下層に接する人為堆積層との接合関係が多い傾向にある。

次に、動物遺体の中で最も出土量の多いニホンジカについてみてみると、一部の層を除き炭化物層では特定の部位に偏在することなくまとまって出土しているのに対して、自然堆積層では概して検出される部位・量とも少なく、残存状況も悪いといった傾向が認められる。しかも、こうした出土状況は炭化物層間に介在する自然堆積層の層厚が厚いほど顕著であり、炭化物層と接する層の下部ほど出土量が多く、上部では少ないといった傾向にある。ただし、両者の間で再利用等の諸作業を反映するような部位の偏りや残存状況等に規則性は認められないことから、時間差や異なる廃棄がなされたとは考え難く、炭化物層自体の層厚を考慮すれば、自然堆積層における出土状況は埋没時の拡散および分層発掘時の混乱の結果を示している可能性が高い。

以上のように、遺物は一部の層を除きほぼ全層から出土しているが、人為的な廃棄によって堆積した炭化物層から出土したものが主体をなしており、自然堆積層から出土した遺物の多くについても、本来炭化物層に帰属されるべきものと考えられる。とくに、土器の

接合状況やニホンジカの垂直分布状況からみると、自然堆積層出土の遺物の多くは下層に接する炭他物層の廃棄物であった可能性が高い。このことは、層群（第5図、I～VI層）を越えて接合する土器がほとんどみられないことからも類推され、遺物の出土状況からみても、炭化物層を中心とした各層群はおおよそ一括性を保持したものといえる。すなわち、各層群を構成する遺物の総体が、それぞれある一定の期間内に生み出された一括遺物（ゴミ）を反映したものと考えられ、自然堆積層は廃棄の休止期間を意味するものと思われる。

各層群の形成期間については、層を構成する土器以外の遺物量が少ないため詳しく述べることはできないが、動物遺体や大型植物遺体をみる限り、少なくともある特定の季節を反映したものではない。層の堆積環境や遺物の出土状況からみて、季節を越えた継続的な廃棄、あるいは二次的な廃棄物によって比較的短い時間幅の中で形成されたものと思われる。なお、11層については、焼土・灰のブロックや薄く介在する砂層によってさらに7層に細分して、掘り上げている。遺物量が少なく、それぞれの細別層の形成要因について述べることはできなかったが、これらが廃棄本来の最小単位を反映している可能性が高い。

2　土器の年代

〔1〕　土師器の検討

(1)　ＳＸ230遺物包含層出土土器群の設定

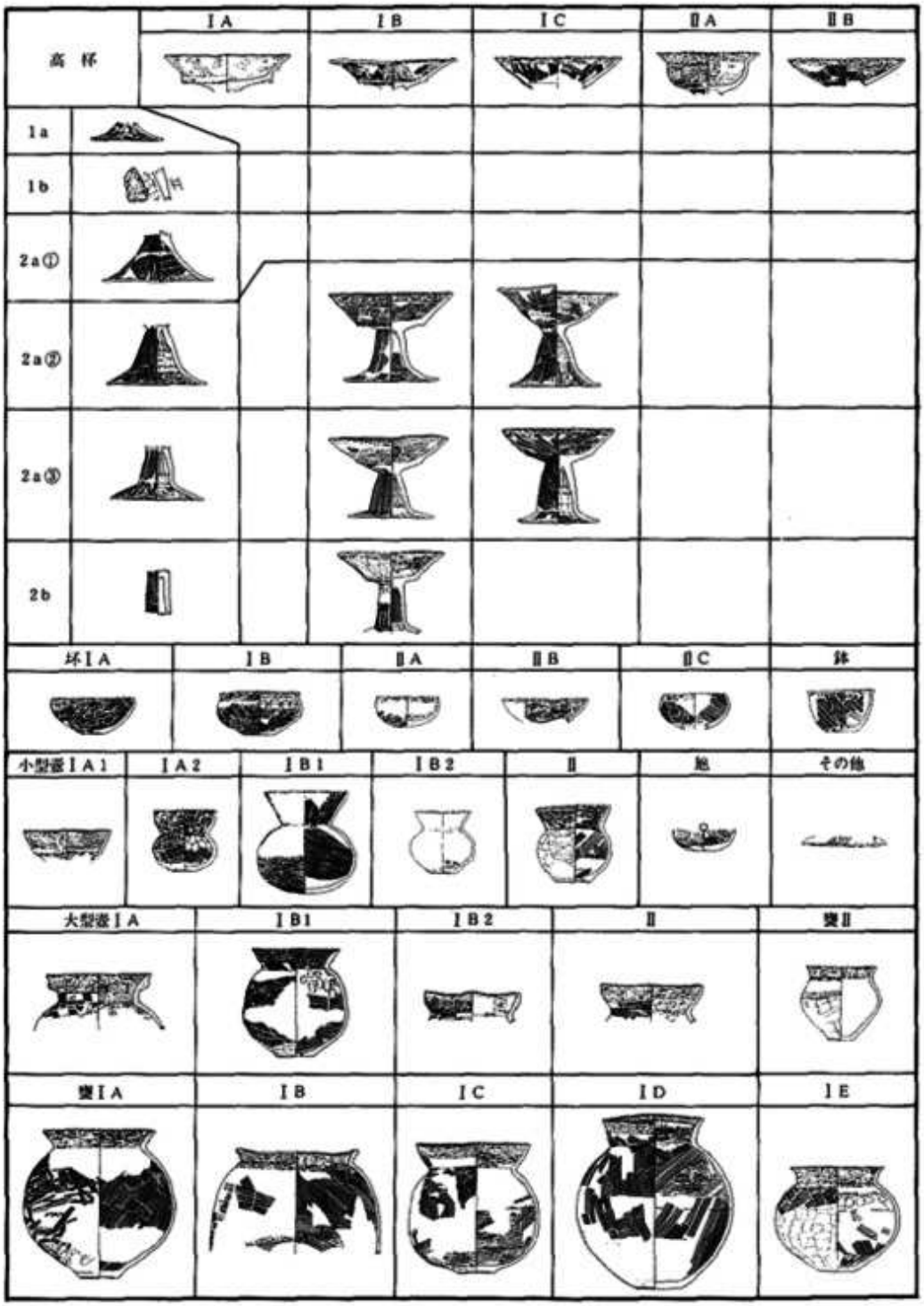
土師器はＳＸ230遺物包含層から多量に出土し、高坏・坏・大型壷・小型壷・甕・鍋・ミニチュア・その他がある。

包含層は、遺物に多少の移動や混乱はみられるものの、廃棄時の状況を概ね反映しており、各層ごとの遺物のまとまりが良好にとらえられるものである。

土師器は各人為層からまとまって発見されているが、出土量の多い第3・6・11・13層出土土器でみると、以下のようになる。

第3層出土土器…… 高坏ＩＡ、ＩＢ2ａ③、ＩＣ2ａ②、ＩＣ2ａ③、ⅡＡ
大型壷ＩＢ1
小型壷ＩＡ1、ＩＢ2
甕ＩＡ、ＩＥ

第6層出土土器……高坏ＩＢ2ａ③、ＩＣ
坏ＩＡ、ＩＢ、ⅡＣ
小型壷ＩＢ1、ＩＢ2
甕ＩＡ
鍋



第45図　土師器の分類図

第11層出土土器……高坏ⅠB2a③、ⅠC2a③、ⅡB2a、2a②
坏ⅠB、ⅡA
大型壷ⅠA、ⅠB1
小型壷ⅠA2、ⅠB1、ⅠB2
甕ⅠA、ⅠC、ⅠD、ⅠE、Ⅱ
第13層出土土器……高坏ⅠB2a、ⅠC2a③、ⅡB
坏Ⅰa、ⅠB、ⅡC
小型壷ⅠB1、ⅠB2
甕ⅠA、ⅠB

各層出土の土器はそれぞれが一括性のある土器のまとまりで、共伴するものである。

ところで、それぞれのまとまりごとに内容を比較してみると、各器種とも共通する分類のものが大部分で、同じ内容の土器のまとまりといえる。したがって、これらの土器は一まとまりの土器群として扱うことができると思われる。

なお、第13層以上の自然堆積層出土の土器は、本来は各人為層に由来するものであり、層位的にとらえられた各人為層出土の土器が一つの土器群として扱えることから、この土器群に含めて考えてもさしつかえないと思われる。

第17層出土土器は量的に少ないため、本来この層に帰属すると思われる第15・16層出土土器と合わせて上記の土器と比較するとほぼ同じ内容の土器であり、この土器群に含めて考えることが可能であると思われる。

これ以下の層は斜面下方に自然堆積した層で、出土土器は一括性や共伴関係が保証されないが、個々の土器は同じ特徴を持つものであり、この土器群に含めて扱うことも可能かと思われる。

したがって、遺物包含層出土の土器は一まとまりの土器群であり、一括して扱うことができるものである。また、堆積状況からこの土器群はある時間幅を有するものである。

(2)　土器群の土師器編年上の位置

古墳時代の土師器の型式名を設定した氏家によれば（氏家:1957）、「大形の壷形土器（本稿では甕に含まれる）にあっては、最大径をその中央部に有するほぼ球形の体部に、短い外反せる単調な口縁を附している」、「小形、中形壷形土器においては、所謂丸底の器形を呈し、多くの場合、口縁高と体高、口後と体径がそれぞれ相等しい」、「高坏形土器では脚部にあっては中膨らみ中空であって、裾部は脚柱状部より顕著に外方に屈折し所謂広がった裾部を形成している。この類は第一型式のように脚中央部に窓を有しない。坏部にあっては、底部外側に稜線を形成している」ものは、南小泉Ⅱ式（以下南小泉式とする）の特徴とされており、それぞれ本土器群の甕ⅠA類・小型壷I類・高坏ⅠC2a③類に該当す

る。これらは本土器群の器種の中で主体となるものであり、これらを南小泉式に比定することが可能と考える。

この南小泉式については、その型式上の内容と細分に関し、さまざまな議論が展開されている。宮城県内の当該期の細分に関わる論考には、丹波による3段階の変遷案（丹羽：1983）、土師器全般を扱った加藤の変遷案（加藤:1989）、南小泉式から住社式を扱った岩見の変遷案（岩見・佐藤:1991）、古墳時代全般の土師器を扱った古川・白鳥の変遷案（古川・白鳥：1991）、同じく古墳時代全般を扱いながらも特に中期の時期区分を巡る提言を含む藤沢の変遷案（藤沢:1992）がある。それぞれに提唱される土器群や段階は、その内容や器形の変遷の認識などとともに相違がみられる。

ところで、各案ともに南小泉式で最も古い段階の土器として、本遺跡西町浦地区ＳＸ058（3号遺構）出土土器（高倉：1981）があげられている。これと本土器群を対比すると、特徴が概ね一致し、類似した内容を持つ。したがって、本土器群は南小泉式の最も古い段階の土器であると考えられる。

一方、西町浦地区ＳX058出土土器は本土器群に比べ、坏が多く小型壷が少ない傾向がある。個別の器形では、高坏脚部には円筒形のものが多くみられること、坏は胴部と口縁部に境をもち口縁部が直立しながら立ち上がるものが主体をしめること、甕には胴部が縦長のものが見られるなど違いが認められる（第46図）。この違いについては、後続する土器群との関連からより新しい様相をもつといえ、時間差に起因すると考えられる。

(3)　土器群の性格

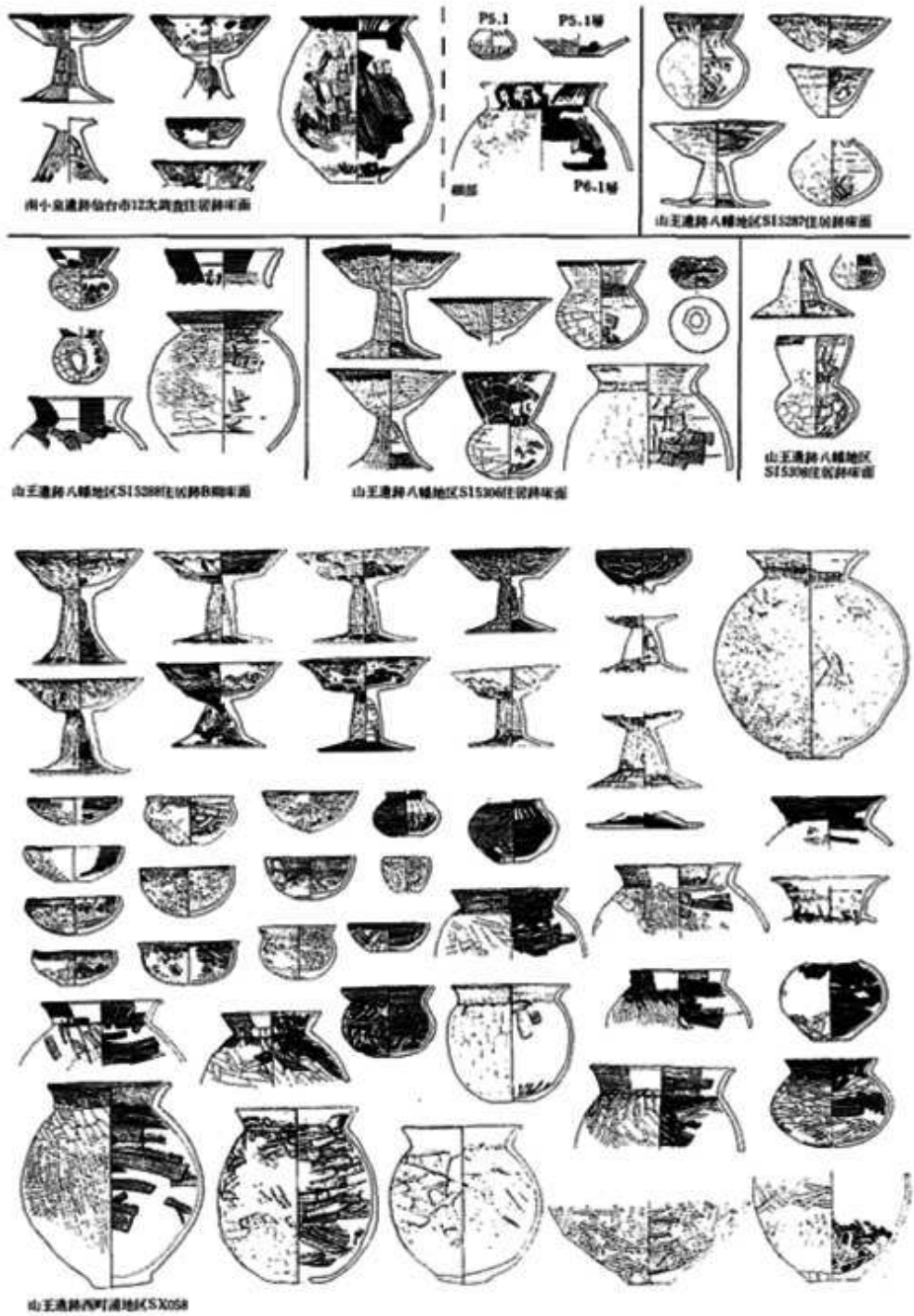
〈八幡地区住居跡群との関係〉

ＳX230遺物包含層の南東に隣接して南小泉式期の11軒の住居跡が多賀城市教育委員会によって検出されている（千葉:1992）。報告されている4軒の住居跡出土土器とその他の住居跡出土土器について、土器を実見した結果、本土器群と類似しており土器編年上同時期のものといえる。したがって、従来推定されてきたように、ＳX230遺物包含層はこの住居跡群のゴミ捨て場であると思われ（佐藤・管原:1991、千葉：1992）、本土器群は住居跡群に由来するものと考えられる。

〈土器群の組成〉

本土器群は、高坏・坏・大型壷・小型壷・甕・ミニチュア土器・その他から構成される。その組成は甕・高坏・小型壷を主体とする土器群と捉えることができる。

同時期の八幡地区ＳＩ5287床面出土土器・ＳＩ5306住居跡1層出土土器（千葉:1992）、南小泉遺跡仙台市12次調査第1号住居跡出土土器（佐藤：1985）（註2）（第46図）も、同様に高坏・小型壷を主体としており、この時期の普遍的なあり方を示すといえる。



第46図　南小泉式期の土器群（S＝1：10）

一方、本土器群中には赤彩された土器があり、全体で約10%程を占める。高坏と坏が特に多く、甕と大型壷には見られない。赤彩に際しては形の選択が行われていたことがわかる。

当該期の土器の赤彩については、西町浦地区ＳＸ058出土坏・高坏に多くあると記載される（多賀城市役所:1991）ほか報告がない。土器群の性格や遺存状態の差も関係することであり、本土器群のあり方が普遍的か否かは、類例の増加を待って判断したい。

〈特徴のある土器〉

［焼成後の穿孔をもつ土器］

小型壷のＩＢ1類、Ⅱ類、分類不明の胴部から底部の破片各1点づつ3点の底部に認められた。穿孔は内→外で、意図的に穿孔したことは明らかである。

当該期の焼成後穿孔をもつ小型壷は、底部に見られる例は八幡地区ＳＩ5306住居1層出土土器、福島県国見町矢の目遺跡一括出土土器（日下部編:1980）、胴部に見られる例は八幡地区ＳＩ5288住居Ｂ期床面出土土器にある。この内、矢の目遺跡例は祭祀に関わると考えられる土器群である。

［被籠土器］

大型壷ＩＢ1類に1点認められた。痕跡から、胴部に斜め方向に2条交差させ、更に横方向に2条を編み込んだことがわかる。

被籠痕をもつ壷は類例が少なく、東北地方では塩釜式期の宮城県仙台市戸ノ内遺跡周溝墓内土壙出土壷（渡部・主浜:1984）と、福島県石川町大池下遺跡住居跡出土壷（藤谷:1987）の例がある。全国の被籠土器を集成し検討を加えた後藤によると、被籠土器の多くは種籾保存用の壷、種籾運搬用の壷と推察できるという（後藤:1989）。

［朝鮮半島系の土器］

朝鮮半島に起源を持つと考えられる土器に鉢がある。胎土や製作上の特徴から、国内での模倣と考えられる。

(註1)　報告書では1層として扱ってあるが、出土状況から土器相互の共伴があると考えられる旨、報告者よりご教示頂いた。

(註2)　福島県勝口前畑遺跡SI12号住居跡床面から土器が遺棄された状態で出土しており、この時期の住居単位の土器組成を示している。ここでも、高坏・小型壷が主体である。なお、資料の実見に際して斎藤義弘氏にお世話になるとともに適切な御助言をいただいた。

3　ＳＸ230遺物包含層をめぐる諸活動について

ＳＸ230遺物包含層からは、通常腐朽・消滅してしまうような有機質のものをはじめ、多種多様の遺物が出土した。これらは、包含層の南東部の微高地上に集落を営んだ人々の生活廃棄物であり、古墳時代中期における生業をはじめとした諸活動の実態を知るうえで貴

重な資料である。ただし、この「ゴミ捨て場」から出土した遺物が、当時の人々の諸活動全般を反映したものである保証はなく、とくに量的にはかなり部分的なものと言わざるを得ない。以下では、今回得られた生活廃棄物をもとに、本集落を営んだ人々の諸活動の一端について述べていく。

(1) 生業活動について

①食料獲得活動

今回の調査で、動物遺体は魚貝類や鳥・哺乳類などが24種類、植物遺体は多量の炭化米をはじめ草本類および木本類が77種類検出され、食料の獲得をめぐる諸活動の実態や当時の食生活の一端が明らかになった。

〈稲作・栽培・採集活動〉

植物遺体には、イネ、ウリ科植物、コムギ、アサなどの栽培植物や、クリ、オニグルミなどの堅果類などがある。量的にはイネやウリ科植物（メロン仲間、ヒョウタン仲間など）が多く、全層を通じて出土している。このことは、農耕具の出土とともに、本集落が稲作に携わった集団であることを示唆し、春先の籾まきから秋の収穫までの期間に多大な労働を要していたことを示している。さらに、僅かではあるが冬作物のコムギが出土したことで、本集落を営んだ人々が周年を通じて農耕に従事していた可能燈も考えられる。一方、出土した堅果類の多くは縄文時代以来植物質食料の主体をなしてきたもので、稲作受容後も積極的に採集されていたことが窺える。とくに、クリについては出土量が多く、栽培化されていた可能性も考えられ、該期においても重要な食料資源であり、集約的に採集されたものと推測される。

〈狩猟活動〉

狩猟対象動物としては、ニホンジカとイノシシといった大型の陸生哺乳類が多く出土している。これらは各部位が揃って出土しているものの、いずれも破片資料で、散乱した状態で検出されている。また、解体や意図的な打割、骨角器製作などの痕跡が認められるものもあるなど、縄文時代の貝塚や低湿地遺跡出土のものと同様の遺存状況にある。このことは、これらの動物が縄文時代と同様に利用価値の高いものであったことを示唆している。当時の人々が生業活動全体の中でこれらの動物にどの程度の比重を置いていたかは明らかではないが、ニホンジカの頭骨などの特徴からみて、これらは冬を中心とした農閑期に捕獲された可能性が高い。すなわち、狩猟については、骨鏃などの狩猟具の存在やこれらの製作が頻繁に行われていることも含め、生業活動の中で明確に位置付けられていたものと思われる。

〈漁撈活動〉

魚貝類については量的に少なく、当時の漁撈活動の実態を示していない可能性も考えられるが、これらは生態的な特徴からみて、集落周辺の淡水域や少なくとも5km以上離れた鹹水域で漁獲され、集落内に持ち込まれたものと推測される。サケ科、エイ目、ウグイ属の出現頻度が高く、中でもサケ科については、漁獲に使用されたとみられる組合せ式のヤス（第34図5）の出土や群れをなして川を遡上する生態的な特徴からみて、実態としてもかなり漁獲されていた可能性が高い。一方、量的には少ないものの、ニシン科（マイワシ?）、カツオ、マアジといった春～初秋の季節のごく短い期間に限って沿岸に出現する鹹水性の魚類も検出されている。これらは、いずれも群れをなして回遊する習性をもつもので、漁法によってはかなりの漁獲量が期待できる魚種である。今回の出土状況をもって、これらの漁を本集落における生業の一部として位置付けることはできないが、集落からやや離れた鹹水域で季節的な漁が行われていた可能性も考えられる。

以上、ＳＸ230遺物包含層を形成した人々の食料獲得に関わる活動について述べたが、本集落の場合、狩猟・漁撈・採集といった縄文的な生業形態と、稲作・栽培といった弥生以降に導入された生業形態を季節的に組み合わせることによって営まれたものといえる。今回得られた資料が・どの程度当時の実態を示しているものか明らかではなく、また各種活動の比重についても出土した遺物をもとに実証的に述べることはできないが、それぞれ生態的な特徴をもとに生業暦を復元すれば、本集落においては稲作が生業の基盤をなしていた可能性が高い。すなわち、本集落の場合、春先から秋にかけての時期はかなりの時間を稲作に拘束された生業形態であったと思われ、比較的少ない労力で収穫が期待できるクリ・オニグルミなどの採集活動を除けば、農繁期と重なる生業活動はかなり限定されたものと推測される。とりわけ、集落からやや離れた鹹水域での漁撈活動（エイ目・ニシン科・カツオ・マアジなど）および採集活動（アサリ・マガキ・ムラサキウニなど）については、種類・量ともに少ないことやこれらに使用された漁撈具が出土していないことなど、極めて低調な活動であったと考えられる。仮に、本集落において生業の一部をなしていたとしても、稲作の合間を縫って行われた程度の、期間的にかなり限定され、集約された活動であったと思われる。一方、農閑期に行われたと推測される狩猟については、狩猟具の存在や各種生活用具・卜骨の素材入手という点からみても、稲作と同様に比重の高いもので、本集落の人々にとっては重要な生業の一つであったと推測される。

②製作・生産活動

ＳＸ230遺物包含層を形成した人々の製作・生産に関わる活動としては、骨角製品・木製品・石製模造品の製作および鍛冶がある。

〈骨角製品の製作〉

骨角製品には狩猟具、漁撈具、工具、武器、祭祀具など多種多様なものがあり、これらのほとんどが破損した状態で出土している。このうち骨鏃やヤス、刀子把などの日常的な製品は、共伴する素材や未製品、二次加工品、製作の際に生じたとみられる廃材や屑も多量に出土していることや、使用によるとみられる破損品の存在などからみて、本集落内において製作、使用され、破損後に廃棄されたものと理解される。一方、刀装具や儀頭飾などの非日常的な類については、本集落内において製作および使用された確証はないが、これらの素材となった角幹部から枝先にかけての素材段階のものが比較的多く出土していることや、いずれも焼けて白色灰化状態にあることなど、他の骨角製品と同様に本集落内で製作され、使用された可能性が高い。すなわち、主に古墳や洞窟遺跡から副葬品として発見されるような非日常的な道具を製作する特殊な技術者が、本集落内に存在していたことを示唆するものとみられる。今のところ、こうした技術者集団の存在を積極的に裏付けるような事例が少ないため、非日常的な道具の製作およびこれらの需用と供給の実態を明らかにすることはできないが、和歌山県和歌山市田屋遺跡（5世紀中葉～6世紀）においても、集落に伴う河川跡から刀子把などの骨角製品や未製品、素材などと共伴して、直弧文を有する鹿角製刀装具が出土しており（註3）、該期においては、これらの特殊な遺物の多くが実際に使用される集落内で製作された可能性も考えられる。

〈木製品の製作〉

木製品についても同様で、農耕具や曲物などとともに、未製品や切り出しただけの材やこれらの廃材・屑も多量に出土している。前述のとおり、本集落においては稲作が生業の主体をなしており、これに使用する鍬・鋤類も集落内で製作されたものとみられる。ところで、出土した膝柄又鍬の刃部先端には鉄製刃先の装着部が作り出されている。今のところこうした類例はなく、具体的な機能や性能などについては明らかではないが、再加工の可能性もあり、鉄製刃先を装着することで平鍬の代用品的な使い方をしたのであろうか。いずれにしろ、後述するような鍛冶生産の導入と相俟って、より効果的な農耕具の製作がなされたことを示しているものと思われる。

〈石製模造品の製作〉

石製模造品は臼玉を除くと量的に少ないものの、勾玉・剣形品・有孔円板・臼玉といった各種完形品のほかに、これらの破損品や未製品も出土している。このほか山王遺跡においては、本遺物包含層以外にも南側微高地上の竪穴住居跡（千葉;1992）をはじめ、西町浦地区（高倉他;1981）、東町浦地区（相沢；1990）の竪穴住居跡や土壙、河川跡などからも出土している。とくに、本地区の南西約800mに位置する西町浦地区では未見製品や滑石の剥片、原石なども出土しており、出土した石製模造品の多くは本集落内において製作さ

れたものとみられる。ただし、いずれも出土量が少ないことや未製品および製作段階の破損品のあり方などからみて、現状において本集落がこれらを専業的に量産するような製作集団であったとは考え難い。集落内で自給自足的に製作されたものと考えられる。

〈鍛冶〉

高坏の脚部転用羽口と鉱滓から推定されるもので、包含層の南東部で検出された鍛冶遺構に関わったものとみられる。現時点において、本集落における鉄器生産の実態を明らかにすることはできないが、検出された鍛冶遺構や鍛造剥片からみて「村方鍛冶」と呼ばれるような小規模なものと考えられ（古瀬；1991）、自給自足的に集落内で農工具類の生産・修理を行ったものと思われる。なお、土製羽口の使用は5世紀前半頃に始まると考えられている（松井；1991）。本遺跡の場合、定形的な土製羽口は出土しておらず、技術的にみてどのような段階にあったのか明らかではないが、この地域としてはかなり早い段階に鍛冶技術を導入した集団といえる。

このように、ＳＸ230遺物包含層を形成した人々の生業活動は食料獲得から各種製品の製作・生産まで多岐にわたっている。ただし、後者については、その規模や使用による破損品が共伴していることなどからみて、いずれも自給自足的なものであったとみられ、集落外に供給するような専業的なものではなかった可能性が高い。今回のこうした遺物の出土状況をもって、本集落の性格的な位置付けを行うまでには至らないが、権威の象徴とみられる刀装具や儀杖などの製作や鍛冶生産に携わるような技術を有し、これらを備えていたという点においては特殊な集団であり、地方豪族クラスとの直接・間接的な関わりも想定される。

（註3）和歌山県文化財課山本高照氏の御教示による。

(2) 祭祀について

ＳＸ230遺物包含層から出土した祭祀遺物には、卜骨と石製模造品がある。いずれも埋納および意図的に置かれたような痕跡は認められず、他の生活廃棄物と混在した状態で出土している。このことは、これらの祭祀遺物についても、使用後は他の遺物と区別されることなく一括廃棄されたことを示しているものと思われる。

卜骨については、卜占後にすぐ廃棄されたとみられる図示した3点（第38・39図）を除き、ほとんどのものが破片で白色灰化状態にあり、しかも焼けはじけた状態で出土している。これは共伴して出土した他の獣骨と同様であり、祭祀行為や卜占が行われた後の状況を示しているものの、出土状況に特別な意味はないものと思われる。こうした状況は他の遺跡における卜骨の出土例をみる限り、時期や地域によらない全体的な傾向であり、卜占

終了後の処置に特別な注意や関心が払われなかったことを示していると考えられている（神澤;1976）。ただし、破損品とはいえ刀装具や儀杖（儀頭飾）などの特殊な遺物も同様の状態にあることを考慮すれば、卜占時の儀礼の一部としてこれらを意識的に焼くような行為が含まれていた可能性も考えられる。卜骨については、神澤氏が指摘しているように、卜占終了後に神性を払拭したことを物語っているのであろうか（神澤:1987）。なお、今回の出土状況や出土した卜骨自体の特徴から、本集落における卜占の目的や執行者、具体的な内容を明らかにすることはできないが、刀や儀杖などとともに、本集落における性格の一端を示しているものと思われる。

一方、石製模造品については、勾玉、剣形品、有孔円板、臼玉といった鏡・剣・玉の仮器がセットで出土している。ただし、量的には使用時の状況を示している保証はなく、これらの器種や量による組み合せをはじめ、本集落における具体的な使われ方については明らかではない。県内においては、本遺跡の各地区をはじめ仙台市遠見塚古墳や村田町新峯崎遺跡、丸森町矢野目遺跡などこれまでに13遺跡で出土しており、出土した遺構や出土状況、器種の組み合せ、量などによって多様な様相を呈している（阿部・須田・岩見;1991）。いずれも具体的な使用状況は明らかではないが、こうした違いが祭祀の性格や執行者、執行形式などの違いを反映しているものとみられ、石製模造品を用いた祭祀の特徴とも考えられる。

ところで、本遺物包含層の各層からは多量の炭化米が出土している。共伴して出土した卜骨をはじめ、刀装具や儀頭飾などの特殊な遺物も同様に火を受けていることを考慮すれば、炭化米が事故的なものではなく、祭祀の一環として意図的に火中に投じられたものである可能性も考えられよう。

引用参考文献

阿部　恵・須田良平・岩見和泰（1991）：『新峯崎遺跡』宮城県村田町文化財調査報告書第9集　宮城県村田町教育委員会

荒井　格（1992）：「東北地方の木製農耕具－古墳時代時代以前の様相－」加藤稔先生還暦記念『東北文化論のための先史学歴史学論集』

市原市文化財センター（1991）：『私たちの文化財』17

伊藤　玄三（1973）：「福島県上の原四号墳の鹿角製刀装具」『福島考古』第14号

伊東信雄編（1981）：「考古資料」『宮城県史』34

井上国雄・梅宮　茂・水盛　肇（1975）：『胡麻沢古墳発掘調査報告書』　棚倉町教育委員会

岩見和泰・佐藤憲幸（1991）：「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集　宮城県教育委員会

上原　真人（1991）：「農具の変遷－鍬と鋤－」『季刊考古学』第37号　雄山閣

氏家和典・大場垣一（1954）：「宮城県高倉村引田出土の土師器」『歴史』第8輯　東北史学会

氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

内田　律雄（1986）：「弥生前・中期の低湿地遺跡－松江市西川津遺跡」『季刊考古学』第14号　雄山閣

梅宮　茂（1964）：「金冠塚古墳（山ノ上古墳）」「田村郡田村大善寺古墳群」『福島県史』第6巻

大谷女子大学資料館（1989）：『陶質土器の国際交流』　柏書房

岡崎　敬（1968）：「倭の水人」『日本民族と南方文化』　平凡社

小笠原好彦・阿部義平（1968）：「宮城県新田遺跡出土の土師器」『考古学雑誌』第54巻第2号

小川　淳一（1980）：「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』　宮城県文化財調査報告第69集　宮城県教育委員会

加藤正信・小林清隆・山口典子（1992）：「生産遺跡の研究2－玉－」『千葉県文化財センター研究紀要』13　財団法人千葉県文財センター

加藤　道男（1989）：「宮城県における土師器研発の現状」『考古学論叢Ⅱ』　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

加藤正範・結城慎一（1983）：『南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第60集　仙台市教育委員会

堅田　直（1987）：「田辺市磯間岩陰遺跡の概要と骨角器」『月刊文化財』290

金子　浩昌（1986）：「骨角加工品」『鉞切遺跡－C・D地点の調査－』　鉞切遺跡調査団

金子　浩昌（1988）：「主要骨角製品についての考察」「五松山洞窟遺跡」『石巻市文化財調査報告書』第3集　石巻市教育委員会

金子浩昌・忍澤成視（1986）：「骨角器の研究－縄文篇1」『考古民俗叢書』22　慶友社

金関　恕・小野山　節（1978）：「武器　装身具」『日本原始美術体系』5　講談社

兼田芳宏・佐藤智雄（1987）：『宮城県仙台市南小泉遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第4集　南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財調査研究所

兼田芳法・遊佐和子（1988）：『宮城県仙台市南小泉遺跡』埋蔵文化財発掘調査研究所報告書第11集　南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財調査研究所

亀井　正道（1973）：「琴柱形石製品考」『東京国立博物館研究紀要』第8号

川西　宏幸（1988）：『古墳時代政治史序説』　塙書房

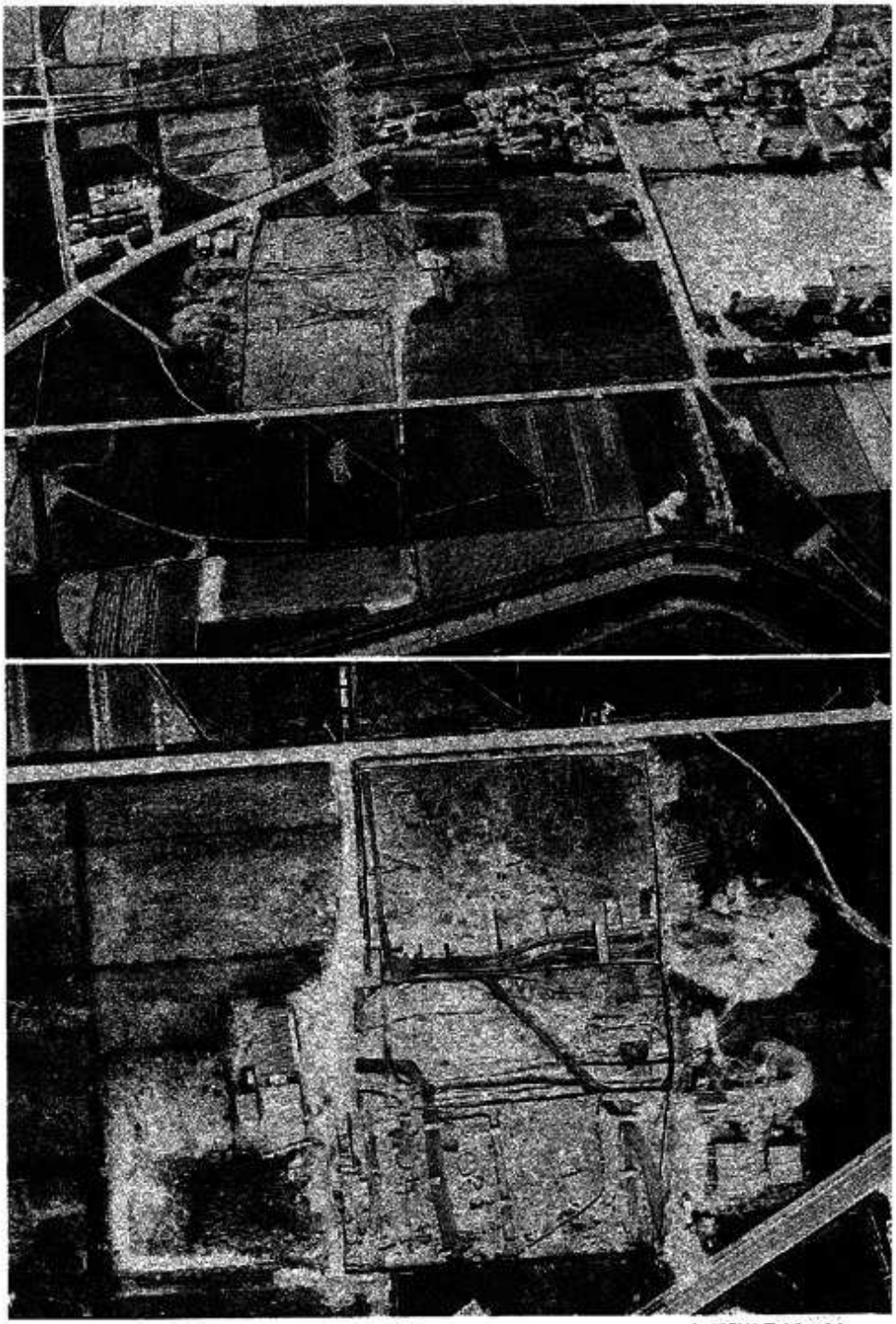
神澤　勇一（1976）：「弥生時代古墳時代および奈良時代の卜骨・卜甲について」『駿台史学』38

神澤　勇一（1987）：「日本の卜骨」『考古学ジャーナル』No281　ニューサイエンス社
神澤　勇一（1988）：「三浦半島の弥生時代漁具」『季刊考古学』第25号　雄山閣
神澤　勇一（1989）：「呪術の世界ー骨卜とまつりー」『弥生人とまつり』　考古学ゼミナール　六興出版
韓式系土器研究会（1989）：『韓式系土器研究Ⅱ』
韓式系土器研究会（1991）：『韓式系土器研究Ⅲ』
木村　幾多朗（1979）：「長崎県壱岐島出土の卜骨」『考古学雑誌』64-4
日下部善己編（1980）：『伊達西部地区遺跡発掘調査報告書』福島県文化財調査報告書第82集　福島県教育委員会
工藤　哲司（1991）：『南小泉遺跡第20次調査』仙台市文他財調査報告書第153集　仙台市教育委員会
倉田直純・穂積祐昌編（1992）：『城之越遺跡ー三重県上野市比土』三重県文化財調査報告99-3集　三重県埋蔵文化財センター
小井川　和夫（1983）：「里浜貝塚Ⅳ」『東北歴史資料館資料集』13　東北歴史資料館
群馬市文化財調査事業団（1993）：『安積野のパイオニアたちー群馬の埋蔵文化財　ふるさと歴史展ー』
後藤　勝彦（1981）：「宮城県七ヶ浜町東宮浜鳳寿寺貝塚出発見の卜骨について」『東北歴史資料館研究紀要』7
後藤　信祐（1989）：「被籠土器考」『栃木県考古学会誌』第11集　栃木県考古学会
小林行雄（1976）：「鹿角製刀剣装具」『古墳文化論考』　平凡社
小林行雄・佐原　真（1964）：「弥生式土器の制作技術」『紫雲出』　香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会　真陽社
斎藤　弘吉（1953）：『犬科動物骨格計測法』
財団法人千葉県文化財センター編（1992）：『古墳時代（2）』房総考古学ライブラリー6
坂井　隆・原　雅信（1989）：『八寸大道上遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第91集　（財）群馬県文化財調査事業団
坂口　一（1987）：「群馬県における古墳時代中期土器の編年」『研究紀要』4　（財）群馬県文化財調査事業団
佐藤　洋（1987）：『南小泉遺跡第14次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第109集　仙台市教育委員会
佐藤甲二・小野寺和幸他（1985）：『南小泉遺跡第12次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第80集　仙台市教育委員会
佐藤則之・菅原弘樹（1991）：『山王遺跡仙塩道路建設関係遺跡ー平成2年度発掘調査概報』　宮城県文化財調査報告書第141集　宮城県教育委員会
茂原信夫・小野寺覚（1986）：「田柄貝塚出土犬骨の形態的特徴について」『田柄貝塚Ⅰ』　宮城県文化財調査報告集第111集　宮城県教育委員会
柴田　常恵（1928）：「上総君津郡青堀町の平塚」『考古学研究』第2年第1号
白鳥良一・加藤道男他（1974）：「岩切鶏ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書1』　宮城県文化財調査報告書第35集　宮城県教育委員会
新庄屋元晴・阿部恵（1986）：『田柄貝塚Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第111集　宮城県教育委員会
末永　雅雄（1981）：『増補日本上代の武器』　木耳社
菅原弘樹・岩見和泰他（1993）：『山王遺跡ー多賀前地区第1次調査ー仙塩道路関係遺跡平成4年度調査概報』宮城県文化財調査報告書第153集　宮城県教育委員会
関　義則（1986）：「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号　古墳文化研究会

高倉　敏明（1980）：『山王・高崎遺跡発掘調査概報』多賀城市文化財調査報告第2集　多賀城市教育委員会
高橋栄一・千葉孝弥（1992）：「山王遺跡八幡地区」『平成4年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
多賀城市史編纂委員会（1991）：『多賀城市史』第4巻考古資料　多賀城市
武末　純一（1991）：『土器からみた日韓交渉』　学生社
田中　清美（1989）：「5世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』第125号　大阪歴史学会
千葉　孝弥（1992）：『山王遺跡第12次調査概報（仙塩道路建設に伴う八幡地区調査）』多賀城市文化財調査報告第30集　多賀城市教育委員会
辻　秀人（1989）：「東北古墳時代の画期について（その1）－中期後半の画期とその意義」『福島県立博物館紀要』第3号　福島県立博物館
辻　秀人（1992）：「古墳の変遷と画期」『新版古代の日本』9東北・北海道編　角川書店
土岐山　武（1981）：「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集宮城県教育委員会
富岡　直人（1992）：「多賀城跡第60・61次調査出土のト骨・骨角器と脊椎動物遺体」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』　宮城県多賀城跡調査研究所
永澤　諦次（1931）：「陸前国塩釜港字崎山附洞窟の石器及古墳時代遺跡に関する略報」『史前学雑誌』3-1
奈良国立文化財研究所（1984）：「木器集成図録－近畿古代篇」『奈良国立文化財研究所史料』第27集
西　弘海（1986）：『土器様式の成立とその背景』　真陽社
西谷　正編（1978）：『考古学からみた古代日本と朝鮮』　学生社
丹羽　茂・小野寺祥一郎・阿部博志（1981）：「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会
丹羽　茂（1983）：「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集　宮城県教育委員会
萩本　勝・山本雅和（1990）：『白浜遺跡発掘調査報告書』　本蒲遺跡群調査会
長谷部　言人（1924）：「陸前名取郡増田村下増田経ノ塚出土鹿角製刀装具に就て」『人類学雑誌』39-4,5,6
坂野　和信（1991）：「和泉式土器の成立過程とその背景－布留式後期土器との編年的検討」『埼玉考古学論集－設立10周年記念論文集－』　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
樋上　昇（1989）：「木製農耕具の地域色とその変遷－勝川遺跡出土資料を中心として－」『年報昭和63年度』愛知県埋蔵文化財センター
福島正実・伊藤雅文（1989）：「石川県畝田遺跡」『日本考古学年報』40　日本考古学協会
藤沢　敦（1992）：「引田式再考」『歴史』第79輯　東北史学会
藤谷　誠（1987）：「大池下遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡分布調査報告11』福島県文化財調査報告書第173集　福島県教育委員会
古川一明・白鳥良一（1991）：「8　東北」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器　雄山閣
古瀬　清秀（1991）：「鉄と鉄器生産－3鉄器の生産」『古墳時代の研究』5生産と流通Ⅱ　雄山閣
埋蔵文化財研究会・（財）大阪府埋蔵文化財協会（1987）：『弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題』第21回埋蔵文化財研究集会・第4回調査研究会
町田　章（1981）：「ＳＤ6030出土の木製品の検討」「古墳時代農耕具の問題点」『平城宮発掘調査報告Ⅹ』

松井　和幸（1991）：「鉄と鉄器生産－1鉄生産」『古墳時代の研究』5生産と流通Ⅱ　雄山閣
真山　悟（1991）：『藤田新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第142集　宮城県教育委員会
柳沼　賢治（1987）：「永作遺跡」『郡山東部7』　郡山市教育委員会
柳沼　賢治（1990）：「南山田遺跡」『郡山東部10』　郡山市教育委員会
結城　慎一（1982）：『南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第1次調査報告』　仙台市文化財調査報告書第35集　仙台市教育委員会
渡辺　誠（1985）：『南小泉遺跡第13次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第81集　仙台市教育委会
渡辺　誠（1991）：「郡谷里貝塚出土の卜骨の研究－韓国における考古民族学的研究・Ⅴ－」『名古屋大学文学部研究論集（史学）』37
渡部弘美・主浜光朗（1984）：『戸ノ内遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第70集　仙台市教育委員会

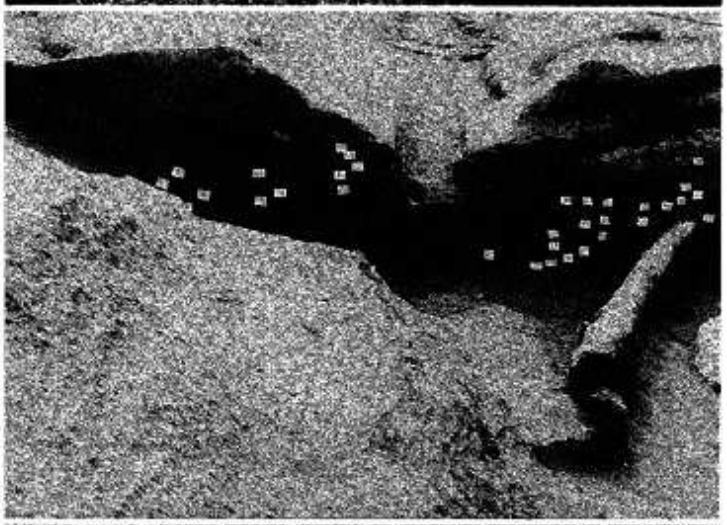
写　真　図　版



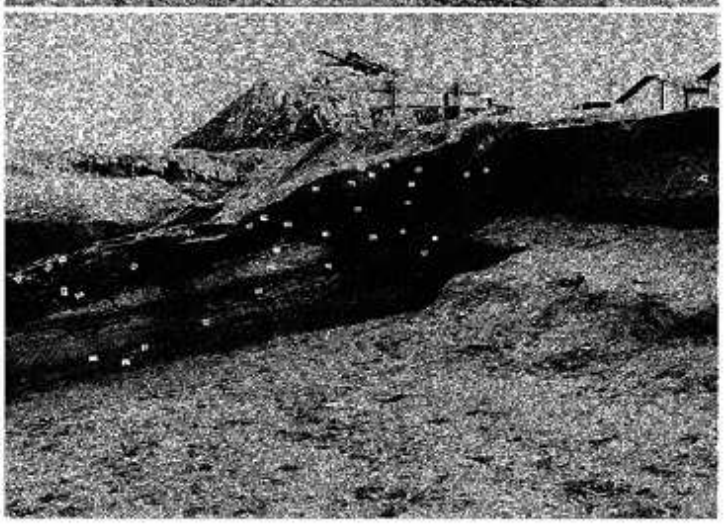
図版1

上 遺跡遠景(北から)
下 調査区全景(上が北)

SX230全景
（北西から）

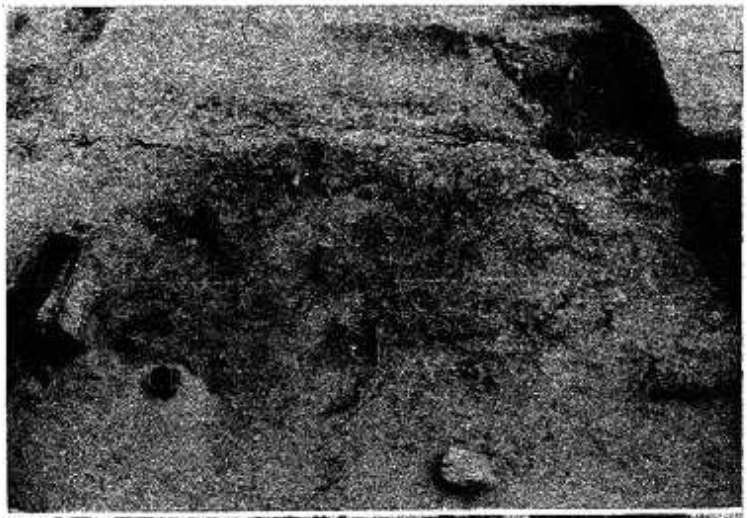


SX230断面
（東から）



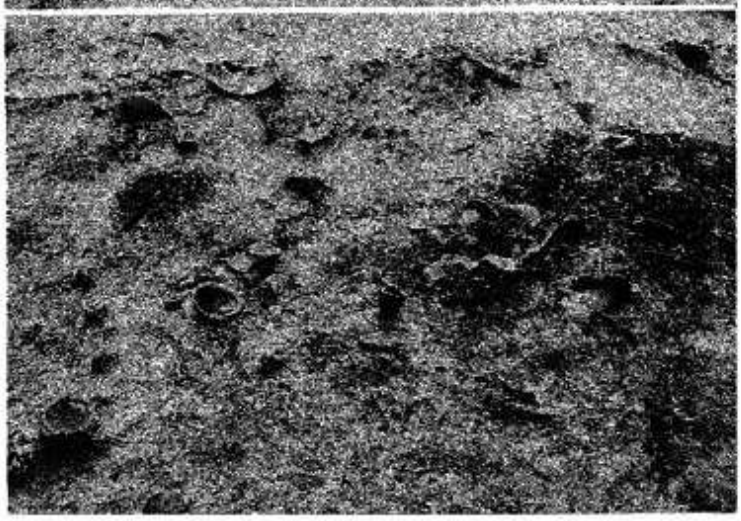
SX230断面
（西から）

図版2



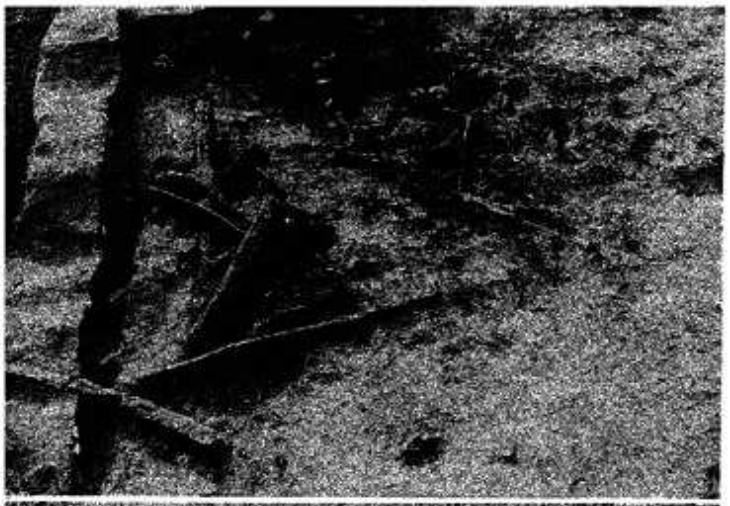
SX230(東区)
2層遺物出土状況
(北から)

SX230(東区)
11層遺物出土状況
(東から)

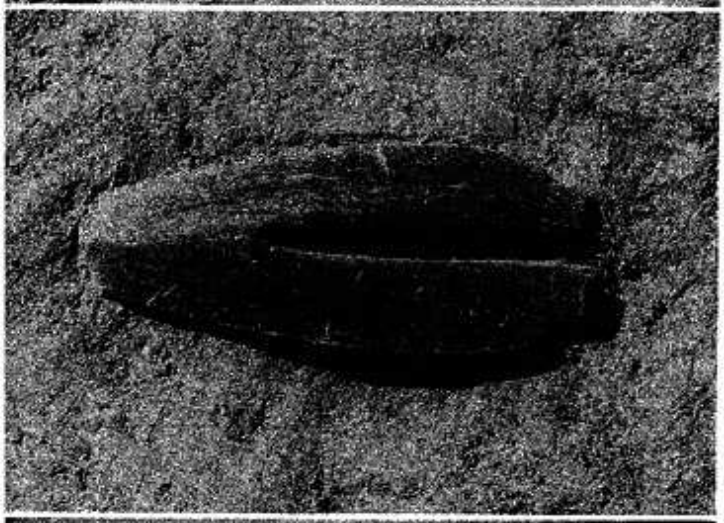


SX230(東区)
11層遺物出土状況
(北から)

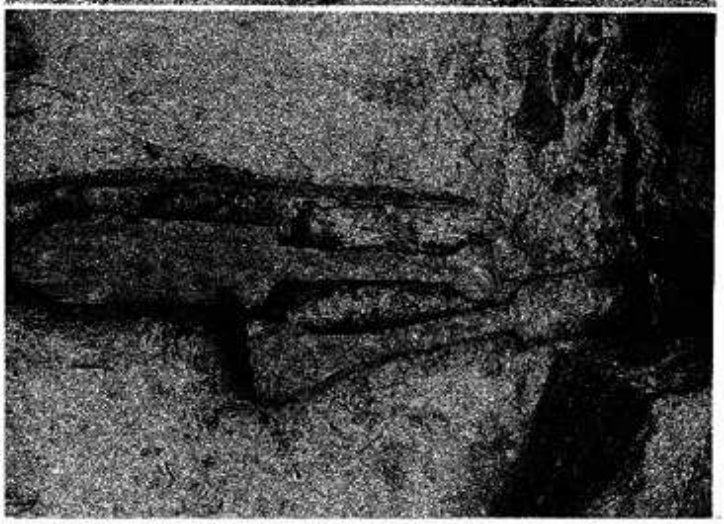
図版3



SX230(西区)
9層遺物出土状況
(北から)



勝柄又鍬出土状況



一木鍬出土状況

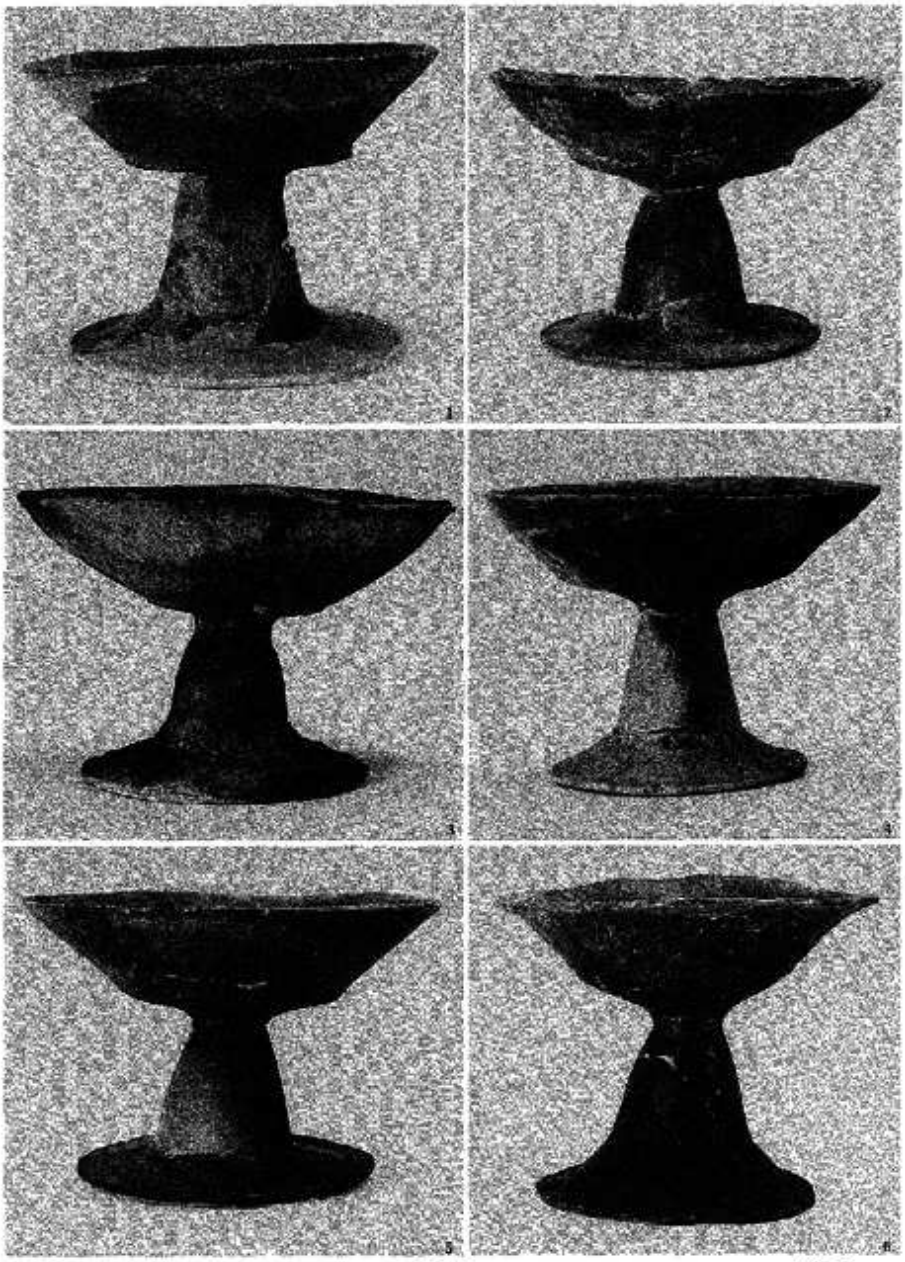
図版4

ザル出土状況

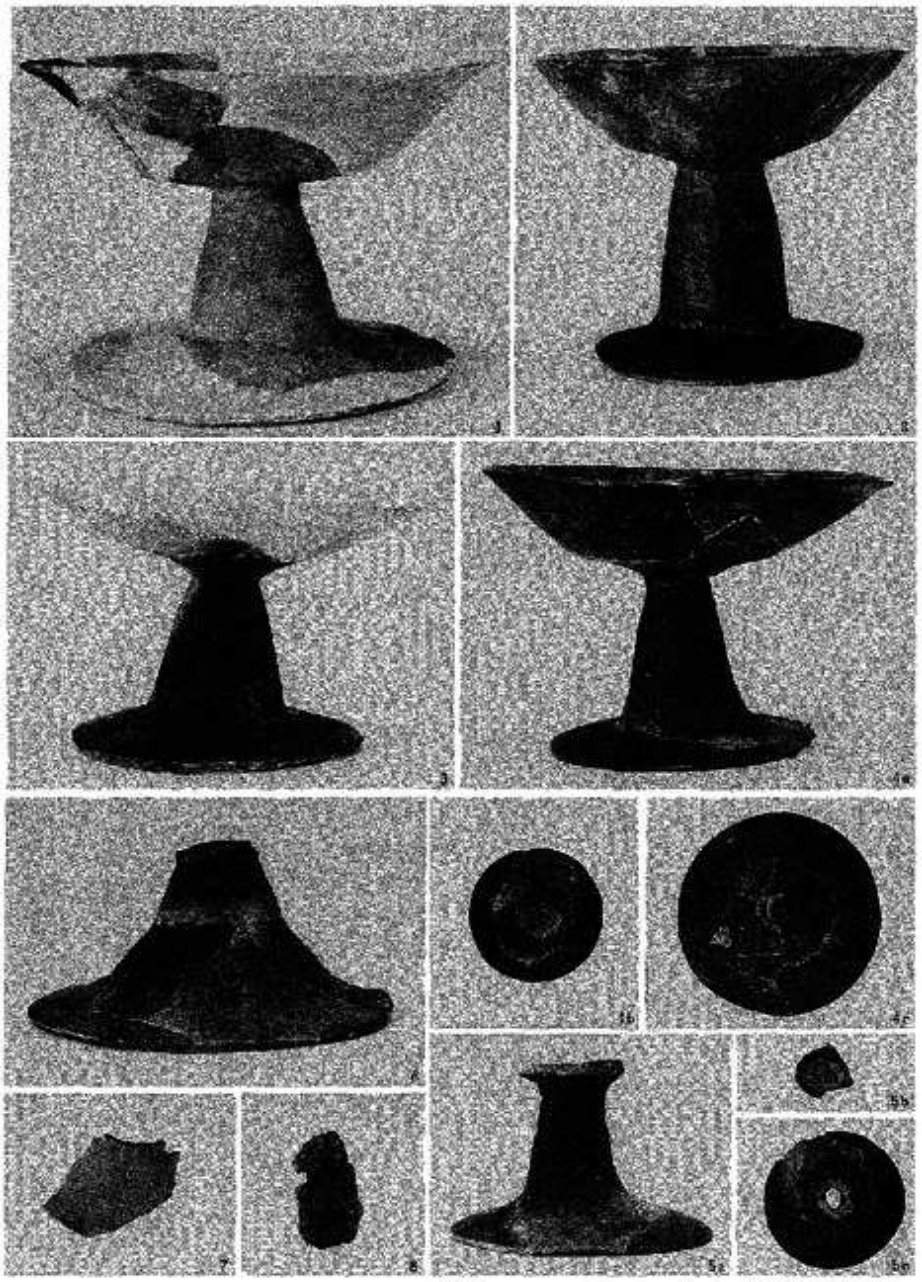
カゴ出土状況

ト骨出土状況

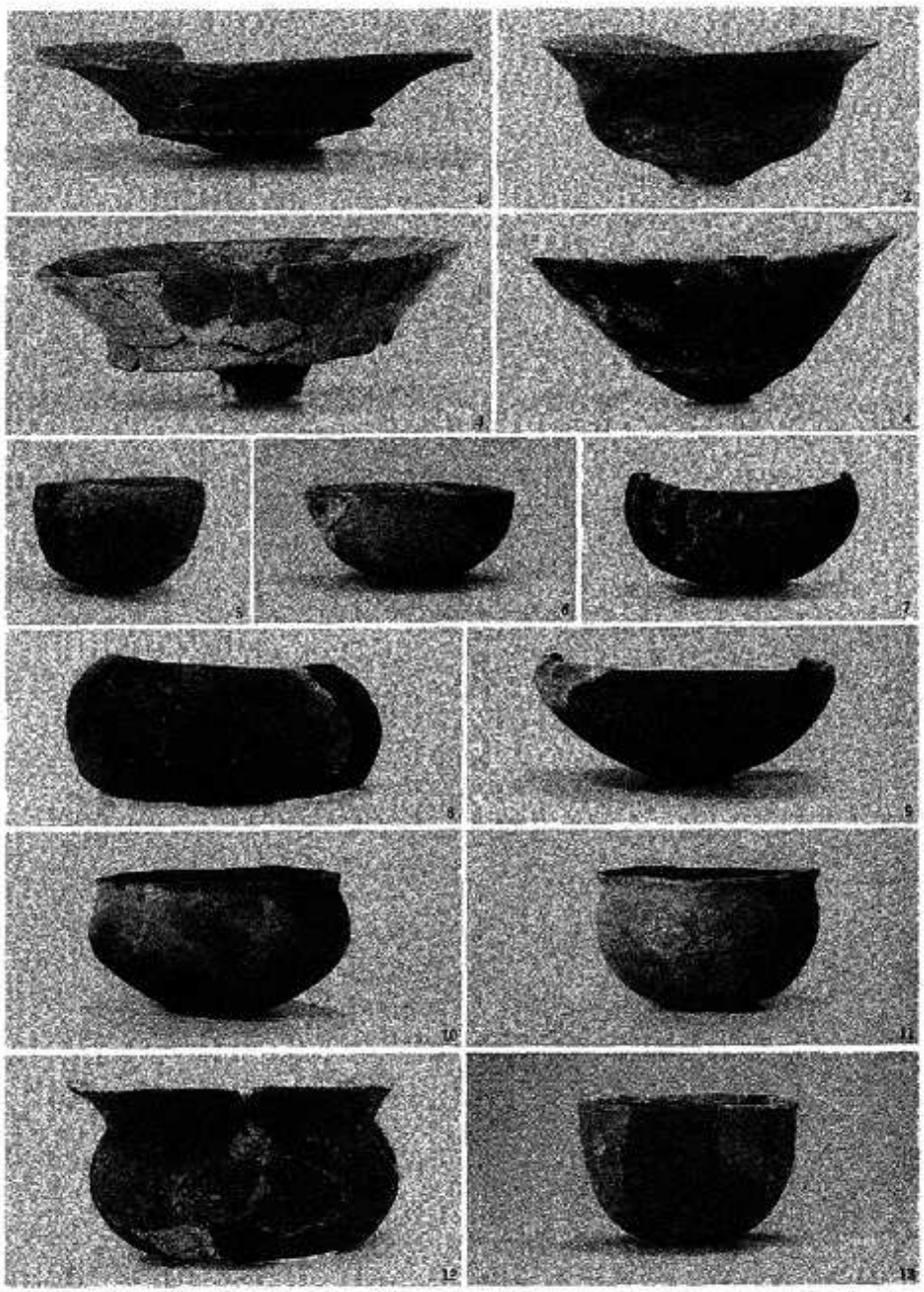
図版 5



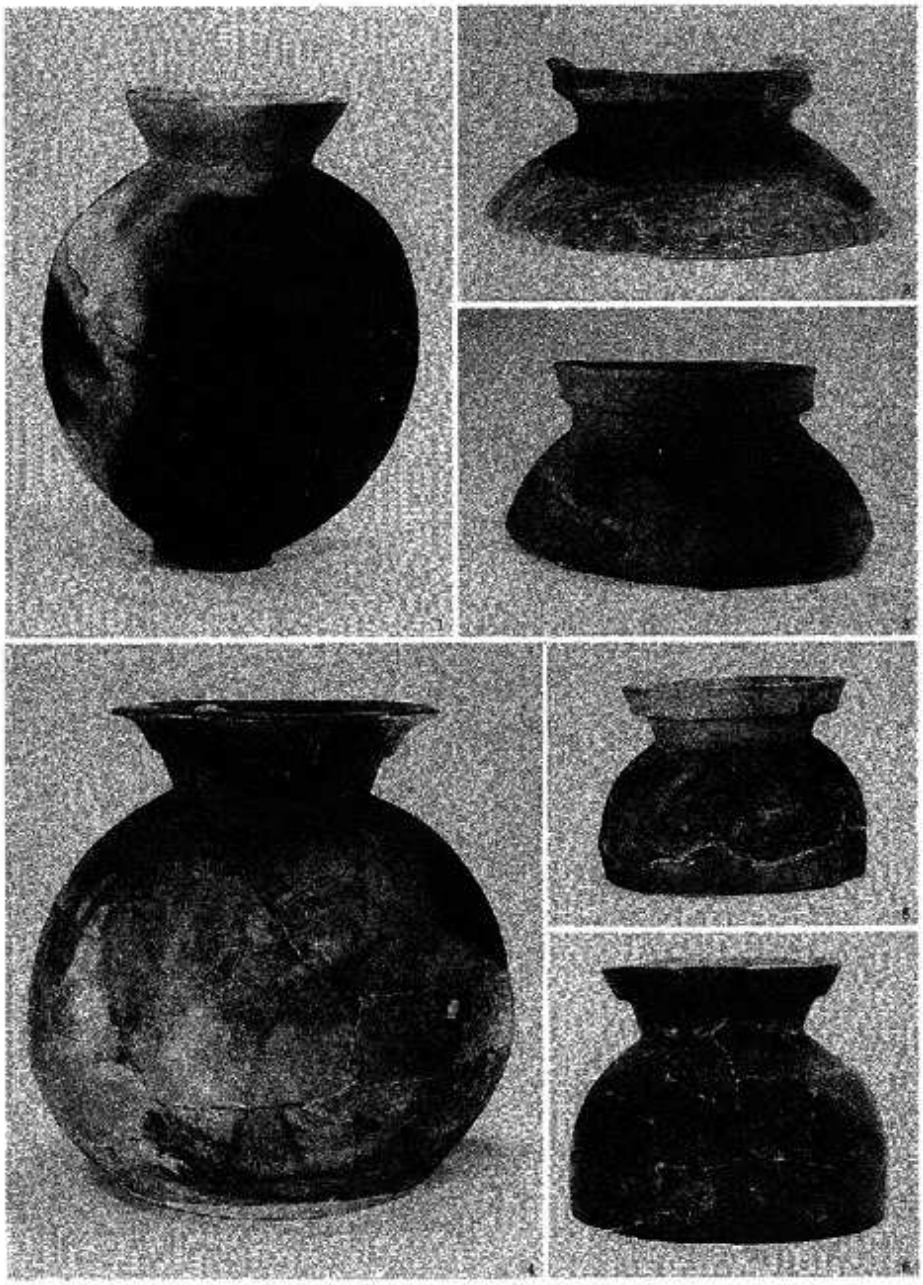
図版 6　　(縮尺不)



図版7　(4b、4c、5b、5cは縮尺1/2、他は縮尺1/4)

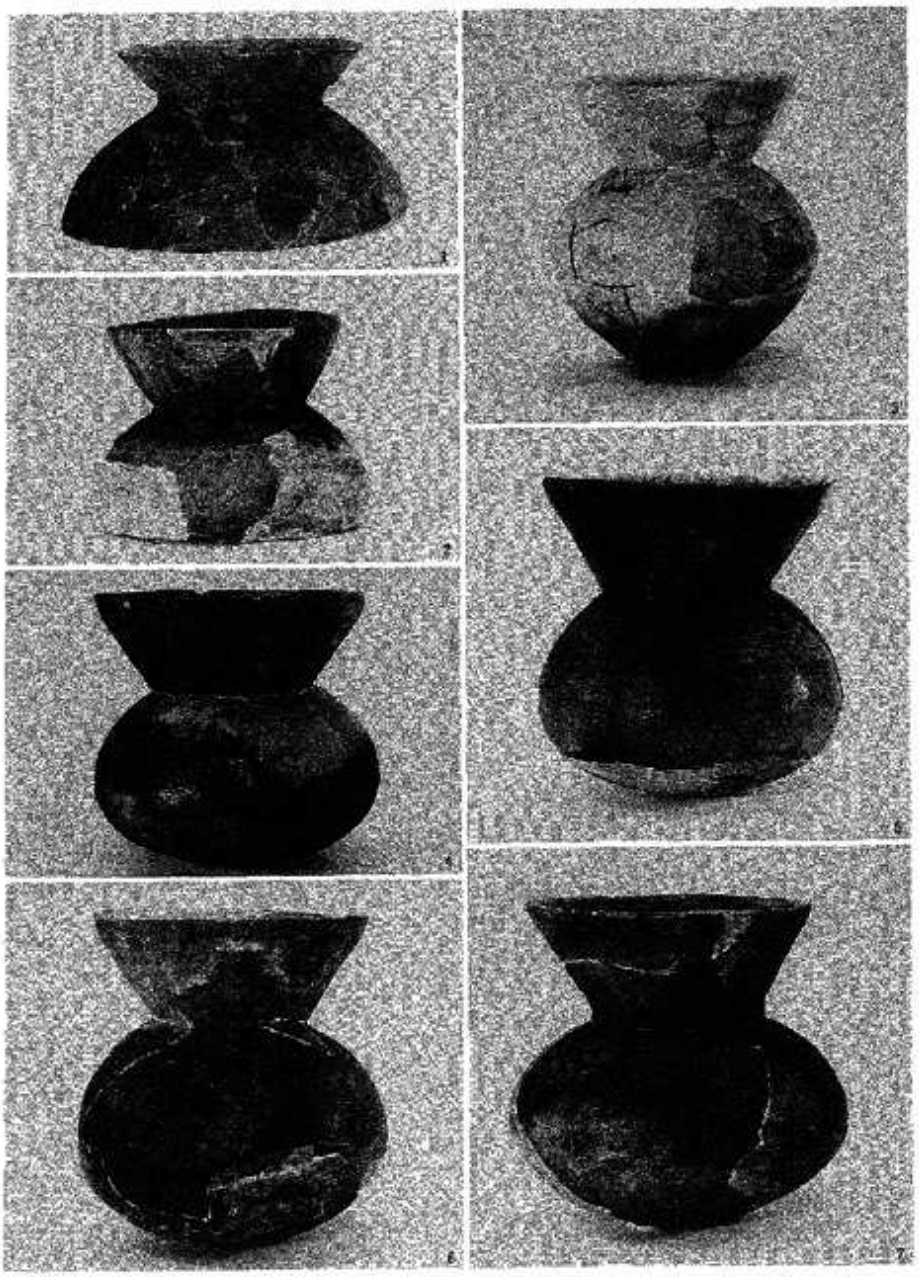


図版8　(縮尺なし)

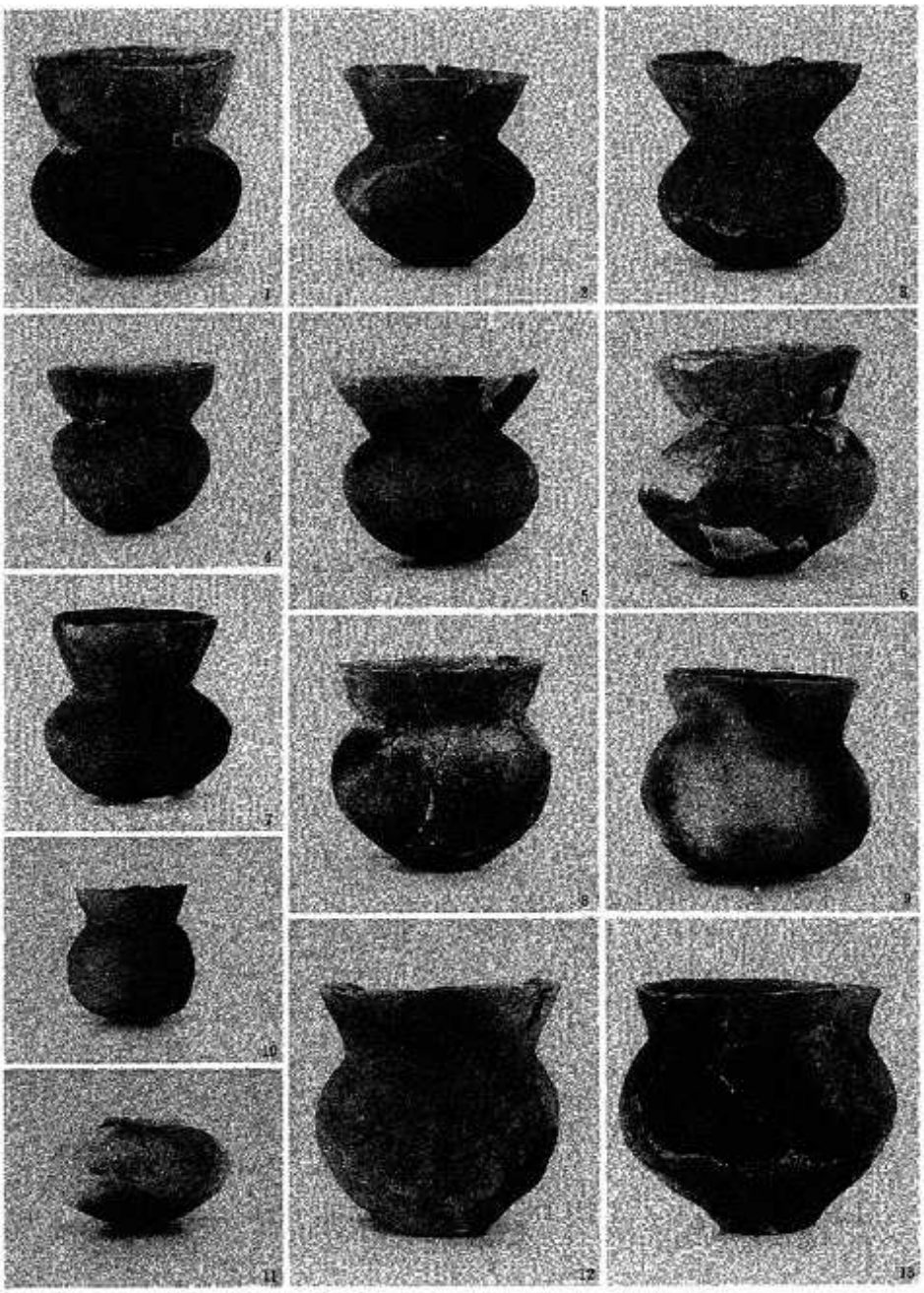


図版 9

(縮尺なし)

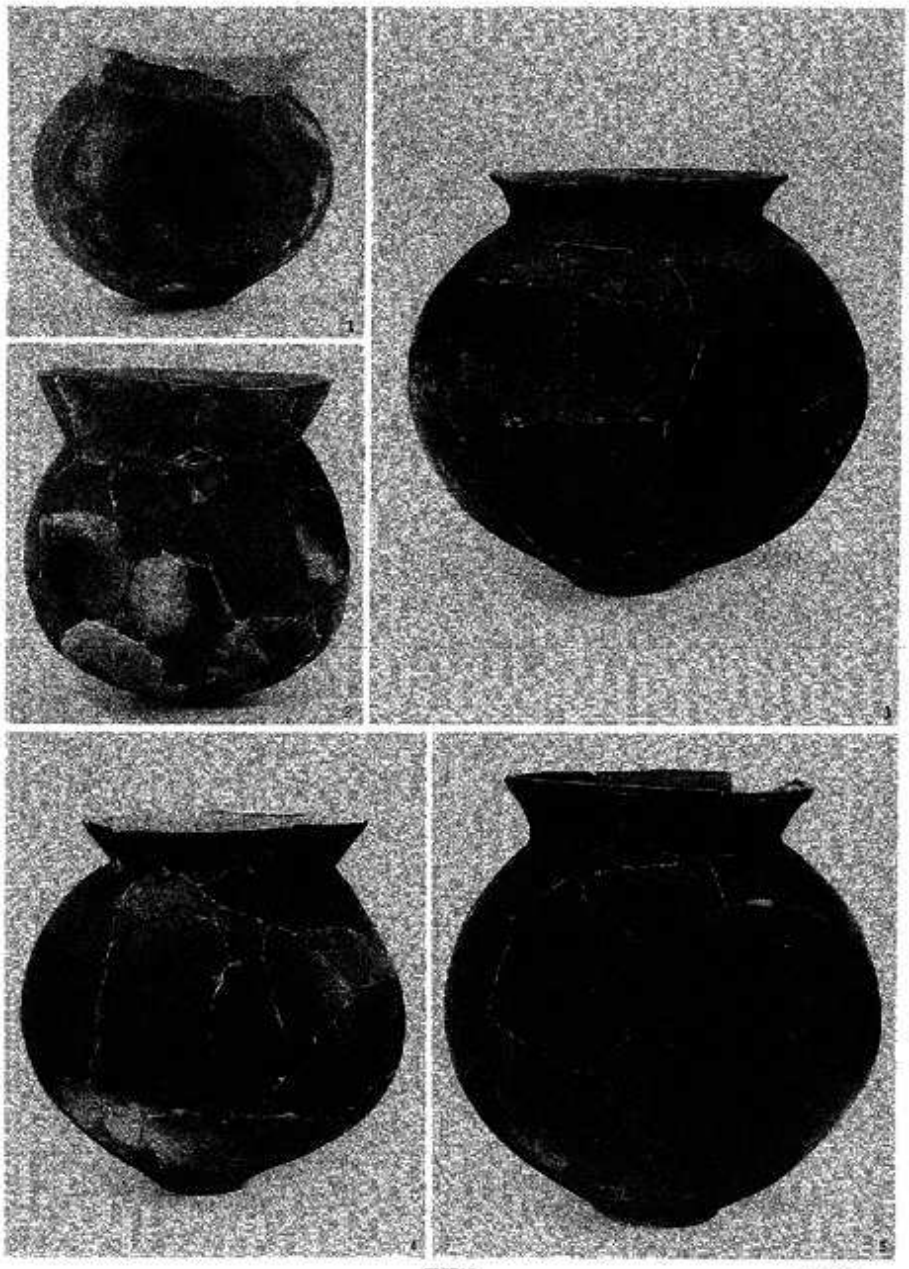


図版10　　（1は縮尺1/2，他は縮尺1/4）

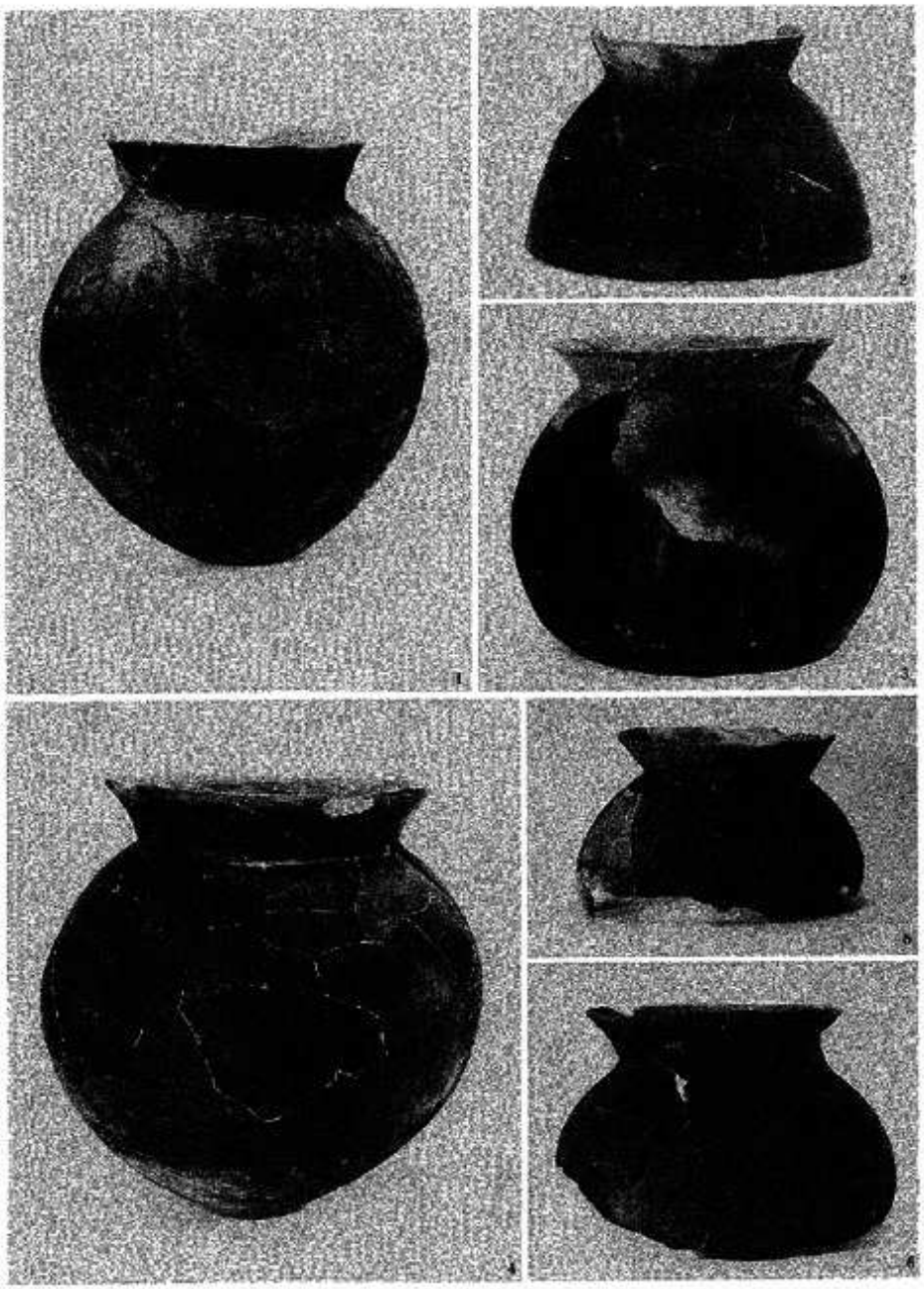


図版11

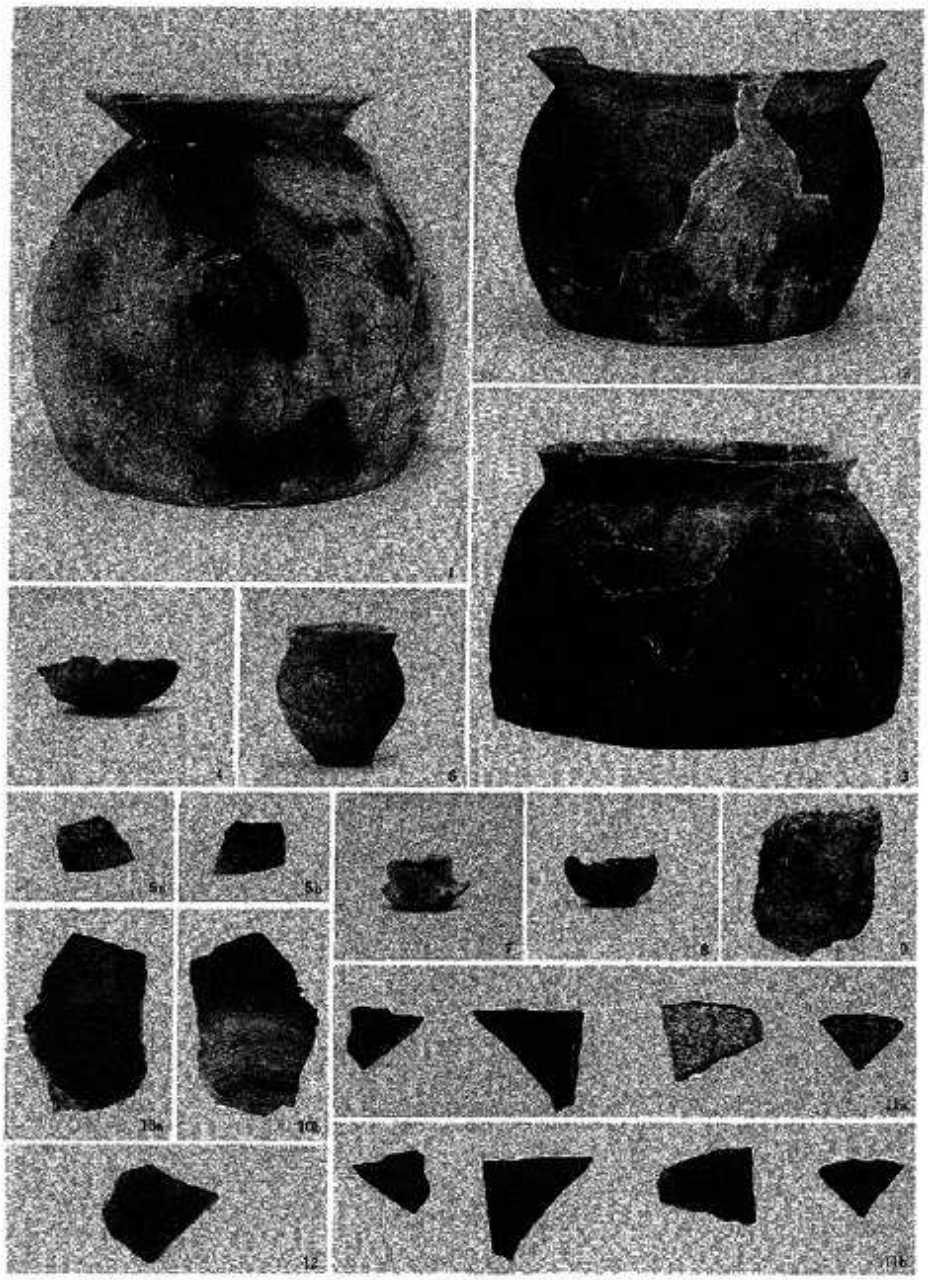
(縮尺なし)



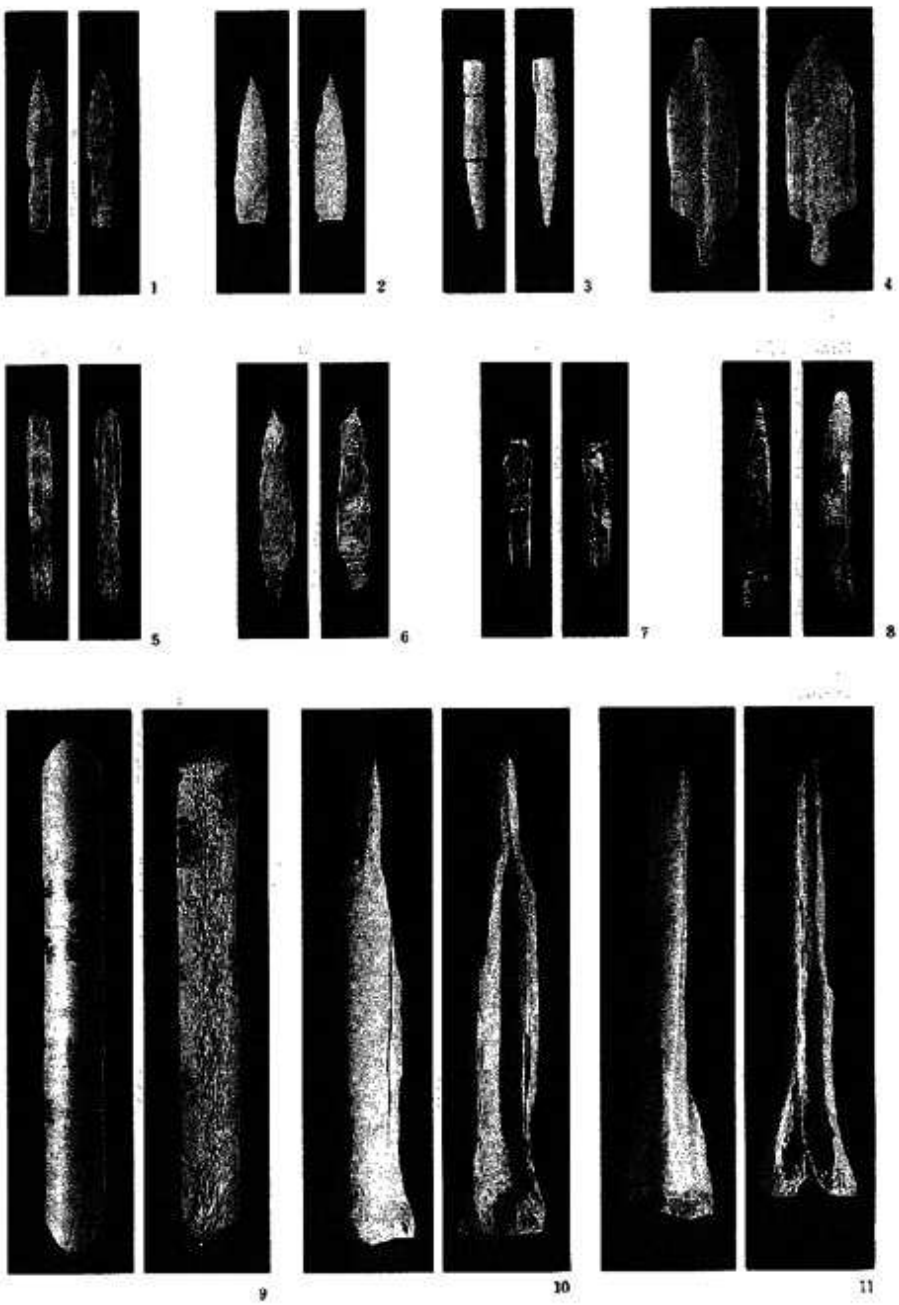
図版12 (縮尺1/1)



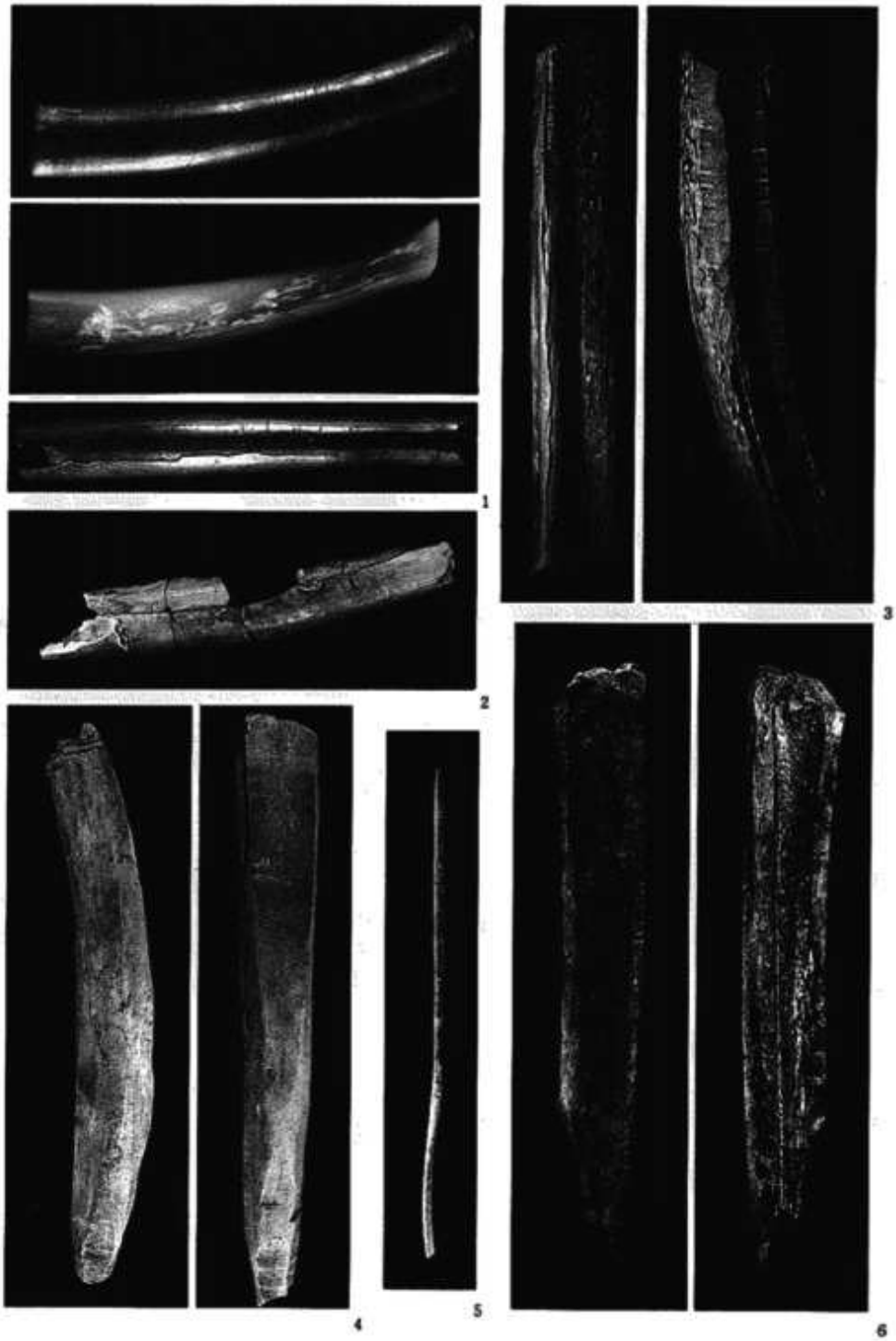
図版13



図版14　（1，2，3は縮尺大，9は縮尺大，他は縮尺大）

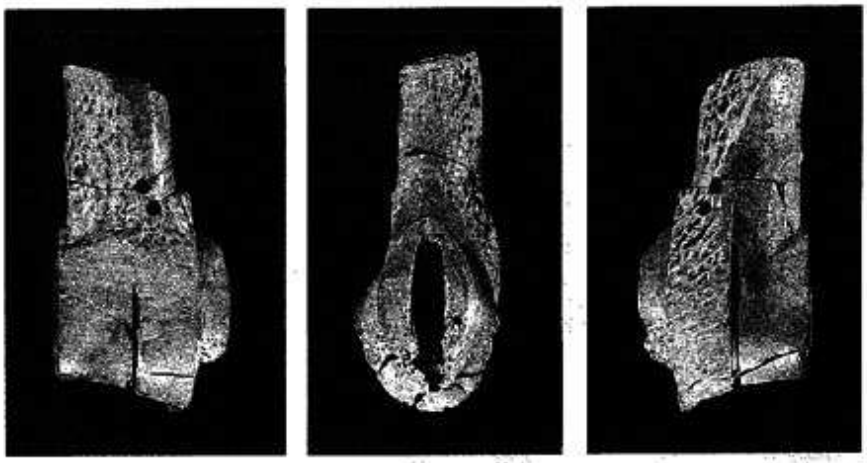


図版15　　(縮尺1/1)

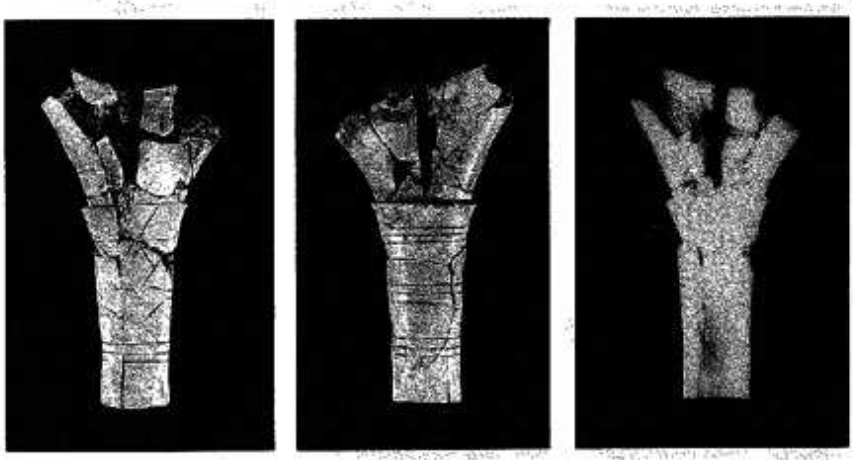


図版16

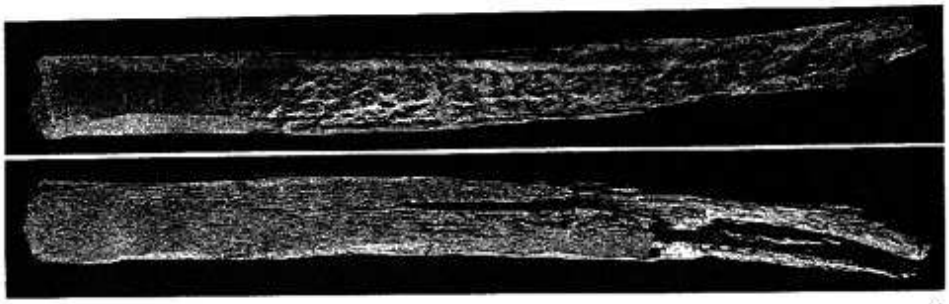
(縮尺1/1)



1

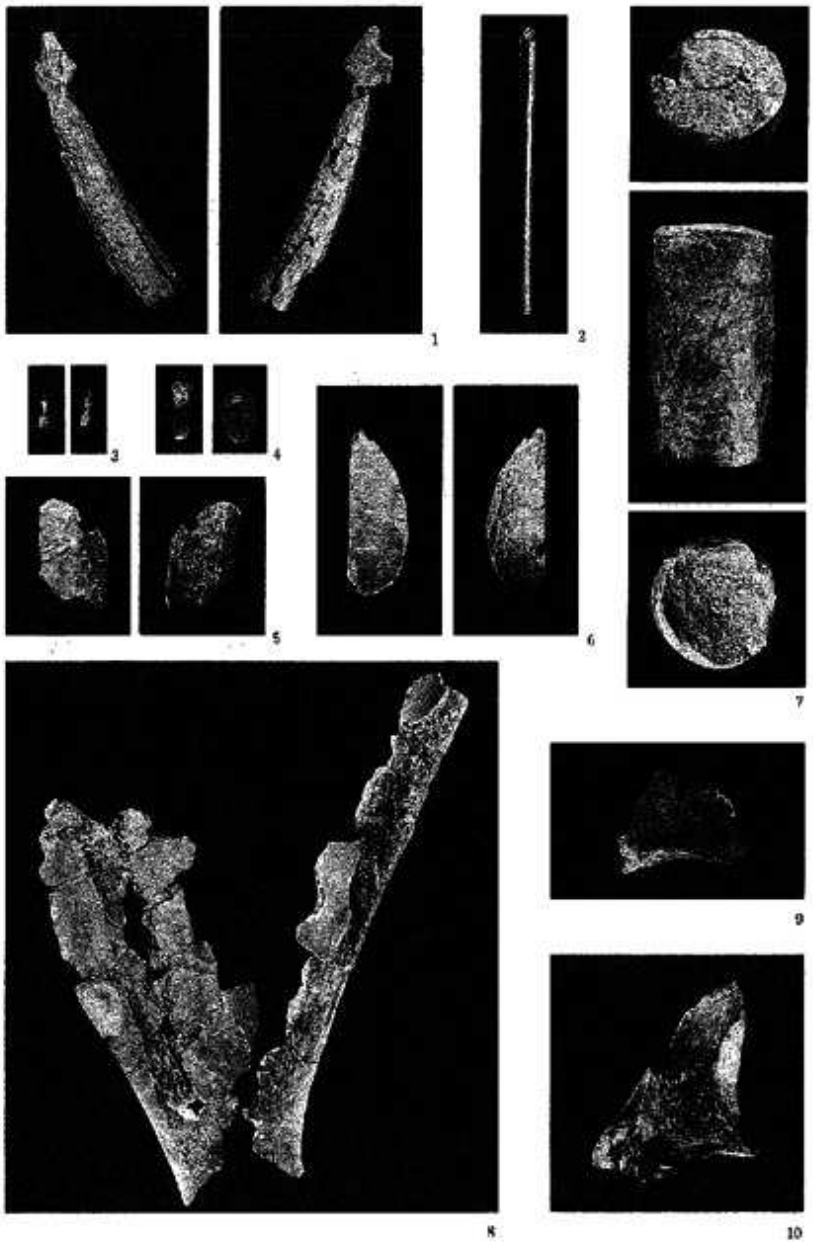


2

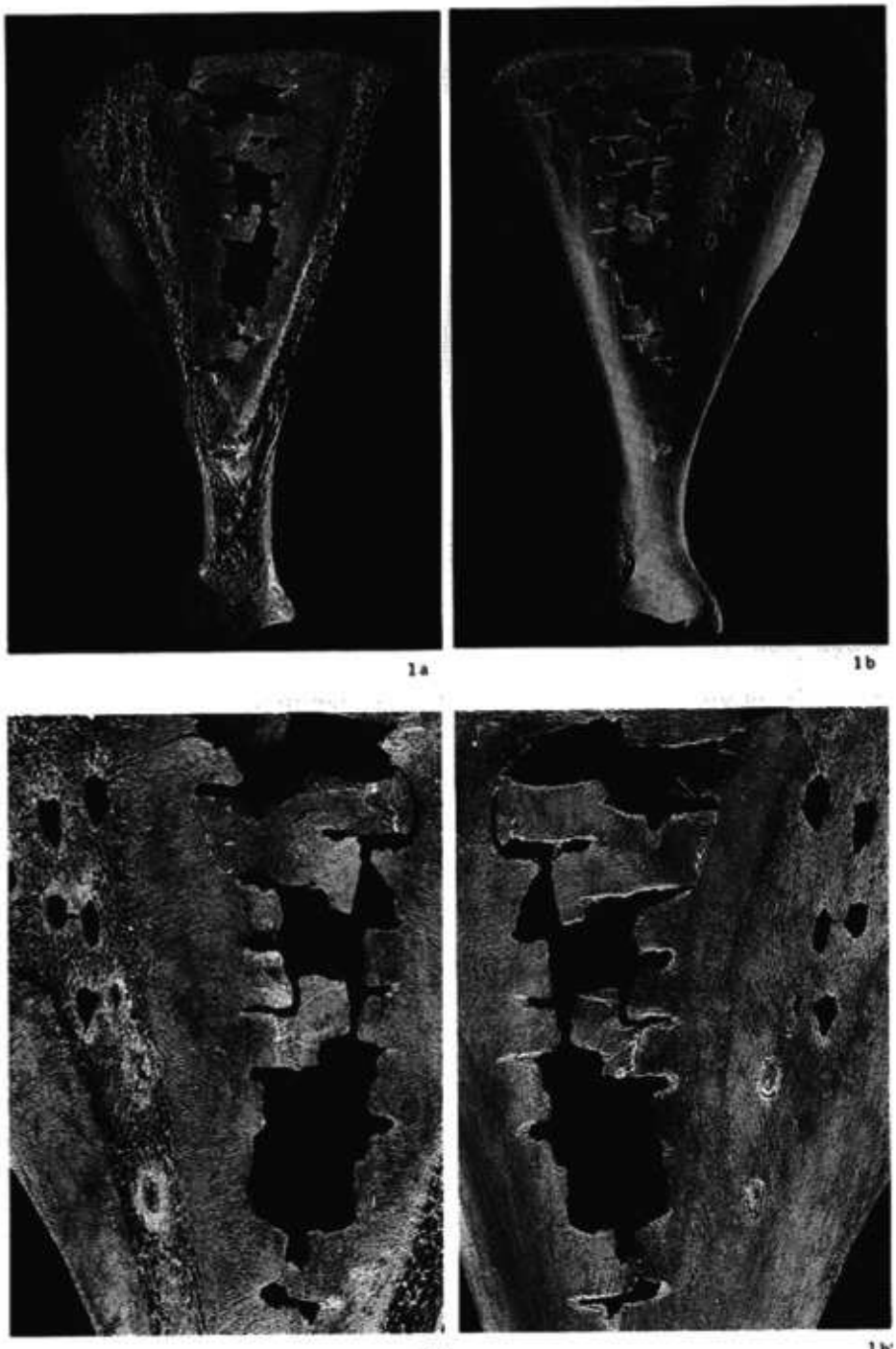


3

図版17　　(縮尺5分)



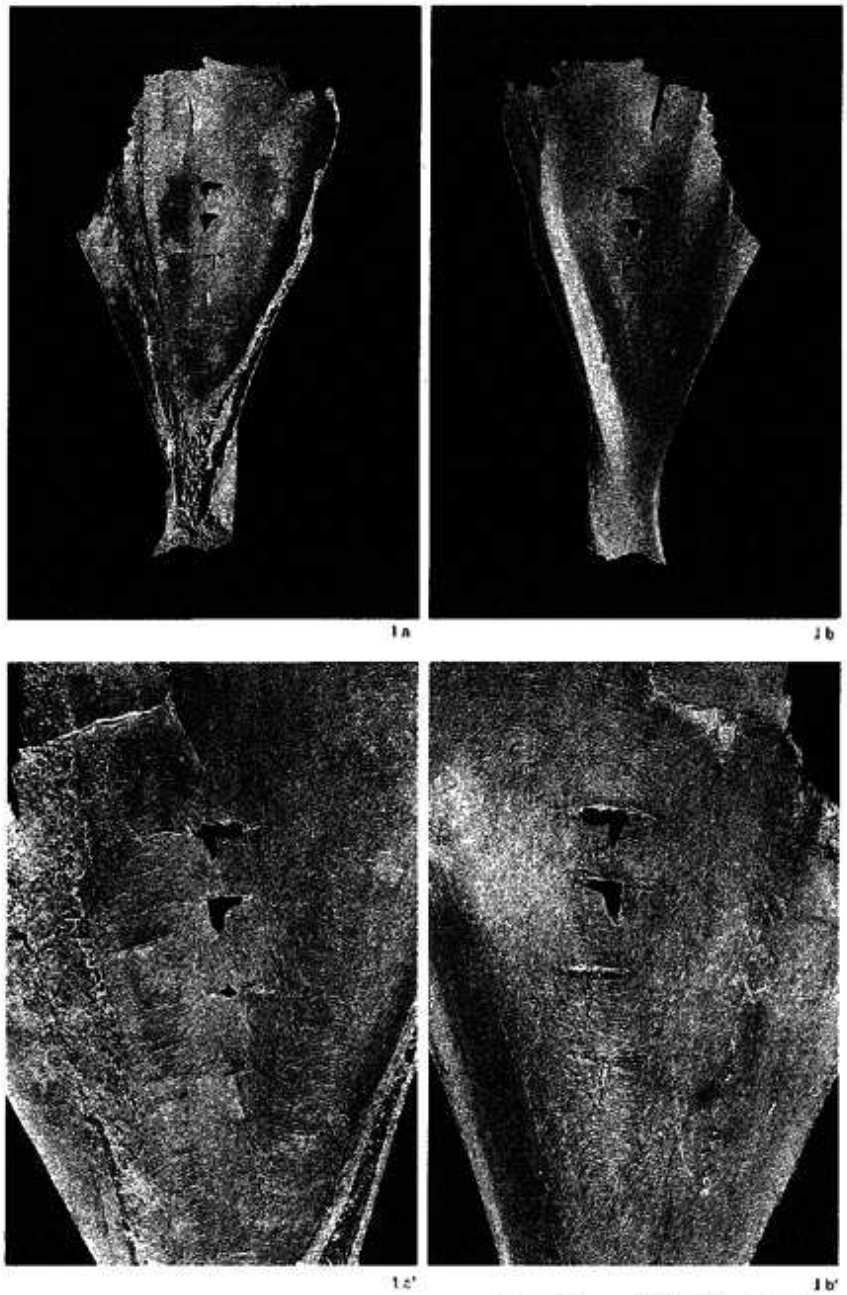
図版18



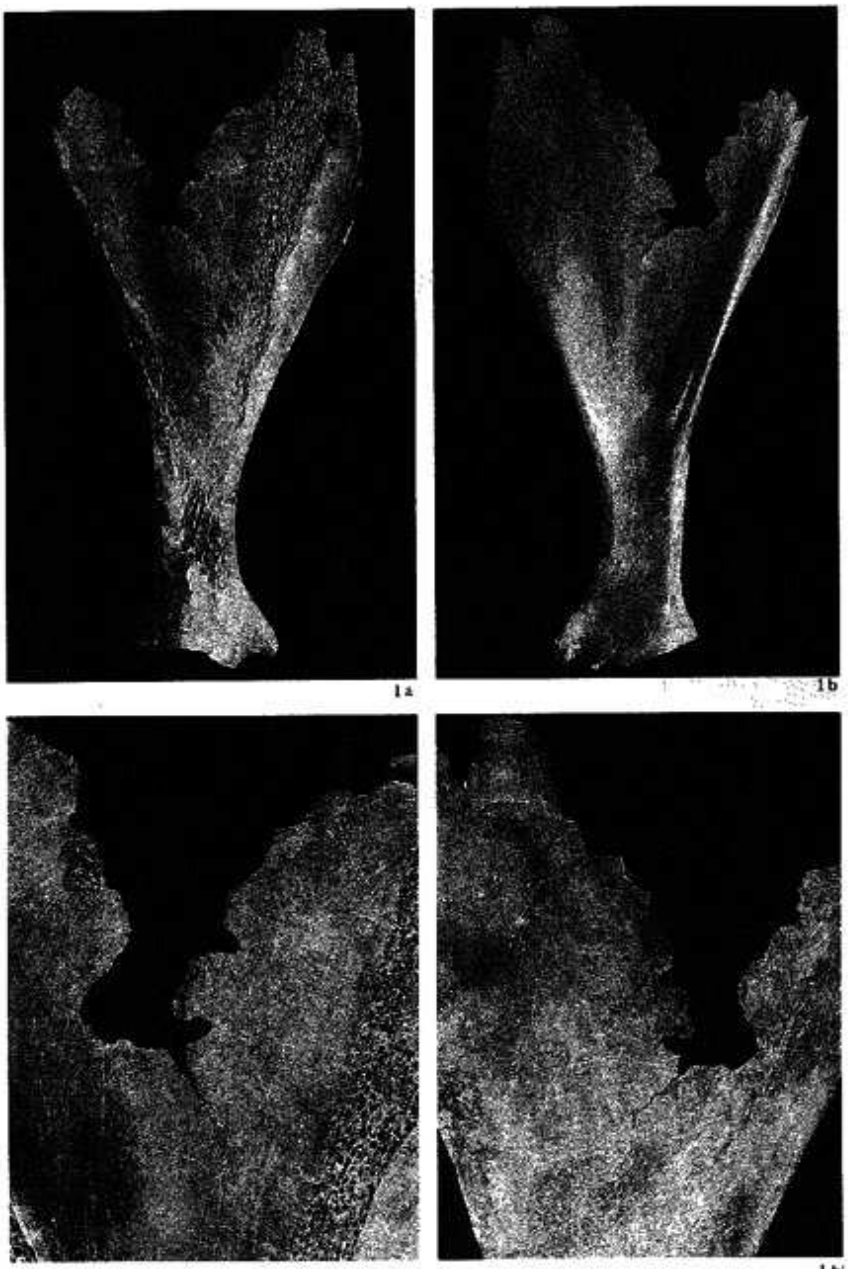
1a　1b

1a'　1b'

図版19　上左 背側面，上右 肋骨面 （縮尺1/1）
下左 焼灼部拡大，下右 焼灼部拡大 （縮尺任意）

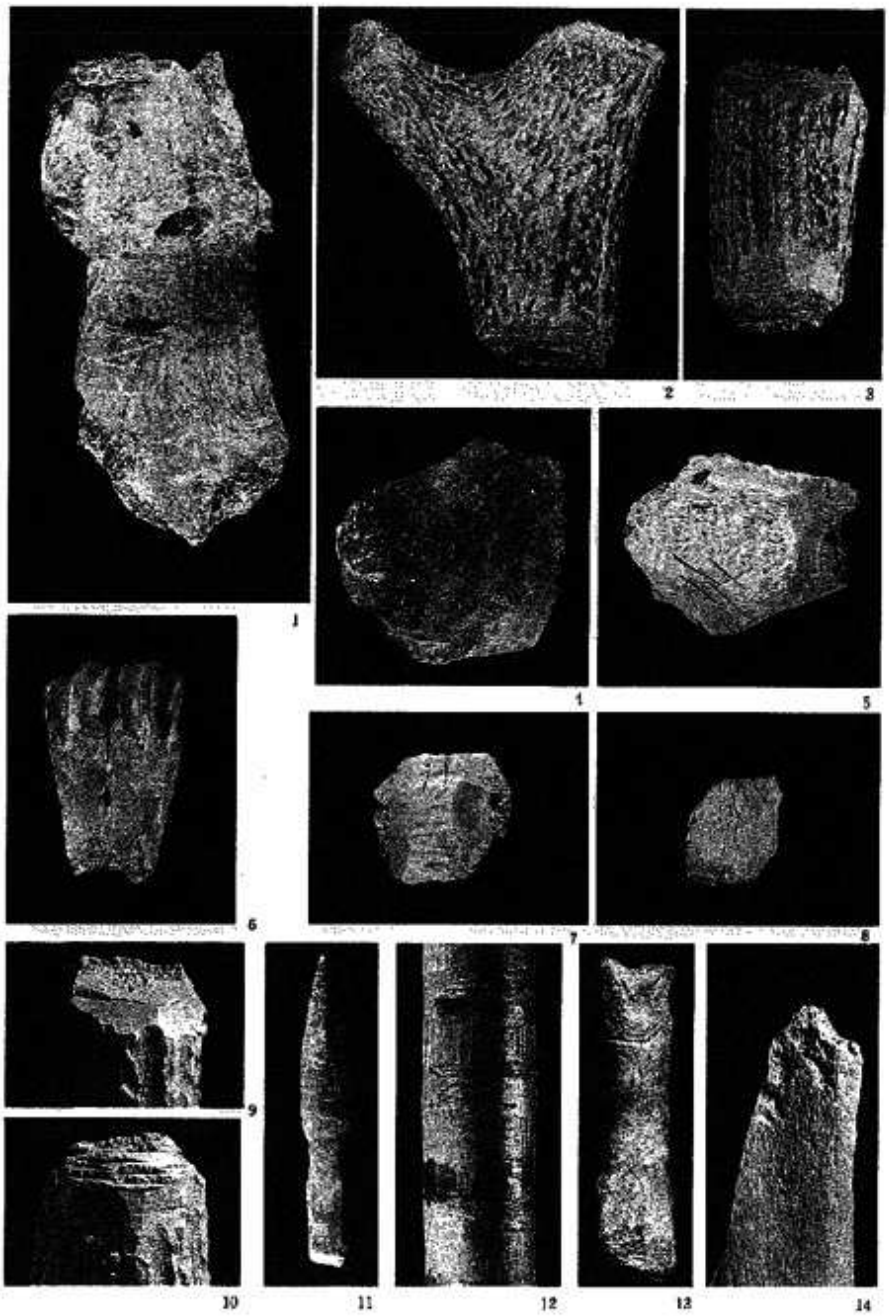


図版20　上左 背側面、　上右 肋骨面　（縮尺½）
下左 焼灼部拡大、下右 焼灼部拡大（縮尺任意）

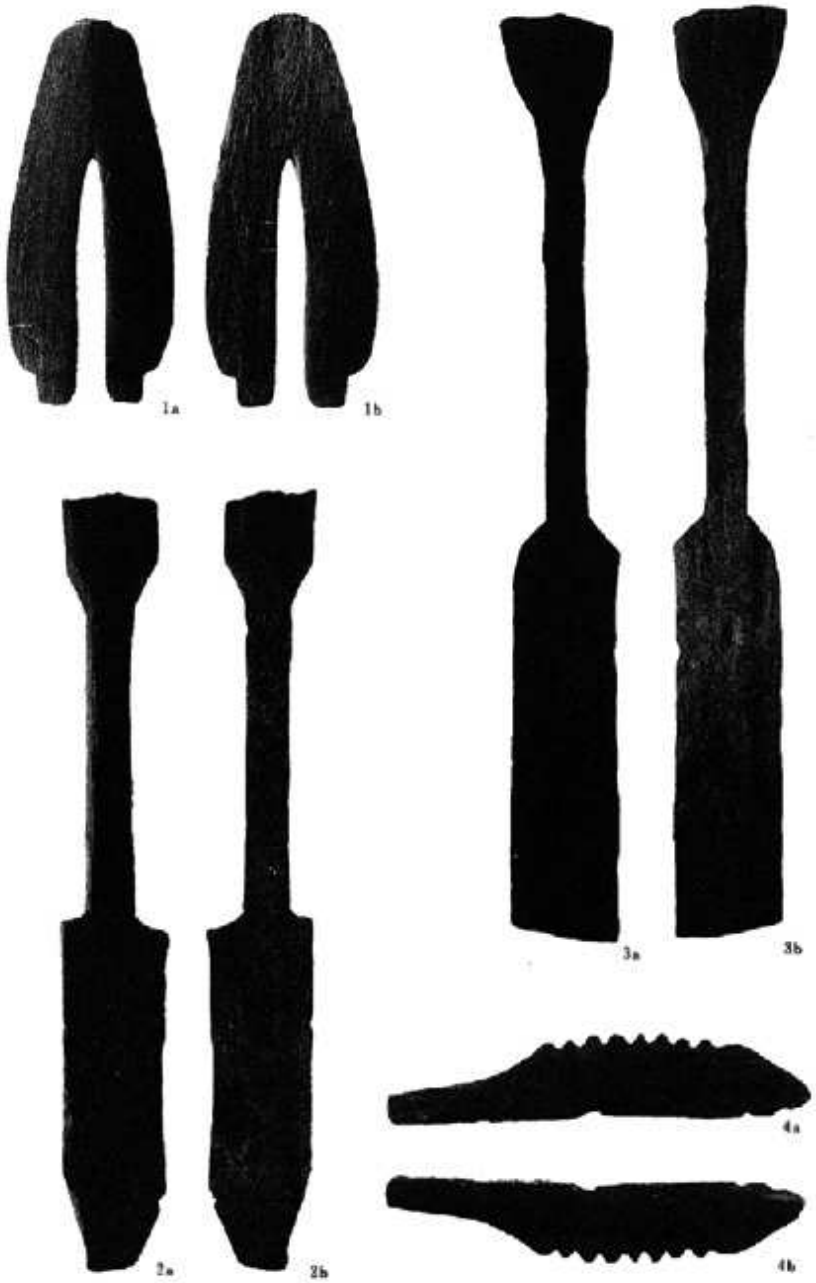


上左 背侧面，　上右 肋骨面　（縮尺片）
下右 烧灼部拡大，下右 烧灼部拡大（縮尺任意）

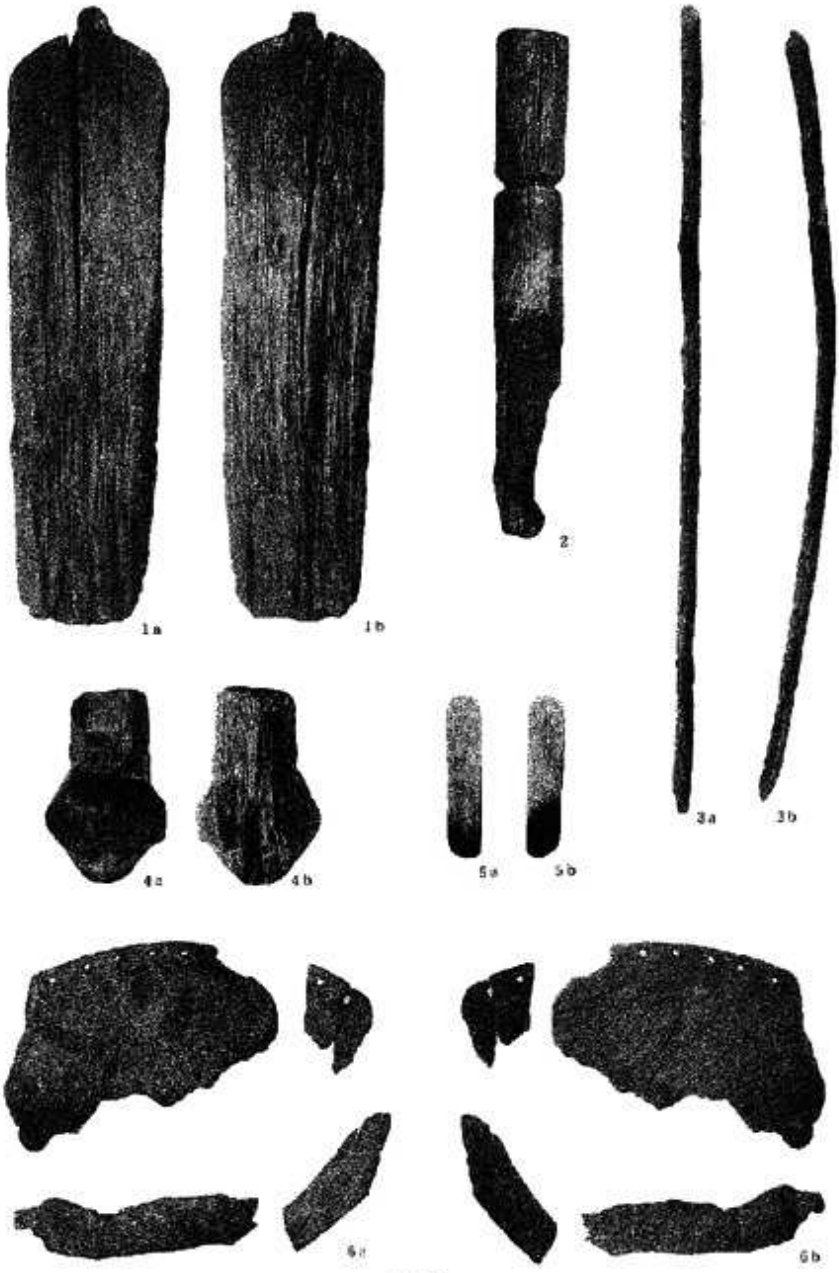
図版21



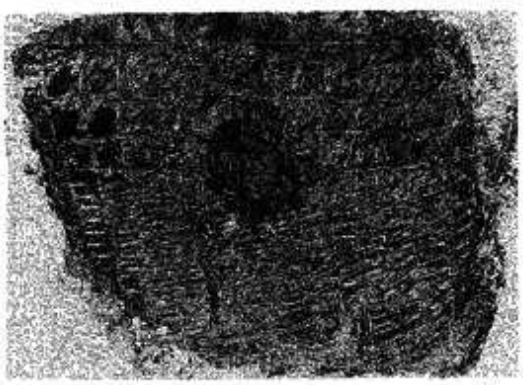
図版22　　（1～8縮尺⅓，9～14縮尺任意）



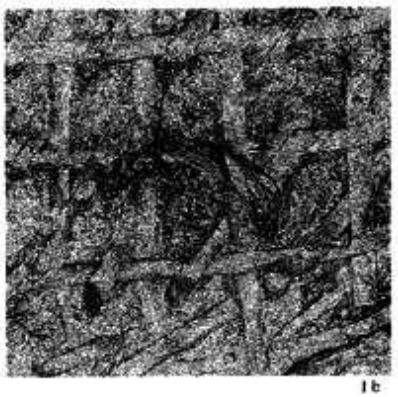
図版23



図版24



1a



1b

2a

2b

3

4a

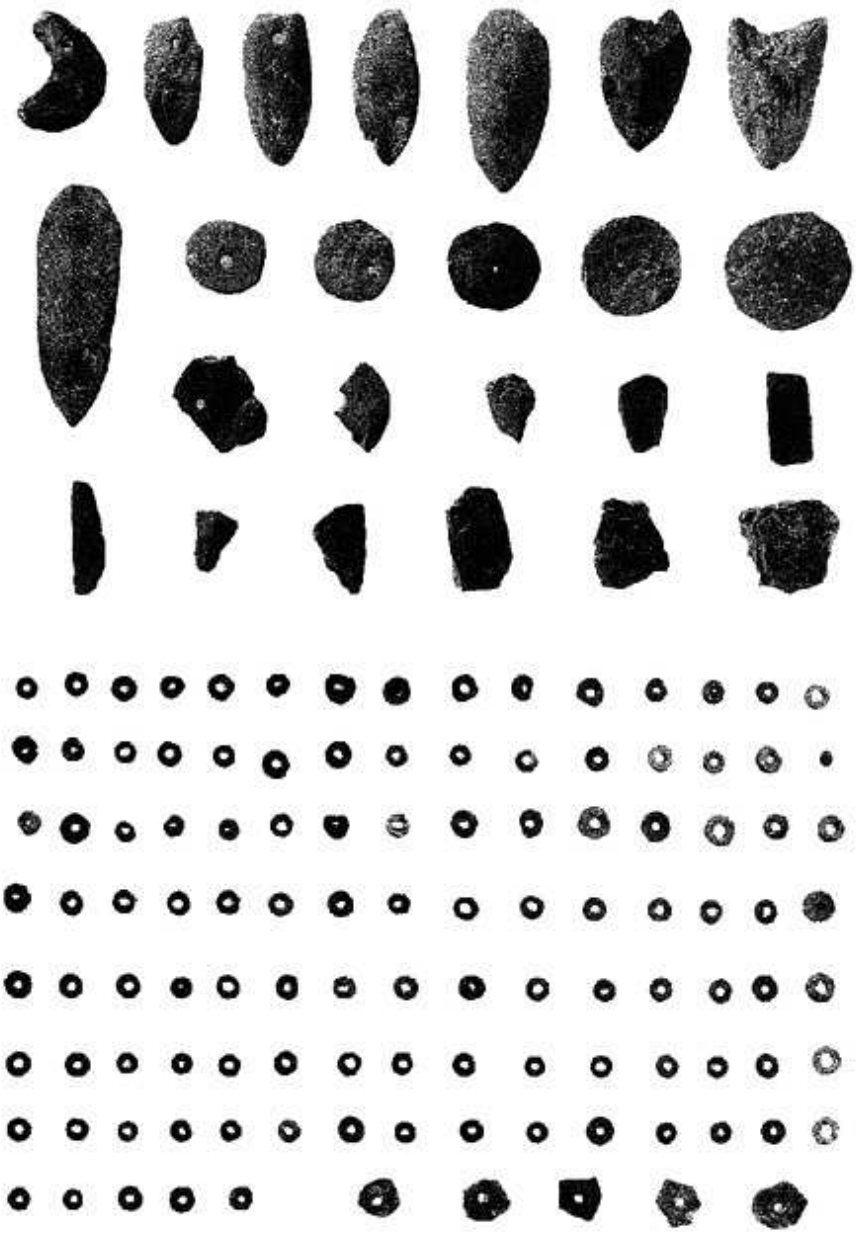
4b

5

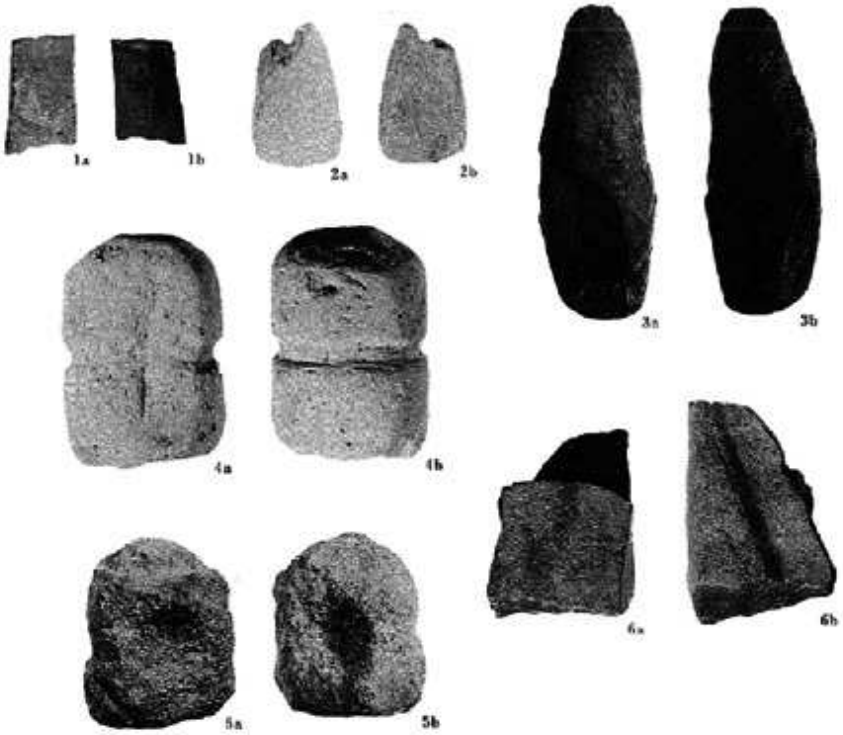
6a

6b

図版25

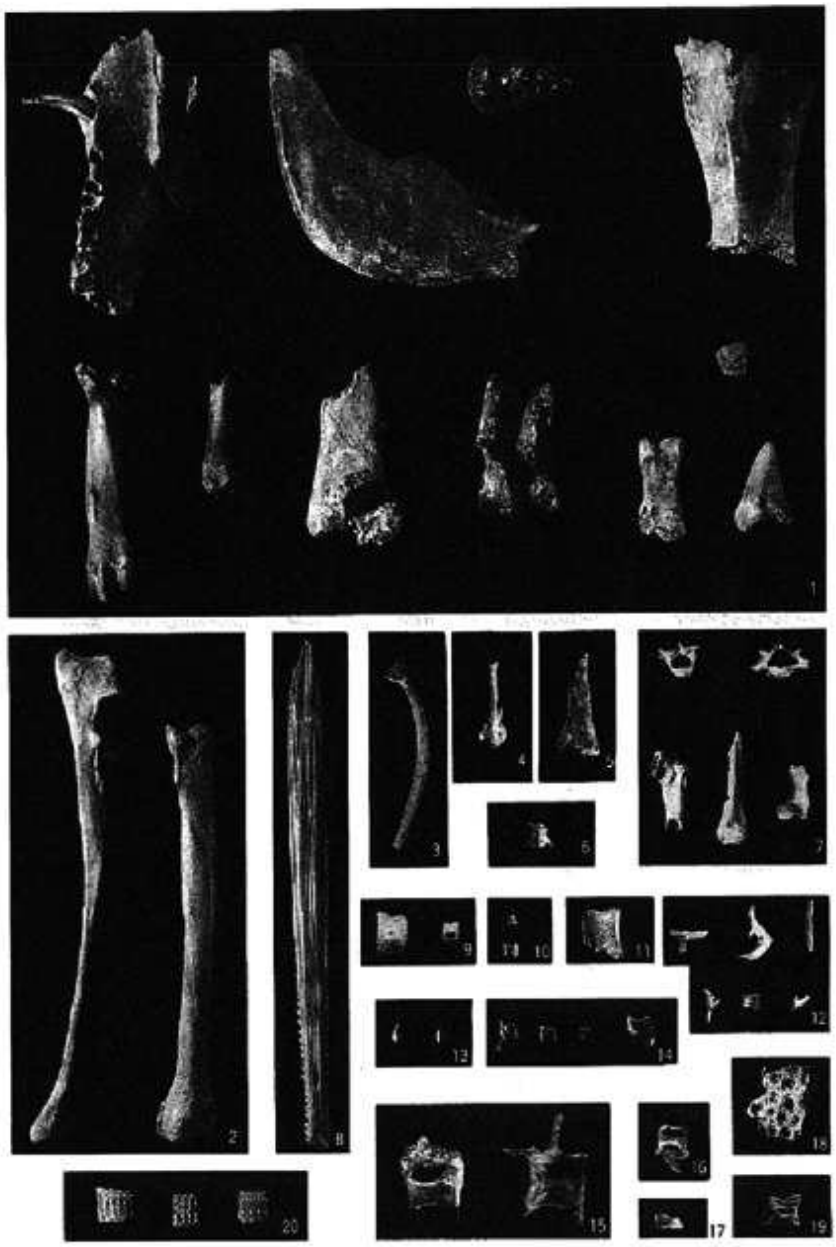


図版26 (約7/8)



図版27　　（上段縮尺不同、下段縮尺同）

図版28　ニホンジカ（縮尺小）



図版29

1イノシシ，2イヌ，3・5ガンカモ科，4種不明鳥類（縮尺外），
6ヘビ目，7カエル類，8・9エイ目，10ニシン科，
11サケ科，12コイ科，13ドジョウ科，14ウグイ属，
15カフサ，16スズキ，17マアジ，18クロダイ，
19マフグ科，20ムラサキウニ（縮尺外）